

<紹介>

清瀬義三郎則府, 『日本語文法新論—派生文法序説—』, 東京: おうふう (桜楓社), 185 ページ, 1989.

清瀬義三郎則府, 『日本語文法体系新論 派生文法の原理と動詞体系の歴史』, 東京: ひつじ書房, 300 ページ, 2013.

菅野裕臣

1.0. 日本の諸資料, クリストファー・I・ベクウィス Christopher I. Beckwith 教授によって提供された諸資料によれば, 清瀬先生の履歴と業績は, おおよそ次の如くである.

1.1. 履歴

清瀬義三郎則府 (きよせ ぎさぶろう のりくら) 先生 (1931 年 1 月 25 日—2017 年 7 月 30 日) は東京府東京市麴町区 (現東京都千代田区) 出身. 清瀬一郎 (弁護士, 東京裁判日本側弁護団副団長, 第 73 代文部大臣 [第 3 次鳩山内閣], 第 49-50 代衆議院議長) の三男.

1954 年京都大学文学部言語学科卒業, 渡米前に大東文化大学と国士舘大学講師, 1964 年米国インディアナ大学大学院ウラル・アルタイ学科博士課程修了, 1964 年からインディアナ大学で助手, 講師, 助教授を歴任, 1973 年インディアナ大学より Ph.D. (哲学博士) を受ける (博士論文は “A Study of the Jurchen language and Script in the Hua-I I-Yü, with Special Reference to the Problem of its Decipherment”). 1974 年カリフォルニア州立大学助教授に転じ, さらに 1979 年ハワイ大学に移って大学院助教授, 準教授, 正教授を経て, 1993 年 7 月 31 日退任し, ハワイ大学名誉教授となる. またオハイオ州立大学, ミネソタ大学, ミシガン大学, ウィスコンシン大学での夏期講習を担当した. 1989-91 年京都大学招聘教授. 1991-2001 年姫路獨協大学教授. 大阪外国語大学非常勤講師.

なお Oliver Corff 氏による Obituary: Gisaburo N. KIYOSE, 1931–2017 が PIAC (常設国際アルタイ学会) の以下のサイトに掲載されている.

<http://www.altai.org/orbituary-gisaburo-n-kiyose-1931-2017/>

1.2. 業績

- 1) Transitivity of Japanese Verbs, 29th December 1967, Modern Language Association of America, [unpublished conference paper], ページ未詳.
- 2) Conjunctive, Suppositional, and Semblative Copulae in Japanese, 25th April 1969, 22nd Annual Kentucky Foreign Language Conference, [unpublished conference paper], ページ未詳.

- 3) Meaningless 'Conjugational Forms' in Japanese Grammar, 27th-30th December 1969, Modern Language Association of America, [unpublished conference paper], ページ未詳.
- 4) 「連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論」, 『国語学』 86集, 東京: 国語学会, 1971年, 42-56頁.
<http://db3.ninjal.ac.jp/SJL/getpdf.php?number=0860560420>
- 5) *Fundamentals of Japanese* (with Toyoaki Uehara), Bloomington: Indiana University Press-Tenri University Press, 1974, xii+177+375+xiv pp.
- 6) *A Study of the Jurchen Language and Script: Reconstruction and Decipherment* (女真館訳語の研究), 京都: 法律文化社, 1977, 260 pp.
- 7) Labial Harmony and the Eight Vowels in Ancient Japanese, from the Altaistic Point of View. 『音声学会会報』 東京: 日本音声学会, No.171, 1982, 1-7頁.
- 8) 「満州語の口蓋化音 /ʃ/ と [ʃ] と」, 『言語研究』 86, 東京: 日本言語学会, 1984, 54-68頁. [English title in Abstract: Palatalized /ʃ/ and Palatalized [ʃ]] in *Manchu, Gengo Kenkyu: Journal of the linguistic Society of Japan*.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/gengo1939/1984/86/1984_86_54/_pdf/-char/en
- 9) 「平安朝波行子音P音論」, 『音声の研究・21集』, 東京: 日本音声学会, 1985, 73-87頁.
- 10) 「ウラル諸言語と日本語—カザール氏の比較とミラー氏の反論」, 『日本語の系統・基本論文集』, 日本語の系統を考える会編, 大阪: 和泉書院, 1985年, 140-165頁.
- 11) 「平安朝波行子音P音論. 修正」, 『音声学会会報』 181, 東京: 日本音声学会, 1986年, 26-27頁.
- 12) Universal Order of Meaningful Elements in Ural-Altaic, Korean, Japanese, and Some Other Languages, John H. Koo and Robert N. St. Clair (eds.), *Cross-Cultural Communication: East and West*, Seoul: Samji, 1986, pp. 377-386.
- 13) Tunguz and Other Elements in the Languages of the Three Kingdoms. *Korean Linguistics* 4., 1986, 17-26.
- 14) 『日本語の系統・基本論文集』, 日本語の系統を考える会編, 大阪: 和泉書院, 1986年, x+18頁.
- 15) 「上代日本語のが行音鼻濁音」, 『音声の研究・22集』, 東京: 日本音声学会, 1988年, 35-50頁.
- 16) 「日本語の膠着語的性格—日本語の動詞は活用などしない(上・下)」, 大修館, 『月刊言語』, 17:3, pp.86-91; 17:4, 1988, 72-86頁.
- 17) 『日本語文法新論・派生文法序説』, 東京: 桜楓社, 1989年, 2版 1993年.

- 18) 「日本語の母音組織と古代音価推定」, 『言語研究』, 東京: 言語学会, 96号, 1989年, 23-42頁.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/gengo1939/1989/96/1989_96_23/pdf-char/en
- 19) 「現代日本語動詞接尾辞組織考—伝統文法批判」, 『姫路獨協大学外国語学部紀要』, 3, 1990, 153-167頁.
- 20) 『日本語学とアルタイ語学』, 東京: 明治書院, 1991年, 385頁. [English title: Japanese Linguistics and Altaic Linguistics].
- 21) 「借用語源の錯綜と言語系統論—アルタイ諸語, 古朝鮮三国語, 日本語」, 『語源探求』3, 東京: 明治書院, 1991, 1-14頁.
- 22) 「所謂『音便形』の起源と成立—日本語動詞の形態素分析に寄する」, 日本語語源研究会編, 『語源探求』4, 東京: 明治書院, 1994, 298-264頁=左 67-101頁.
- 23) *Japanese Grammar: A New Approach*, Kyoto: Kyoto University Press (京都大学学術出版会), 1995. 289頁.
- 24) 「耶馬壹国の言語を論じ原日本語の故地に及ぶ」, 『語源探求』, 5: 1-43. 1997.
- 25) Dialectal Lineage from Jurchen to Manchu. *Central Asiatic Journal* 42.1, 1998, pp. 123-127.
- 26) 「日本語の語源と徐福の東渡」, 吉田金彦等編, 『ことばから人間を』京都, 昭和堂, 1998年, 42-55.
- 27) Puyö-Koguryö Languages: The Fourth Altaic Stock. Paper presented at the 41st PIAC Meeting, 1998, Helsinki (Not published).
- 28) 「所謂『二段活用的一段化』の起因—音韻変化が文法変化を」, 大阪外国語大学言語社会学会『Ex Oriente「えくす・おりえんて」』, 2, 1999, pp. 137-155.
- 29) Genealogical Relationship of Jurchen Dialects and Literary Manchu. *Central Asiatic journal* 44.2, 2000, pp. 177-189.
- 30) Long Vowels Transcribed into the Jurchen Script. 알타이학보 *Altai Hakpo, Journal of the Altaic Society of Korea*, 서울: 한국알타이학회, No. 11, June 2001, pp.27-40.
- 31) 「身体語彙「耳」, 「頬」などは上代語起源では?」, 『語源探求 20周年記念特別号』, 2001, 110-111頁.
- 32) 「倭人と和語の渡来」, 『姫路獨協大学外国語学部紀要』, 2001, 14:133-148.
- 33) 「上代語『加行延言』又は『久語法』の本質」, 日本語の伝統と現代刊行会編, 『日本語の伝統と現代』, 大阪: 和泉書院, 2001, pp. 229-249.
- 34) The Relationship among the Languages of the Korean Three Kingdoms, Proto-Japanese, and Tungusic, Based on Historical Sources. Paper presented at the 47th International Conference of Eastern Studies, Tokyo. *Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, XLVII, 2002.

- 35) 『満洲語文語入門』 (河内良弘と共編著), 京都大学学術出版会, 2002年, 222頁, 2版 2005年, 3版 2014年.
- 36) 「日本の中のコリア語の地名」, 吉田金彦, 糸井通彦編, 『日本地名学を学ぶ人のために』, 京都: 世界思想社, 2004, 234-241頁.
- 37) 「日本語と朝鮮語・高句麗語」, 吉田金彦編, 『日本語の語源を学ぶ人のために』. 京都: 世界思想社, 2006, 161-169頁.
- 38) Beckwith, Christopher I. と共著, The Silla Word for ‘Walled City’ and the Ancestor of Modern Korean. 『アルタイ語研究 – *Altaistic Studies*』, 東京: 大東文化大学, 2006, No. 1, pp. 1 - 10.
- 39) Beckwith, Christopher I. と共著, On the Words for Animals in the Japanese Zodiac. 『アルタイ語研究 – *Altaistic Studies*』, 東京: 大東文化大学, 2008, No. 2, pp. 1-18.
- 40) 『日本語文法体系新論・派生文法の原理と動詞体系の歴史』, ひつじ書房, 2013年, 300頁.
- 41) Beckwith, Christopher I. と共著, Apocope of Late Old Chinese Short *ä: Early Central Asian Loanword and Old Japanese Evidence for Old Chinese Disyllabic Morphemes. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 71.2, 2018, pp. 145-160.

以上のもの以外に筆者の把握している小論があり, また把握していないものもあると思われるが, 割愛することとする.

1.3. 清瀬先生の無二の親友クリストファー・I・ベクウィス Christopher I. Beckwith 教授 (インディアナ大学グローバル・国際研究学部中央ユーラシア学特別栄誉教授 Distinguished Professor of Central Eurasian Studies, School of Global & International Studies, Indiana University) は PIAC (常設国際アルタイ学会) その他に宛てた 2017 年 8 月 10 日付の手紙で次のように述べておられる (菅野裕臣訳)¹.

「親しい同僚, 学生, 友人の皆さん,

残念なことに, 清瀬義三郎則府教授が日本東京で 86 歳でお亡くなりになったという非常に悲しいお知らせをしなければなりません. 清瀬先生の御遺族は芳枝夫人と御子息ジョセフ Joe と幸之進 Ken 及び彼らの御家族です.

清瀬先生は 1931 年 1 月 25 日生まれ, 2017 年 7 月 30 日にお亡くなりになりました. 清瀬先生は 1954 年に京都大学で文学修士号を得られ, 常にこの学派の忠実な支持者でした. 清瀬先生は女真語 (中世満洲語) とその文字についての草分け的研究によりインディアナ大学で Ph.D. (哲学博士. ウラル・アルタイ研究) を得ました.

清瀬教授は偉大な学者でした. 清瀬先生は博士論文を修正増補して *A study*

of the Jurchen language and script: reconstruction and decipherment (女真館訳語の研究), 京都: 法律文化社, 1977) という書物を出版しましたが, これはツングース言語学の分野で今も基礎的な業績です. 清瀬先生の他の書物には『日本語学とアルタイ語学 *Japanese Linguistics and Altaic Linguistics*』, 東京: 明治書院, 1991, *Japanese grammar: a new approach* (Kyoto: Kyoto University Press, 1995), 及び『日本語文法体系新論・派生文法の原理と動詞体系の歴史』, ひつじ書房, 2013年があります. 清瀬先生の鋭い精神は, 多くの永い間受け入れられてきたが, 疑わしい理論を疑問に付し, 扱われた諸問題に科学的解決を提案しました. 日本語, 女真語, 東ユーラシアの他の諸言語に関する清瀬先生の本と論文は絶対的に重要なものです.

清瀬先生はインディアナ大学, カリフォルニア州立大学, ハワイ大学, 姫路獨協大学の教員を務め, ハワイ大学の名誉教授として退職しました. 清瀬先生は他の多くの大学でも教え, 世界中の学会やシンポジウムで研究発表をしました.

清瀬教授は50年にわたってわたくしの親密な友人でした. わたくしたちは1966年に大学間協同委員会夏季言語大学CIC (Committee on Institutional Cooperation) summer language instituteで会いましたが, その時わたくしはオハイオ州立大学の学部生であり, 清瀬先生はインディアナ大学大学院生でした. 部分的には清瀬先生のおかげでわたくしはインディアナ大学大学院を受け, わたくしたちは少しの間フェローの学生でしたが, 後に清瀬先生はカリフォルニアに移るまで, その上数年間わたくしの先生でした.

わたくしたちは3篇の論文を共に書きましたが², そのどれもがわたくしたちが銀座のライオンでビールを飲み, 日本のスナックをつまみながら初めに討議し, ナプキンに概略を書きこんだものであり, 銀座のライオンを「銀座ライオン研究所」と呼んだのでした. 清瀬先生はユニークで, 鋭く, ユーモラスで, 親切な方でした. わたくしは先生がお亡くなりになったことをことのほか寂しく思います.

敬具

クリス Chris

クリストファー・I・ベクウィス Christopher I. Beckwith

インディアナ大学グローバル・国際研究学部中央ユーラシア特別荣誉教授

47405 アメリカ合衆国インディアナ州ブルーミントン

Distinguished Professor of Central Eurasian Studies, School of Global & International Studies, Indiana University

Bloomington, IN 47405, USA」

1.4.クリストファー・I・ベクウィス教授はわたくしへのメールで次のようにも述

べておられる。「わたくしたちはわたくしが漢語の学部生だった時以来 50 年以上もの間の友人でした。わたくしたちは 1965 年にミネソタ大学で行われた (大学間協同委員会) 夏期共同言語課程 CIC (Committee on Institutional Cooperation) joint summer language program で会いました。わたくしは 2 年間の漢語の授業を取り (また有名な趙元任と E・G・プリブランク E.G. Pulleyblank が教えていたコースを取りましたが)、清瀬先生は日本語を教えていました。しかし清瀬先生は女真語を研究するインディアナ大学ウラル・アルタイ学科 (現在の中央ユーラシア学科) の大学院生でもありました。清瀬先生はわたくしが大学院生の時インディアナとその学科に移ることを決めた主たる理由のひとつでした。清瀬先生とわたくしは少しの間ともに学生でしたが、それからわたくしは清瀬先生について少し日本語を学び、清瀬先生はわたくしの博士号審査委員会にいました。しかしわたくしが博士論文を書いていた時には清瀬先生はインディアナ大学をすでに後にしていました。わたくしはマカーサー賞奨学金を貰った後清瀬先生がハワイ大学にいた時にそこで 1 年を過ごしました。それからわたくしが日本で研究をした時にはもちろん清瀬先生にほとんど会いましたが、1 回だけは数年前清瀬先生と奥様がマイアミに休暇で出かけ、わたくしの妻とわたくしがフロリダに遠からずやはり休暇に出かけ、わたくしたちは清瀬先生を訪ねてドライブしたのでした。」

1.5. わたくし菅野は清瀬先生のお名前は存じあげていたが、わたくし自身がアルタイ諸語には関心を失いかけていたこともあって、わたくしとははるかに遠い存在だった。ところがある時急に清瀬先生からわたくしに連絡があり、クリストファー・I・ベクウィス先生が国際交流基金の援助で 2001 年 8 月からの 1 年間日本に滞在なさる期間にベクウィス先生が従来あたためておられた構想を日本で実現すべく、朝鮮語に関してベクウィス先生にお手伝いするようにとのことで、この時以来ベクウィス先生が来日なさる折には必ずお会いして親しくお話をお伺いすることとなった。ある時は清瀬先生、ベクウィス先生、わたくしの 3 人でよく話し込み、ある時は「銀座ライオン研究所」でわたくしも共にビールを飲み、清瀬、ベクウィス両先生の学問的計画の一部を傍でお伺いしたものである。この時のベクウィス先生の成果は Christopher I. Beckwith, *Koguryo The Language of Japan's Continental Relatives, An Introduction to The Historical-Comparative Study of the Japanese-Koguryoic Languages With a Preliminary Description of Archaic Northeastern Middle Chinese*, Leiden-Boston: Brill, 2004, 274 pp.; Revised Second Edition, 2007 (韓国訳: C.I. 백위드, 鄭光 번역, 高구려어 - 일본을 대륙과 연결시켜 주는 언어, 상고 동북 중기 중국어 한자음의 시험적 記述로 일본-高구려어의 역사비교언어학적 연구 입문, 서울: 고구려연구재단, 2006, 482 페이지) という形で結実したが、日本語訳がいまだに世に出ていないと

いう心残りがある。その間わたくしは清瀬先生という新しい大先輩を得て、先生からは大いに学ばせていただいた。わたくしがこの時学んだのはアメリカ式思考、学問、特に言語学のありかた、なによりも先生のアルタイ諸語、日本語学、特に古代語その他についてお持ちの該博な関心と知識だった。さらには朝鮮や日本の言語文字文化にも深い関心をお持ちであり、先生から一再ならず教えを得たものである。清瀬先生が日本語も朝鮮語もアルタイ型の言語である点、しかしアルタイ語族の存在は認めない点ではわたくしとは一致していたが、その他の点では必ずしも意見は一致しなかった。

清瀬先生は『日本語文法体系新論・派生文法の原理と動詞体系の歴史』、ひつじ書房、2013年、300頁に格別の想いを抱かれておられたようで、賛否はともあれ、これに対する嘘偽りのない書評を聞かせてほしいと言われていたのを気にしつつも果たせないまま、先生が永眠なさったことを遅まきながらも知った時にわたくしはつくづく自己の怠惰を恥じた。墓前でわたくしの非常識をお詫びしたが、あらためて先生との実り豊かな交友を得られたことに心から感謝し、つたない一文を捧げるものである。合掌。

また清瀬先生の履歴と業績についてはベクウィス Christopher I. Beckwith 先生の多大なご協力に心からの謝意を表するものである。

2.1. 清瀬義三郎則府、『日本語文法新論—派生文法序説—』、東京：おうふう（桜楓社）、185ページ、1989【これは上記 1.2.「業績」の 17) に該当する】の章立ては次の如くである。以下【 】内は筆者の注記である。以下に引用部分は「 」で包む。

目次

序言…坂倉篤義

序文

第一章 有意音 1. 自立音 2. 従属音 3. 派生

第二章 名詞と接尾辞 1. 実名詞 2. 格 3. 副詞句 4. 繫辞

第三章 動詞と接尾辞 1. 態 2. 動詞形 3. 二次語幹 4. 不規則接尾

第四章 動詞の種々相 1. 動作動詞の自他 2. 相 3. 補助動詞 4. 語性

第五章 文 1. 主題-陳述 2. 節 3. 語順 4. 省略

付. 古代日本語の動詞接尾組織 1. 古代日本語動詞の一次語幹 2. 古代日本語動詞の派生語幹 3. 古代日本語の交替母音 4. 古代日本語の四動詞形 5. 古代形状動詞接尾辞 6. いわゆる「ラ行変格活用」の淵源 7. 結語

跋文

英和術語対称及索引

2.2. 清瀬義三郎則府, 『日本語文法体系新論 派生文法の原理と動詞体系の歴史』, 東京: ひつじ書房, 300 ページ, 2013 【これは上記 1.2. 「業績」の 40) に該当する】の章立ては次の如くである.

第1編 派生文法の原理

序言 【上記 1.2. 「業績」の 17) の「はじめに」以外にほぼ該当する】

第1章 連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論——【上記 1.2. 「業績」の 4) の「はじめに」にほぼ該当する. 本稿 3.1. 参照】

1. 連結子音 2. 連結母音 3. 派生接尾辞と文法接尾辞と 4. 終止・連体形と連用形と命令形と 5. 形状動詞接尾辞 6. おわりに

第2章 日本語の膠着語的性格——日本語の動詞は活用などしない——【上記 1.2. 「業績」の 16) に該当する. 本稿 3.2. 参照】

1. 膠着 2. 名詞接尾辞 3. 文法動詞接尾辞 4. 派生動詞接尾辞 5. 不規則動詞の接尾組織 6. 古代動作動詞の接尾組織 7. 古代形状動詞の接尾組織

第3章 現代日本語動詞接尾組織考——伝統文法批判——【上記 1.2. 「業績」の 19) に該当する. 本稿 3.3. 参照】

1. 膠着語 2. 日本語動詞のアスペクト 3. 日本語の定動詞 4. 日本語の四動詞形 5. 形状動詞 6. 結び

第2編 日本語文法新論—派生文法序説—【上記 1.2. 「業績」の 17) の「付」と「跋文」以外に該当する. 本稿 4.1. 参照】

序言

第1章 有意音 1. 自立音 2. 従属音 3. 派生

第2章 名詞と接尾辞 1. 実名詞 2. 格 3. 副詞句 4. 繫辞

第3章 動詞と接尾辞 1. 態 2. 動詞形 3. 二次語幹 4. 不規則接尾

第4章 動詞の種々相 1. 動作動詞の自他 2. 相 3. 補助動詞 4. 語性

第5章 文 1. 主題-陳述 2. 節 3. 語順 4. 省略

第3編 日本語動詞体系発達史

序言 【上記 1.2. 「業績」の 17) 「跋文」にほぼ該当する】

第1章 古代日本語の動詞接尾組織 【上記 1.2. 「業績」の 17) 「付」にほぼ該当する. 本稿 5.1. 参照】

1. 古代日本語動詞の一次語幹 2. 古代日本語動詞の派生語幹 3. 古代日本語の交替母音 4. 古代日本語の四動詞形 5. 古代形状動詞接尾辞 6. いわゆる「ラ行変格活用」の淵源 7. 結語

第2章 上代語「加行延言」又は「久語法」の本質 【上記 1.2. 「業績」の 33) に該当する. 本稿 5.2. 参照】

1. 「延言」から「添加」へ 2. ク・ラクの所謂「持続」の問題 3. 上代語

連体形の語構造 4. 久語法の構造の実体 5. 久語法の機能 6. 「添加」か「延言」か

第3章 所謂「音便形」の起源と成立——日本語動詞の形態素分析に寄する——【上記 1.2. 「業績」の 22) に該当する. 本稿 5.3.参照】

1 〈起〉. 動詞「音便形」の源流—中古語から中世語を経て現代語へ—— 2 〈承〉. 「音便形」の起因に関する諸説——何故「四段活用」の方にのみ音便現象が?—— 3 〈転〉. 日本語動詞の語幹抽出——「四段活用」動詞は子音語幹動詞—— 4 〈結〉. 内的連声「音便形」の形態素——中古の随意連声から現代の強制連声へ——

第4章 所謂「二段活用の一段化」の起因——音韻変化が文法変化を——【上記 1.2. 「業績」の 28) に該当する. 本稿 5.4.参照】

1. 史的变化の要因は? 2. 音韻変化が文法変化を 3. 現代語・中古語「終止・連体」両形の形態素分析 4. 上代語「終止・連体・已然」三形の形態素分析 5. 「二段活用の一段化」の真因は 6. 上代語における「二段活用の一段化」 7. 文法的「安定化」へ

あとがき

索引

2.3. 以上に見たように、清瀬義三郎則府、『日本語文法体系新論 派生文法の原理と動詞体系の歴史』、東京：ひつじ書房、300 ページ、2013 こそは清瀬義三郎則府、『日本語文法新論—派生文法序説—』、東京：おうふう（桜楓社）、185 ページ、1989 その他【すなわち上記 1.2. 「業績」の 16), 17), 19), 22), 28), 33), 40)】の清瀬先生の主たる論文を含む、先生の日本語文法論を概観し得る書と位置付けることが可能である。したがって本稿はもっぱら清瀬先生の『日本語文法体系新論 派生文法の原理と動詞体系の歴史』だけを両者の代表として扱うこととする。以下に清瀬先生を著者、菅野を筆者と呼ぶことにする。

2.4. 著者の日本語派生文法の特徴は一言で、「アルタイ諸語の接辞膠着にまったく並行して」、日本語の動詞は「語幹には接尾辞が機械的に接続して行くのみであ」ということであり、つまりこれは日本語文法の活用形、朝鮮語文法の語基のまったき否定であるが、これについての著者の興味ある発言があるので、少し長いが『日本語文法新論—派生文法の原理と動詞体系の歴史』の第 3 編【本稿 5.3.】の「序言」【『日本語文法新論—派生文法序説—』の「跋文」を若干縮小したもの】のほぼ全文を以下にそのまま引用することにする。

「米国インディアナ州のほぼ中央に位置する州都インディアナポリスから五十哩ほど離れたところに、ブルーミントンと言う静かな大学町がある。此の町に在る大学がインディアナ大学であって、若き日、私はその大学院で学んでいた。

苦しくはあったが充実した日々であり、デニス・サイナー教授のアルタイ比較音韻論の講義などには、目を開かれる思いがあった。

或る年、西独ゲッティンゲン大学のゲルハルト・デルフェル博士が客員教授として赴任せられ、アルタイ比較形態論の講義を持たれた。それは1960年代半ばの事である。開講初日に、博士は、アルタイ諸言語はすべて膠着言語であり、然も接尾辞のみによって膠着性が示される事、膠着の様態はひとえに機械的であって、膠着語の語幹は語形変化しない事等々を述べられた。此の講義では、トルコ諸言語・蒙古諸言語・ツングース諸言語のみを取り扱い、朝鮮語や日本語は含めない旨を最初に断っていたので、私はその日の講義の終わるのを待って、日本語は膠着語の一つに数えられているに拘わらず、動詞語幹もそれに附着する接辞（即ち「助動詞」）も活用するが、此の事実をどう解釈されるかと、兼ねてよりの疑問を個人的に質した。博士は、自分は日本語は知らないがと断られた上、しかし其れは妙だ、そんな筈は無いが…と首を傾げられた。伝統的日本語文法に疑問さえ懐いた事も無かった私は、不遜にも、ああこの大学者にして矢張り日本語の事は何もご存知ないのかと、内心秘かに嘆じたものである。しかし、私は聽て此の不遜を深く恥じなければならなく成る。日本語動詞の本格的な形態分析に取り組んだところ、語幹には接尾辞が機械的に接続して行くのみであり、母音幹に設備して連結子音が顕れ、子音幹に接尾して連結母音が顕れる其の様相は、アルタイ諸言語の接辞膠着にまったく並行していると言う事実を知ったからである（但し、此の事は、日本語が系統的にアルタイ諸言語と関係があると言う意味ではない）。

斯くて成った現代日本語動詞組織に関する私の考えを纏め、先ずは米国の学会に問うたのが1960年代の末であった事は第2編の「序言」に述べた通りである。しかし猶、古代語動詞組織の謎は解けなかった。所謂「下二段活用」動詞の例えば「受く」の語幹は *ukë-* の筈であるが、何故にその「終止形」が恰も子音幹と同じく *uk-u* の形を取り、且つ「連体形」が *uku-ru* の形を取るのかと言う類の疑問である。其の後も此の問題が片時も頭を離れず、解き得ぬ儘に悶々として十七年を経たの後、漸く古代動詞接尾辞に於ける代替母音の存在に気付くを得て、すべてが一挙に氷解した。第1章として本編に収めた「古代日本語の動詞接尾組織」なる一篇は、私の古代日本文法の謂わば序論である。

日本語動詞体系の発達史上、最も大きな変化とは、平安時代に遡り得る「音便形」の発生とその定着、鎌倉時代から「終止形」は「連体形」に取って代えられ消滅した事、また室町時代中頃から「二段活用」が「一段」化し、やがて定着した事、等であろう。これらの起因は凡て余の三章の中で文法的に解明せられている。」（以下略）

3.1. 第1編 派生文法の原理 第1章 連結子音と連結母音と——日本語動詞無活用論—— まず派生文法に対する著者の説明の概要を見てみることにする。序言で著者は日本語が膠着語である以上、日本文典に言う所謂活用とは屈折の一つに他ならないのであるから、それは矛盾であると述べている。

3.1.1. 連結子音 著者はまず所謂四段活用動詞は例えば「書く」の場合 ‘kak-’ を語幹として抽出し得、その所謂未然形につく助動詞は四段動詞と一段動詞の場合「形態素的に kak-aseru mi-saseru と分析」され、「子音幹には ‘-aseru’ の形が接尾し、母音幹には ‘-saseru’ の形が接尾している。」とし、「両者を比較すれば、kak(子音幹)-saseru 【sの横線は原文では右上から左下への斜線。以下同一菅野】 mi(母音幹)-saseru の如くであって、此の子音 s は、接尾辞が母音幹に後接する際にのみ現れ、子音幹に後接する際には消失すると言う性質を有している事にも気付く。母音幹に後接する時にのみ現れ、子音幹に後接する時には現れない此の種の子音を連結子音と言う。」と述べ、さらに「日本語に、使役を表す接尾辞は唯一つ在るのみであって、それは、-(s)aseru と記述する事が出来る。…そして、此の種の接尾辞を動詞接尾辞と言う。」と述べている。著者はさらに「所相、尊敬、可能等を表す「れる」「られる」について「同様な見地から、形態素的には、kak-rareru mi-rareru とみ見るべきであって、此の動詞接尾辞は、-(r)areru と記述される。語頭の r は連結子音である」とする。

3.1.2. 連結母音 次に「書かない」、「見ない」は「kak(子音幹)-anai mi(母音幹)-anai」として理會し得、「母音幹に後接する時には、此の母音 a は現れない。かかる性質を有する此の種の母音を連結母音と言ひ、此の否定を表す動詞接尾辞は、-(a)nai と記述する事が出来る。」連用形も同様に kak-itai mi-itai であるが、連結母音 i を有する動詞接尾辞 ‘-(i)tai’ の如く記述し得、同様に -(i)tagaru, -(i)masu が得られるとしている。

3.1.3. 派生接尾辞と文法接尾辞 次に終止形「書く」、「見る」を見た場合、「上述の理論から ‘kak-u’、‘mi-ru’ の形態素に分析すべき事は容易に理解し得る。」とし、「此の動詞接尾辞は、-(r)u と言う形なのである。」とする。さらに「文法接尾辞を除去した残余の部分、即ち ‘-(s)ase-’、‘-(r)are-’、‘-(a)na-’、‘-(i)ta-’、‘-(i)mas-’ 等がそれぞれ使役、所相、否定、希望、丁寧等の意義を表示しているのである。此の種の動詞接尾辞を派生動詞接尾辞と言う。それは動詞幹に設備して常に二次動詞幹を派生する。」とし、kak-ase-rare-tagar-imas-umai (-(u)mai は文法接尾辞)における「動詞接尾辞の接尾する様態を明らかに」すると kak-sase-rare-itagar-imas-umai となることを示している(本稿 3.2.4.参照)。

3.1.4. 終止・連体形と連用形と命令形と 文法接尾辞 ‘-(i)ta’ が子音幹に接尾する時は次のように内的連声^{れんじょう}が生じるとしている。

—— k-(i)ta → —— oita(書く～書いた)³

- g-(i)ta → — oida(漕ぐ～漕いだ)
- t-(i)ta → — tota(打つ～打った)
- r-(i)ta → — tota(切る～切った)
- (w)-(i)ta → — tota(買う～買った)
- n-(i)ta → — noda(死ぬ～死んだ)
- m-(i)ta → — noda(汲む～汲んだ)
- b-(i)ta → — noda(呼ぶ～呼んだ)
- s-(i)ta → — sita(貸す～貸した)

敢えていえば(言う:イウ→ユウ)も扱うべきであると筆者は思う。現在共通語で「イウ」という発音を筆者は知らない。

さらに「二つの文法接尾辞 ‘-(r)u’ と ‘-(i)ta’ は、文完結及び連体と言う同一の機能を有する。両者の相違は、前者が非完了アスペクトを表すに対して、後者が完了アスペクトを表すと言う点のみである。」と述べる。同様に「書こう」、「見よう」を -(y)oo と分析する(前望アスペクト)。さらに -(u)mai (否定的前望アスペクト)。

連用形と命令形の文法接尾辞として次のものを挙げている。

連用形形成の文法接尾辞

| | | |
|-------------|-------|------------------------------------|
| - (i) | 非完了順接 | 書き(kak-i)、見(mi-) |
| - (i)te | 完了順接 | 書いて(kaø-ite)、見て(mi-te) |
| - (r)eba | 非完了条件 | 書けば(kak-eba-)、見れば(mi-reba) |
| - (i)tara | 完了条件 | 書いたら(kaø-itara)、見たら(mi-tara) |
| - (r)uto | 開放条件 | 書くと(kak-uto)、見ると(mi-ruto) |
| - (i)tewa | 却下条件 | 書いては(kaø-itewa)、見ては(mi-tewa) |
| - (a)zu | 否定 | 書かず(kak-azu)、見ず(mi-zu) |
| - (i)temo | 譲歩 | 書いても(kaø-itemo)、見ても(mi-temo) |
| - (r)umade | 終格 | 書くまで(kak-umade)、見るまで(mi-rumade) |
| - (i)nagara | 同時 | 書きながら(kak-inagara)、見ながら(mi-nagara) |
| - (i)ni | 目的 | 書きに(kak-ini)、見に(mi-ni) |
| 其他 | | |

命令形形成の文法接尾辞

| | | |
|----------|----|---------------------------|
| - (e) | 肯定 | 書け(kak-e)、— |
| - ro | 肯定 | —、見ろ(mi-ro) |
| - (r)una | 否定 | 書くな(kak-una)、見るな(mi-runa) |

「此の他、「なさる」「下さる」「仰る」等は R-変則動詞とでも称すべき性質のものであって、命令形の形では文法接尾辞 ‘-i’ を伴うのを常とし、其の際、語幹末の子音 r をいずれも消失せしめて ‘nasa-i’、‘kudasa-i’、‘ossya-i’ 等の形と成る。一定の規則があつて、例えば、丁寧の派生接尾辞 ‘-(i)mas-’ が接尾する時にも、此の子音 r は消失する。他に、所謂変格活用動詞の「する」と「来る」とが在る。これは母音不規則動詞とでも称すべきものであって、語幹が i 又は e で終る通常の母音幹動詞とは、大いに性質を異にし、接尾辞を伴う時、語幹の母音自体をも交替させる。」とし、文語の所謂二段活用動詞の場合と共通する点があるとして、ここでの説明を避けておられる。

3.1.5. 形状動詞接尾辞 著者は形容詞に関して次のように述べておられる。「日本文典に言う形容詞は adjective ではない。それは動詞の一種である。例えば、「白い犬」は ‘white dog’ の意ではなくて、‘dog which is white’ の意であり、「吠える犬」 ‘dog which barks’ と構造的に全く等しい。「白い」の意味は ‘white’ ではなくて ‘to be white’ なのである。それ故、朝鮮文典に於ける朝鮮語形容詞の取り扱いと同じく、日本語の形容詞も形状動詞と見るべきものである⁴。此の例の「白い」に於ける「い」は形状動詞接尾辞である。形状動詞接尾辞はすべて文法接尾辞であつて、派生形状動詞接尾辞と言うものは存在しない。」「併して、一般の動詞（即ち動作動詞）に接尾する文法接尾辞の ‘-(r)u’ は、常に瞬間動詞を形成し、所謂存在詞「ある」「いる」の他、「見える」「聞える」「出来る」等の中相動詞のみが継続動詞と成る。これに対して、形状動詞は、非完了形に於いて、すべて継続動詞である⁵。…形状動詞に瞬間動詞は存在しない。」「動作動詞の語幹と形状動詞の語幹とは、本来から別種であつて、口語では、同じ語幹が双方の動詞接尾辞を取り得ると言う事は無い。語幹のみならず、派生接尾辞にも二種の別が在つて、否定の ‘-(a)na-’ と希望の ‘-(i)ta-’ には、常に形状動詞が接尾し、例えば、其の非完了終止・連体形は ‘-(a)na-i’ と ‘-(i)ta-i’ の形と成る。形状動詞を下に挙げる。連結子音も連結母音も無い。」

終止・連体形形成の形状動詞接尾辞

| | | |
|--------|-----|--------------------------------------|
| -i | 非完了 | 白い(siro-i)、悲しい(kanasi-i) |
| -katta | 完了 | 白かった(siro-katta)、悲しかった(kanasi-katta) |
| -karoo | 前望 | 白かろう(siro-karoo)、悲しかろう(kanasi-karoo) |

連用形形成の形状動詞接尾辞

| | | |
|---------|-------|--|
| -ku | 非完了順接 | 白く(siro-ku)、悲しく(kanasi-ku) |
| -kute | 完了順接 | 白くて(siro-kute)、悲しくて(kanasi-kute) |
| -kereba | 非完了条件 | 白ければ(siro-kereba)、悲しければ(kanasi-kereba) |

| | | |
|----------|------|--|
| -kattara | 完了条件 | 白かったら(siro-kattara)、悲しかったら(kanasi-kattara) |
| -ito | 開放条件 | 白いと(siro-ito)、悲しいと(kanasi-ito) |
| -kutewa | 脚下条件 | 白くては(siro-kutewa)、悲しくては(kanasi-kutewa) |
| -kutemo | 譲歩 | 白くても(siro-kutemo)、悲しくても(kanasi-kutemo) |
| 其他 | | |

さらに著者は次のように言う。「口語の形状動詞の語幹はすべて母音で終り、子音形状動詞幹なるものは存在しない。しかし、文語にあっては、母音で終る語幹の他に、子音 s で終る語幹も在った。併して、文語の形状動詞接尾辞は、一般に連結母音 i を持っていて、‘-(i)ki’、‘-(i)ku’、‘-(k)ere’ 等の形であった。例えば、「白き」の形は、接尾辞‘-(i)ki’の連結母音 i が消失して‘siro-ki’と成ったものであるが、「悲しき」の形は、連結母音の子音幹の後に現れて、‘kanas-(i)ki’が、‘kanas-iki’と成ったものである。」これについて著者は独特な論理を展開している。「他方に於いては、連結子音 s を持った形状動詞接尾辞も在った。即ち、非完了の終止形を形成する接尾辞‘-(s)i’がそれである。例えば、「白し」の形は‘siro-(s)i’が‘siro-si’と成ったものなのであると理会する事が出来る。此の接尾辞‘-(s)i’の接尾した形を伝統文法では「終止形」と称しているのであるが、所謂久活用の他に、志久活用の如き特別な活用が存在したのでは、固より無い。それは子音 s で終る形状動詞幹に接尾する時、接尾辞‘-(s)i’の連結子音が消失したものに過ぎない。例えば「悲し」の形は、‘kanas-(s)i’が‘kanas-i’と成ったものなのである⁶。」

3.1.6. おわりに 著者は「日本語とよく似たトルコ語の文法がわかりやすいのに、日本文法がわかりにくいのは、日本文法の組織に間違ったところがあるからではなかろうかという意見」を持つ日本のトルコ学者の言を引用しつつ、「動詞形容詞将又助動詞の活用を唱える従来の伝統的文法論は、本章に説く連結子音並びに連結母音の存在を認識し得なかった点に、その誤謬を惹起せしめた原因を求める事が出来る。」と結論付けている。

3.2. 第 1 編 第 2 章 日本語の膠着語的性格——日本語の動詞は活用などしない——

3.2.1. 膠着 著者は所謂シュライヘルの三分法を示し、「文法的機能が接辞によって表される言語が膠着語 (agglutinative language) であり、…接辞の語幹への附着はひとえに機械的である事の特徴とする。」と述べ、「動詞や名詞が文中での機能に従ってその形を変える言語は屈折語 (inflectional language) と呼ばれる。語形変化とは所謂活用や曲用であって、膠着語とは異なり、文法的機能を表す部分は容易に語幹から分解し得ない。」ということと対照させている。つまり筆者は

膠着語と屈折語の違いを次のような対比において眺めていることになる（表は筆者の作成したもの）。

| | 文法的機能 | 文法的機能を表す部分 |
|-----|-------------|------------------|
| 膠着語 | 接辞の語幹への附着 | その附着はひとえに機械的 |
| 屈折語 | 語形変化（活用，曲用） | それは語幹から容易に分解し得ない |

これが著者が本書を通じて一貫して述べている中心的な論旨となっているようである（本稿 2.4.参照）。

屈折語における文法的機能を表す部分の語幹からの分離が容易でないとは、例えば英語の *thought* (*think* の過去形，過去分詞形)，ロシア語の *е-л/е-л (ес-ть / es-t' <食べる> の過去形)* 等々のいわゆる不規則形あるいは融合形を念頭に置いているのだろうか？ しかし多くの場合，補充形を除けば，内部屈折，音韻の変化等によって説明が付き，しかもそのような語形の変化自体は膠着語にも見出される（日本語のいわゆる四段活用動詞の過去形）。またいわゆる融合 (*fusion*) による語幹と接辞の境界の曖昧さは屈折語に見られる（ロシア語：*мочь / moch' <出来る（不定詞）>* cf. 語根 *mor-/mog-*）だけでなく，膠着語にも見られるものである（日本語：*ぼかあくぼくは*；他に沖縄語に多い）。この点では屈折語も膠着語も語幹と接辞の結合のあり方は程度の差でしかない。さらに漢語のような孤立語においても膠着的な側面があることを指摘しないわけにはいかない（*来<来る>*：来了，来的）。河野六郎氏は次のように言うておられる。「印欧語の動詞は，印欧語の名詞と同様，一定の範疇（動詞の場合は，人称，数，時称，法，態）を一つの語形に集約し，それが，形態の上に，しばしば融合となって現れる。したがって，各範疇の標識は必ずしも明確に区分されて表されない。これに対して，日本語の用言は，上述のように，範疇を必要に応じて接辞によって明示するため，1語に集約することなく，拡散して示そうとするので，ゆるく接合した複合体という連辞の形で表現する結果になる。そして，原則として，一つの範疇を一つの接辞で表そうとするところから，接辞は，明確に区分されて示され，したがって，「膠着」という形成原理が取られるのである⁷。」

ここでは屈折語：複数の範疇の一つの語形による表示（例：ラテン語 *am-ō <我愛す>*における *-ō* は<直説法，能動態，現在，1人称，単数>を示す），膠着語：一つの範疇の一つの接辞による表示という違いが示されているが，この方がより明確である。しかしながらこれとても膠着語における屈折的な形（例：朝鮮語 *읽-습니다 ilg-seubnida [iks'umnida] <読みます（終止形，非過去，丁寧）>*，現代語の観点からは接尾辞 *-seubnida* のこれ以上の分解は不可能。ただしアメリカ構造主義時代は韓国ではこの形態素をさらに3つに分けるのが通常だった）を参照せよ（本来は *읽-습-니-다 ilg-seub-ni-da <読む-丁寧-現在-終止>*）。ついでながら著者が挙げている「中核となる語幹に客語や補語などに当たる文法的要

素が結合し、あたかも単語がそのままで文と認められるような構造の言語」たる抱合語についても、よく言われることではあるが、フランス語のような屈折語の抱合性（例：je le lui donne. [ʒøllɥidøn] <わたくしは彼にそれを与える。>）にも言及すべきである。ついでながら英語の口語にも抱合性は認められる（例：I'll give you an apple. [aɪlgɪvjə ənæpl] <ぼく君にリンゴあげるよ>）。

3.2.2. 名詞接尾辞 著者は「文法的な意味で言って、日本語は接頭辞も接中辞も持たない。故に、日本語における文法標識としての接辞はすべて接尾辞である。」として、「-殿」, 「-達」他の「接尾語」も「-軒」, 「-冊」他の「助数詞」も、「御-」, 「不-」他の「接頭語」も「文法標識としての接辞ではない」ということはよいとして、「お読みになる」, 「お読みくださる」, 「お読みいたす」, 「お読み申し上げる」等の敬語動詞における接頭辞「お-」は語彙と文法にまたがる範疇としての「敬語」の表示としては文法的でもあることまで否定すべきではないと筆者は考える。日本語において本来漢語的要素の影響を受けて語彙的に接頭辞が成立したことまでまさか著者は否定するつもりではあるまい。

著者は属格の「ノ」が所有者や属性だけでなく、同格属格、主格属格等の構文論的詳細は論じないことにしているが、随所に筆者には賛成できない記述が多い。例えば「所謂「名詞」すなわち名詞語幹は、日本語にあってもそのままの形で主格を表す」と言うが、「道ヲ歩ク。」, 「空ヲ飛ブ。」における動詞を他動詞と断じることには筆者は断固反対する。この場合の「ヲ」は動詞を他動詞たらしめる機能とは異なるものであることまで否定すべきではない。著者にはこの種の単純化があるかと思えば、アルタイ諸言語における与位格 (dative-locative case) との対比において「友達ニ手紙ヲ出ス。」(与格), 「大阪ニ住ンデイル。」(位格), 「先生ニ習ツタ。」(為格 agentive case) として逆に分離する傾向にも筆者は反対である。一つの形態素に複数の意味を設定すればよいのである。著者が並立助詞を認めず、「春ト秋(ト)」も「子供ト遊ンダ」も共格とする態度は両者の文法的機能の違いを無視した不当なものと筆者は考える。現代日本語において「AトB(ト)」, 「AカB(カ)」, 「AヤラBヤラ」等は格助詞の前に置き得、「格助詞+動詞」という単語結合的關係とは別の関係(等位的関係)をなしていることを著者は無視している。

3.2.3. 文法動詞接尾辞 著者は朝鮮語において「子音で終る語に附」く「saram-ül「人ヲ」と「母音で終る語に附」く「kae-rül「犬ヲ」とを対比させ、「このrも連結子音である。」と断じておられるが、15世紀語を見る限り、初めに母音語幹に付く‘-r’が対格接尾辞として出来(周知のごとく朝鮮語においてはrもlも同一音素である), 次に子音語幹に付く‘-ür’ (=‘-ül’)が出来(この場合‘-ü-’は連結母音である), 次に母音語幹に付く接尾辞として延長形‘-r-ür’ (=‘-r-ül’)が生じ、現代語では標準語形‘-r-ür’:話し言葉形‘-r’の対立がある。こう見て来

ると、一概に *r* が連結子音であるとは言い難い。ここでの著者の説明については本稿の 3.1.4. 参照。これについての筆者の見解は後に述べる。

著者は形状動詞の順接連用形の連声について述べる。— *a-ku* → — *oo* 小ソウ, — *i-ku* → — *yu* 大キユウ, — *o-ku* → — *oo* 広ウ, — *u-ku* → — *uu* 明ルウ。さらに前望終止形接尾辞 *-kar-oo* → *-karoo*, *-kar-azu* → *-karazu*; *aka-kar-e* 「赤カレ」(形状動詞命令形)。

3.2.4. 派生動詞接尾辞 著者は次の例を引いている(本稿 3.1.3. 参照)。

書カレタイ *kak-rare-ita-i*

読マセラレナカッタ *yom-sase-rare-ana-katta*

見ラレタガリヤガル *mi-rare-itagar-iyagar-ru*

食べサセラレタガリマスマイ *tabe-sase-rare-itagar-imas-umai*

3.2.5. 不規則動詞の接尾組織 著者は次のように言う。「動作動詞の「来ル」*ku-ru* と「スル」*su-ru* の語幹はそれぞれ *ko-* と *se-* であると思われるが、非完了態終止形の接尾辞 *-(r)u* が附着する際には、語幹の母音が *u* に変る。両者共に語幹を *ko-* と *se-* のまま保ち得るのは、否定連用形の文法接尾辞 *-(a)zuni* の附く時の他、使役や受動の派生接尾辞 *-(s)ase-* や *-(r)are-* の附く時に限られる。しかも、これらの派生接尾辞が *se-* に附く時には語幹母音をゼロの形に変えて、単に「サセル」*s-ase-ru* 「サレル」*s-are-ru* の形を取る事も一般化している。同様に、完了態終止形・連体形の *-(i)ta* のように連結母音 *i* を持つ接尾辞(完了順接の *-(i)te* や丁寧の *-(i)mas-* など) や否定前望態の *-(u)mai* のように連結母音 *u* を持つ接尾辞が附く時にも語幹の母音はゼロとなり、「来タ」*k-ita* 「シタ」*s-ita* や「来マイ」*k-umai* 「スマイ」*s-umai* のようになる。また前述した非完了態の *-(r)u* に限らず、仮定連用形の *-(r)eba* のように、連結子音 *r* を持つ接尾辞が附く時には語幹の母音が *u* に変り「来レバ」*ku-reba* 「スレバ」*su-reba* となるのである。」さらに命令形について「「ナサル」*nasar-u* 「下サル」*kudasar-u* 「仰ル」*ossyar-u* 「イラッシャル」*irassyar-u* という一連の尊敬語は、その命令形が「ナサイ」*nasa-i* 「下サイ」*kudasa-i* 等となる。その際、見られる通り語幹末の *r* を一律に消失せしめる。」他に「ナサイマス」*nasa-imasu*, 「下サイマス」*kudasa-imasu*, *mas-yoo*, *mas-en* などに言及している。

3.2.6. 古代動作動詞の接尾組織 著者の考えを知る上で重要なので、著者の説明からの引用を、少々長いのだが、許されたい。著者は「動作動詞の接尾辞は、派生接尾辞も文法接尾辞も、すべて連結子音か連結母音を持っている。古代日本語には、更に代替母音 (alternate vowel) というものも在った。」とし、いわゆる上二段活用動詞と下二段活用動詞の「起く」^オ、「受く」^ウについて次のように述べている。「語幹はそれぞれ *ok-i* と *uk-ë* である⁸。現代語の「終止形」「連体形」が古代語の「連体形」に由来するものである事は先に述べたから⁹、先ず祖形とも言う

べき古代語の「連体形」から見よう。ここでは語幹末の母音 *i* と *ë* が共に母音 *u* と交替し、そこに接尾辞 *-(r)u* が附いて「起クル」*oku-ru* 「受クル」*uku-ru* と言う形を取っている。つまり、この接尾辞は単なる *-(r)u* ではなくて、附着する母音語幹の末尾母音を *u* に変えるところの代替母音 *u* を持った *-^u(r)u* という接尾辞なのである。左肩に小字を以て示した ^u が代替母音である。斯くて代替母音は古代八母音のうち *i* とのみ交替しない性質のものであったから、「上一段活用」の例えば *mi-* の場合には、*-^u(r)u* の代替母音 *u* は作用せず、単なる *-(r)u* が附いた現代語の場合と同じく「見ル」*mi-ru* の形を取ったのである。子音語幹のときは、代替母音も連結母音も無関係なのであるから、例えば *kak-* に *-^u(r)u* が附いても、現代語の場合と同じく「書ク」*kak-u* のような形を取ったのである。」

「続いて古代語の「終止形」を見よう。所謂「二段活用」動詞 *ok-ï* と *uk-ë* はそれぞれ「起ク」*ok-u* 「受ク」*uk-u* の形を取る。この接尾辞は代替母音 *ø* を持つ *-^ø(r)u* であった。先ず語幹の末尾母音 *i* と *ë* が *ø* と交替するため、結果において子音語幹と同じ *ok-* と *uk-* に成り、従って *-^ø(r)u* の連結子音 *r* は潜在してしまつて顕れず、「起ク」*ok-u* 「受ク」*uk-u* の形を作る事になるのである。「カ行変格用言」や「サ行変格用言」も同様に、それぞれの語幹 *kö-* や *se-* の母音 *ö-* や *e-* が、代替母音 *ø* と交代して、語幹は子音のみの *k-* や *s-* に変わり、そこでは連結子音 *r* は潜在する事になり、「来」*k-u* や「為」*s-u* の形が出来たのである。ここでも代替母音 *ø* は語幹末の *i* とだけは交替しないから、「上一段活用」では *mi-* に *-^ø(r)u* が附いて連結子音 *r* を顕在せしめ、「見ル」*mi-ru* の形が出来た。子音語幹のときは、代替母音も連結子音も無関係であるから、例えば *kak-* に *-^ø(r)u* が附いて「書ク」という形が出来たのである。」

著者はさらに言う。「これらの他にも代替母音を持った接尾辞としては、因由の連用形を作る *-^ø(r)eba* や譲歩の連用形を作る *-^ø(r)edömö* などがあった。後者は語尾を落として *-^ø(r)edö* としても用いられた。伝統文法に所謂「已然形」などは虚構に過ぎず、これらの接尾辞が語幹の *okï-* や *ukë-* に附着した形が「起クレバ」*oku-reba* 「受クレバ」*uku-reba* や「起クレドモ」*oku-redömö* 「受クレドモ」*uku-redömö* である。「二段活用」以外の動詞語幹への附着に伴う代替母音 *u* の交替の様相や連結子音 *r* の潜在・顕在の様相は、同じく代替母音 *u* を持った上述の接尾辞 *-^u(r)u* の場合に完全に並行する。」

「以上は、文献時代を遡れば、乙類母音 *i* と *ë* が *k-*、*p-*、*m-* 以外の子音とも自由に結合して音節を作り得たとの推定のもとに、論を進めて来たものである。所謂「ナ行変格活用」動詞の語幹末 *n* は、純粋な子音ではなくてゼロの母音を有し、「死ヌ」¹「去ヌ」の語幹は、*sinø-*、*inø-* と表記さるべきものであった。且つ、

語幹末の σ も代替母音と交替する性質のものであった。それ故、「連体形」の「死ヌル」は、語幹、 $\text{sin}\sigma$ -に接尾辞 ${}^{\text{u}}(\text{r})\text{u}$ が附いて sinu-ru と成ったものである。「終止形」の「死ヌ」は、 $\text{sin}\sigma$ -に ${}^{\text{o}}(\text{r})\text{u}$ が附いて先ず語幹は子音語幹かされた sin- に変わり、そこに連結子音 r の潜在した ${}^{\text{u}}$ が附いて sin-u と成ったものである。これがいわゆる「ナ行変格用言」の実体である。」

3.2.7. 古代形状動詞の接尾組織 著者は「所謂「ク活用」の語幹は母音終止であって、…語幹を「遠」 $\text{t}\ddot{\text{o}}\text{p}\text{o-}$ とし^{トホ}て良いが、「シク活用」の方の語幹は「悲」^{カナ}ではなくて kanas- なのである。…現代語の形状動詞「終止形」「連体形」もまた古代語の「連体形」に由来するものである。」こうして「遠キ」 $\text{t}\ddot{\text{o}}\text{p}\text{o-ki}$ 「悲シキ」 kanas-iki が得られた。「過程連用形を作る接尾辞 ${}^{\text{i}}(\text{i})\text{keba}$ や因由連用形を作る接尾辞 ${}^{\text{i}}(\text{i})\text{kereba}$ の他、讓歩連用形を作る接尾辞 ${}^{\text{i}}(\text{i})\text{kered}\ddot{\text{o}}\text{m}\ddot{\text{o}}$ なども連結母音の i を持っていた。所謂「ク語法」を作る接尾辞もまた ${}^{\text{i}}(\text{i})\text{keku}$ であった。」(本稿 3.1.5. 参考)。著者は「母音終止の語幹 $\text{y}\ddot{\text{o}}-$ に ${}^{\text{s}}(\text{s})\text{i}$ の附いた形が「好シ」 $\text{y}\ddot{\text{o}}\text{-si}$ であり、子音 s 終止の語幹 as- に ${}^{\text{s}}(\text{s})\text{i}$ の附いた形が「悪シ」 as-i なのである。」と述べた後、次のように述べている。「猶、「ラ行変格」動詞の「終止形」が「在リ」「居リ」「侍リ」のような形を取るのには、動作動詞語幹の ar- 、 wor- 、 paber- ($\text{pab}\ddot{\text{e}} \text{r-?}$) に、形状動詞接尾辞の ${}^{\text{s}}(\text{s})\text{i}$ が附いて ar-i 、 wor-i 、 paber-i となったものである。非完了態終止形の接尾辞 ${}^{\text{o}}(\text{r})\text{u}$ が瞬間動詞 (momentaneous verb) を作るに対し、 ${}^{\text{s}}(\text{s})\text{i}$ の方は継続動詞 (durative verb) を作るものだからである。」

3.3. 第1編 第3章 現代日本語動詞接尾組織考——伝統文法批判——

3.3.1. 膠着 著者は日本語に活用はないという主張を繰り返すのだが、どうやらその「活用」とはいわゆる国文法の動詞の活用、すなわちいわゆる語幹の変化、つまり未然、連用、終止、連体、假定、命令の形の変化を指すらしい¹⁰。他方日本語の語形変化を印欧語と同じようにとらえて動詞の語形変化を活用と見る(同様に名詞の語形変化を曲用と見る)一派も存在する¹¹。著者の関心はもっぱら動詞における形式的側面であり、一般に膠着語における活用の不在を主張するものであって、概してアメリカ言語学及びアルタイ言語学におけるヨーロッパの学説に大きく影響を受けた著者はチョムスキーもヤコブソンも無関心だったようであり、ましてパラディグマへの言及はないようであるが(と云いながらパラディグマティックな考えをまったく否定しているわけでもなさそうだが)、もしも文法における範疇による図式(パラディグマ)を考慮するならば、そこには膠着語、屈折語の別なく文法項目の対立による体系はおのずと問題とならざるを得ないというのが筆者の立場である。以下にその立場で筆者の意見を述べたい。

3.3.2. 日本語動詞のアスペクト 著者の言うアスペクトとはスラヴ諸語でのそれとは異なると断り、^{アスペクト}態は「常に話者の発話時を起点として、現在・過去・未来などを示す文法範疇」としての時制とは異なり、「或る時点（多くは主動詞の動作・作用の遂行時点）を基準とする。」と述べており、ここで扱われているものが非完了態 (-r)u. すなわち -u と -ru は相補分布を成す、完了態 (perfective aspect) (-i)ta, 前望態 (prospective aspect) (-y)oo (これは条件に応じて意思、勧奨、推量を表す) であるから、どうやらいわゆるアスペクト (あるいはパーフェクト) とムードを併せ持つ概念らしい。

3.3.3. 日本語の定動詞 著者は「定動詞とは直説法に於ける主動詞 (principal verb) としての機能を有する動詞の謂いであり、日本語では主動詞に文を簡潔する働きがあるので、此の動詞形を終止形 (finite verb) と呼ぶことが出来る。…終止形とは呼んでも、派生動詞語幹 (derivational verbal stem) をも語幹と認めての終止形であるから、伝統文法に謂う「終止形」の概念とは、此の点で異なる。」と言っており、筆者もこの点は著者と同意見である。

さらに著者は -(i)ta 形において語幹末音と接辞内の音に起こる変化は「形態素の結合に伴って惹起する内的連声 (internal sandhi) ^{れんじょう}」であって「活用」ではない。而も、例外無く起る強勢連声 (compulsory sandhi) である」と述べている。これも著者の言うとおりでである。

3.3.4. 日本語の四動詞形 筆者は終止形につづき連体形、連用形、命令形などの概念を提示するが、すべてが国文法のそれとは異なることを述べているが、これまた至極当然である。「順接連用形 (copulative converb) -(i)」—「非完了態の継続用法 (continuative use)」:「完了連用形 -(i)te」—「完了態での継続用法」と述べているところを見ると、形及び意味の対立を念頭に置いているようである。

3.3.5. 形状動詞 著者はここで動詞に動作動詞 (Action Verb) と形状動詞 (qualitative verb) の2つを立てることを述べている (本稿 3.1.5.参照)。これについての筆者の考えは後で述べるが、動詞といわゆる形容詞とを動詞扱いとしたことについては単に本稿【注】の3だけにとどまらず、著者の周到な配慮がうかがわれる。

3.3.6. 結び 著者はアストン、有坂秀世その他の国語学者の活用に関する説を紹介し、批判した。

4.1. 第2編 日本語文法新論—派生文法序説— 第1章 有意音 (Meaning-Bearing Sounds)

4.1.1. 自立音 (Unbound Sounds) 著者はここで感嘆詞 (Interjection); 動詞 (Verbal) に動作動詞 (Action Verb), 形状動詞 (Qualitative Verb) の2種がある; 非動詞 (Non-Verbal) に名詞 (Nominal) と副用詞 (Qualifier) の2種があり、前者は実

名詞(Noun-Substantive)あるいは実詞(substantive)と形状名詞(Noun-Quantitative)の2種, 後者に連体詞(Attributive)と副詞(Adverb)の2種がある; また接続詞(Conjunction)は副詞と見做してよいと言っている. 以上のうち形状名詞とはいわゆる形容動詞の語幹部分であるが, 筆者が形容名詞と名付けるものに該当する. 著者が形状名詞を取り出したのは卓見と言うべきである. 筆者は形状動詞と接続詞以外は著者とはほぼ見解を同じくする. 以上の品詞を筆者は自立語と呼ぶ.

4.1.2. 従属音(Bound Sound) 著者はこれを接尾辞(Suffix)と助辞(Postposition)に分け, 前者は名詞接尾辞(Nominal Suffix)(これはさらに格接尾辞(Case Suffix)と繋辞(Copulative Suffix)に分けられる)と動詞接尾辞(Verbal Suffix)(これはさらに文法接尾辞(Grammatical Verbal Suffix)と派生接尾辞(Derivational Verbal Suffix)に分けられる)から成り, 後者は句助辞(Phrase postposition)(これはさらに副助辞(Adverbial Postposition)と提題助辞(Thematic Postposition)とに分けられる)と文助辞(Clause Postposition)(これはさらに接続助辞(Conjunctive Postposition)と終助辞(Sentence-Final Postposition)に分けられる)から成るとする. 筆者はこれらのうち著者の言う派生接尾辞を文法接尾辞と認め, 著者の格接尾辞を格助詞, 副助辞(-サエ, -バカリ)と提題助辞(-ハ, -モ)を副助詞, 接続助辞(-カラ, -ケレドモ)を接続助詞, 終助辞(-カ, -ヨ)を終助詞と呼んでいる. 筆者は著者とは異なり, 接続助詞には-トをも加える(理由は後で述べる). 筆者は繋辞(-ダ, -ナ)には-ラシイ, -ミタイをも加える. 筆者は助詞と繋辞は従属語であり, そのうち前者は活用せず, 後者は活用すると見る. 著者の文法接尾辞を筆者は語尾と見る. 従って筆者は著者の動詞接尾辞(文法接尾辞, 派生接尾辞)だけを品詞の枠外に出す¹². なお筆者は著者の「句助辞」, 「文助辞」における「句」と「文」という曖昧な概念を用いない.

4.1.3. 派生(Derivation) 名詞由来動詞(Denominal Verb) — 散歩スル, 散歩ナサル, 散歩致ス, 散歩出来ル等(名詞+動詞化標識); 動詞化の接辞「春メク」, 「学者ブル」, 「子供ジミル」, 「花ヤグ」等; 形状動詞化の接辞「女ラシイ」, 「子供ッポイ」; 動作動詞化の接辞「不思議ガル」, 「憐レム」; 実名詞+「的」→形状名詞語幹; 形状名詞語幹+接辞「ソウ」→形状名詞「元氣ソウ」, →実名詞「静カサ」. 動詞由来名詞(Deverbal Noun) — 実名詞 -(i): 「光」*hikar-i*, 「流レ」*nagare-o*; 接尾: 「寒サ」, 「強ミ」, 「寒ケ」, 「楽シグ」, 「暑ソウ」, -(i)soo 「咲キソウ」*sak-iso* 「晴レソウ」*hare-soo*. 動詞由来動詞(Deverbal Verb) — 「飲マセル」*nom-ase-ru* 「飲マレル」*nom-are-ru* 「飲マナイ」*nom-ana-i* 「食ベナイ」*tabe-na-i* 「飲ミタイ」*nom-ita-i* 「食ベタイ」*tabe-ta-i* その他は, 動詞の「寒ガル」, 「楽シム」, 「早マル」, 「早メル」とは異なり, 筆者は動詞のパラディグマに収める. 著者はこれらを区別しないようであるが.

4.2. 第2編 第2章 名詞と接尾辞 (Nominals and Nominal Suffixes)

4.2.1. 実名詞 (Noun-Substantives) 形式名詞 (Bound Noun), 指示語 (Demonstrative), 数詞 (Numeral), 数量副詞 (quantitative adverb), 形状名詞 (Noun-Quantitative), 形式形状名詞 (Bound Noun-Qualitative) : 独身ノ様ダ について著者の解説あり.

4.2.2. 格 (Case) 著者は格接尾辞として主格 (-ga, -ø), 属格, 対格 (-o, -ø), 与格-為格 (-ni), 位格 (-ni, -de), 具格, 奪格 (-kara, -yori), 終格, 共格, 呼格 (-yo, -ya, -ø) を挙げている. 筆者なら -ni は1つにまとめ (ただし -de は位格と具格で同音異義をなす), ゼロ格 (あるいは語幹格) -ø を立てる. 現代語では -yori は比較格とでもすべきだろう (著者はこれを比較奪格と呼ぶ). 著者は連体形の格を二重格と呼ぶ. 著者はいわゆる連体助詞「ノ」を省略属格 (Elliptical Genitive) または遊離属格 (absolute genitive) と呼ぶ. 他に同格属格, 主格属格も. 著者は日本語は「主題-陳述」構造 (theme-rheme structure) を取るのであって, この点で英語などの「主語-述語」構造 (subject-predicate structure) の文とは, 根本的に異なっている。」とする. 総じて格 (形式) の意味が成立する条件が単語結合^{補1} (いわゆる collocation にほぼ当たる) その他によって決まることの認識が欠如していると言わざるを得ない (本稿 3.2.2. 参照).

4.2.3. 副詞句 (Adverbial Phrases) 著者が「類似の事物・人物を併記する際に用いられる「-ヤ」「-カ」「-ナド」も, 共格接尾辞の「-ト」とは異なり, 副助辞である。」としているが, 筆者はこれには賛成できない. 前二者は「-ト」とともに並立助詞に所属せしめるべきものである. 著者の「誰モガ知ッテイル. ソレハイツモノ事ダ. 等における「-モ」は語彙的接辞であり, 「誰モ」「イツモ」の類の各々が一つの実名詞を成すのである。」との発言は, 「誰カガ」「イツカ」とともに, 筆者も賛成である.

4.2.4. 繫辞 (Copulae) 著者は名詞述語 (nominal Predicate), 繫辞終止形, 繫辞連体形等について述べているが, ほとんどは筆者の認識と一致する. 「-ミタイダ」にも言及している. 著者は「実名詞には附く事が無く, 専ら形状動詞の語幹に附いて副詞化の働きをする「-ニ」もまた, この繫辞の連用形の一つである。」としているが, ここの「形状動詞」は単なる「形状名詞」の誤りではなかろうか? 他方著者の形状動詞のいわゆる連用形と副詞形が一致する場合, 文法論的には後者を副詞という品詞として扱う (すなわち両者を同音異義形とする) 見解もあり得るわけであって (副詞として用いられるドイツ語の形容詞の語幹やロシア語のいわゆる短語尾中性形. 例: 独 gut; 露 xopomo / xorosho 「よい」, 「よく」参照), 再考を要する. かように副詞は扱いの困る品詞である. あるロシア人言語学者はこのような副詞を特別の品詞として扱う必要がないと主張している.

4.3. 第2編 第3章 動詞と接尾辞 (Verbals and Verbal Suffixes)

4.3.1. 態 (Aspect) 次の諸概念が説明されている：動詞幹，母音幹，子音幹，動詞接尾辞，連結子音，終止形，連結母音，内的連声，接尾辞 *-(i)ta* による内的連声，前望態，定動詞，連体形，動作動詞終止形・連体形形成の文法接尾辞，動名詞 (Verbal Noun)，形状動詞終止形・連体形形成の文法接尾辞 (本稿 3.1.4. 参照)。筆者はせっかく「シヨウトスル」，「アロウ筈ガ無イ」，「動コウモノナラ」，「習ッタニシテハ」，「関心スルホイド」，「払ッタダケアッテ」のような普通国文法で取り上げない多様な形を取り上げながら，現象の羅列に終わっているのは惜しい。著者は総じてテンスではなしに，いわゆるパーフェクト (完了態)：インパーフェクト (非完了態) を日本語動詞の根幹に据えようとの意図を感じるが，意味の分析としては単純すぎると筆者は思う。

4.3.2. 動詞形 (Verbal Forms) 著者の連用形各種及び命令形各種を扱っている。著者は「日本語の動詞接尾辞は、文法接尾辞も派生接尾辞も、すべて単職能的 (mono-functional) であって、一個の接尾辞が同時に二つ以上の文法的職能を担う事は無い。」と述べており，膠着語における 1 接辞=1 文法範疇説において河野六郎氏と共通しているといい得る (本稿【注】7 参照)。

4.3.3. 二次語幹 (Secondary Stems) 著者はこの中で次の以下の 2 つの違いを，「前者における「水」は、引用節外に置かれて他動詞「思ウ」の客語として用いられ、後者にあっては、「水」が引用節内に置かれているものと見做される」としているが，筆者は極めて疑問に思う。

水ヲ「飲ミタイ」ト思ウ。 「水ガ飲ミタイ」ト思ウ。

本来の日本語では「飲ミタイ」は、「飲メル」(可能)と同じく，本来の客語が主語に変わる，すなわち「飲ミタイ」は一種の願望形容詞，「飲メル」は可能動詞 (英語 drinkable (形容詞) 参照) に相似するものであることから，格の転換が行われたと見るのがより適当ではなからうか？

4.3.4. 不規則接尾 (Irregular Suffixation) いわゆるカ変，サ変の不規則動詞 (Irregular Verb)，不規則動詞接尾辞 (Irregular Verbal suffix) *-(i)mas-yoo*，*-(i)mas-en-desita* その他，変則動詞「ナサル」，「下サル」，「御座ル」等。

4.4. 第 2 編 第 4 章 動詞の種々相 (Varieties of Verbs)

4.4.1. 動作動詞の自他 (Transitivity of Verbs) 同根語 (cognate) 間に見られる語幹末音の交替 (alternation) を含めた派生の様相：(自動詞～他動詞) 動ク (*ugok-*)～動カス (*ugokas-*)，明ク (*ak-*)～開ケル (*ake-*)，暮レル (*kure-*)～暮ラス (*kuras-*)，起キル (*oki-*)～起コス (*okos-*)，流レル (*nagare-*)～流ス (*nagas-*)，残ル (*nokor-*)～残ス (*nokos-*)，焼ケル (*yake-*)～焼ク (*yak-*)，掛ル (*kakar-*)～掛ケル (*kake-*)，分レル (*wakare-*)～分ケル (*wake-*)，似ル (*ni-*)～似セル (*nise-*)，乗ル (*nor-*)～乗セル (*nose-*)。

4.4.2. 相 (Voice) 「主語と述語動詞の動作の方向との関係を示す文法範疇を相と言う。」能動相 (Active Voice) ; 受動相 (Passive Voice), 直接受動 (Direct Passive), 間接受動 (Indirect Passive) — いわゆる「迷惑受身」。授与動詞からは間接受動文は作り得ない。中相動詞「見エル」、存在動詞「在ル」等の動作動詞からは受動文は作り得ない。形状動詞は能動相にのみ用いられる。使役相 (Causative Voice) 親ガ子供ヲ家ニ残ラセル。親ガ子供ヲ家ニ残ス。親ガ子供ニ家ニ残ラセル。*親ガ子供ニ家ニ残ス。*子供ガ料理ヲ食卓ニ残ラセル。(非情物を客語に取る時) 子供ガ料理ヲ食卓ニ残ス。親ガ子供ニ料理ヲ食卓ニ残サセル。先生ガ書生ヲ家ニ上ガラセル。先生ガ書生ヲ家ニ上ゲル。先生ガ書生ニ家ニ上ガラセル。先生ガ書生ニ書物ヲ棚ニ上ゲサセル。*先生ガ書物ヲ棚ニ上ガラセル。先生ガ書物ヲ棚ニ上ゲル。許容使役 (Permissive Causative)

自動詞—使役相動詞—他動詞：逃ゲル (nige-) → 逃ゲサセル (nige-sase-) → 逃ガス, 明ケル (ake-) → *明ケサセル (ake-sase-) → 明カス (akas-) 家ガ建ツ。*家ヲ建タセル。家ヲ建テル。; 教官ガ兵士ヲ立タセル。*教官ガ兵士ヲ立テル。教官ガ国旗ヲ立テル。教官ガ家ヲ建テル。

4.4.3. 補助動詞 (Auxiliary Verbs) 著者は補助動作動詞 (Auxiliary Action Verbs) イルの附いたシテイルが進行体 (Progressive Phase) をなすと言ひ、それは「ある動作・作用が特定の辞典において猶、継続中であることを示す表現法」であるが、「自動詞の完了連用形に補助動詞「イル」の附いた動詞句は進行体を表さず、自動詞の動作・作用の結果として生じた状態が、特定の辞典においても猶、保たれている事を表す。」として「窓ガ開イテイル。」を例として挙げる。また「本ヲ読ンデシマツテイル」では「補助動詞が(「シマウ」のように)自動詞である時は、たとえ対格名詞(ここでは「本ヲ」)が先行していても状態体であつて、進行体ではない。その対格名詞は、先行する連用形動詞(ここでは「読んで」)の客語に過ぎないからである。」と述べている。著者のこの認識は甚だしい誤りである。第1に、「テイル」の意味は本動詞が自動詞、他動詞であるかの違いなく「動作の継続」(進行体)か「動作の結果」(状態体)の違いを表す要因として本動詞のある種の性格に負うていることがすでに多くの言語学者により確定されている。「継続」(進行体) — (自動詞)「歩ク」、(他動詞)「読ム」; 「結果」(状態体) — (自動詞)「行ク」、(他動詞)「持ツ」。自他動の別を問わずテイル形式で「継続」(進行体)と「結果」(状態体)の別をもたらす動詞の性格については金田一春彦から言語学研究会に到る研究の流れの中でいろいろな規定が成されてきたが、まだ不完全ながらも、徐々に成果が生み出されつつある。第2に、例えば「読ム」という動詞(「総合的な形 (synthetical form)»)は「読ンデイル」, 「読ンデイク」, 「読ンデクル」, 「読ンデオク」, 「読ンデシマウ」, 「読ンデミル」,

「読ンデヤル」, 「読ンデクレル」等々の「分析的な形 (analytical form)」に拡大し得、そのあるものは「読ンデシマツテイル」のようにさらに拡大し得るのであって、その際「シマウ」の自他動性とは何のかかわりもないのである。ただ一つ「読ンデイル」に対比される「読ンデアル」形式だけは本動詞が他動詞の場合だけ可能であり、意味はこの場合「結果」(状態体)だけであり、しかも本動詞の客語は主格に変化するのである。「本ヲ読ンデイル」－「本ハ(ガ)読ンデアル」。「分析的な形」は多かれ少なかれ多くの言語に見られるものであるが(ギリシア語のような総合的な形の多い言語ですらそのパラダイグマには分析的な形が散見されるが、英語に至っては分析的な形はかなり多い)、膠着語、その中でも日本語、さらには朝鮮語にはことのほか多く、終止形だけでなく、いわゆる拡大された *converb* (接続形、著者の「連用形」) や格が認められる。例: 「スルヤ否ヤ」, 「スルニツレテ」, 「スルガ早イカ」, 「シタ日ニハ」; 「…ニヨツテ」, 「…ニツイテ」, 「…ニ関スル」, 「…カラシテ」, 「…ノタメニ」, 「…ト共ニ」等々。これはすべからず文法で扱われなければならない。

著者は「自動詞的状态体」～「他動詞的状态体」の例「碑ガ建ツテイル。～碑ガ建テテアル。」を挙げている。そして移動動詞 (Motion Verb) は対格を取って他動詞の「テイル」形で進行体になると言っている。例: 「水鳥ガ湖面ヲ飛ンデイル。」では「飛ブ」が他動詞であるから進行体だというのであるが、「水鳥ガ山ニ向カッテ飛ンデイル。」という場合も進行体ではないのか? 「嵐ノ中ヲ雪ガ降ッテイル」であっても単に「一日中雪ガ降ッテイル」であっても進行体ではないのか? 著者は「何ヲ泣イテイルノカ。」は他動詞だから、「幼児ガ寝テイル」の「寝ル」は「文語に「イヲ寝ル」と言う通り、本来から他動詞であるから」、さらに「既ニ本ヲ五冊出シテイル。」では「出ス」が他動詞であるにも拘らず状態体であるが、これは自動詞の「シマウ」を補助動詞に取って「出シテシマツテイル」とあるべきところを、対立する自動詞「出ル」の状態体たる「出テイル」からの類推 (analogy) による混同も手伝って、誤用せられたものと解せられる。」とあるに至っては、著者ともあろう言語学者にはいかながなものと問いたい。著者は「美シクハアル」という形を挙げているが、筆者は「美シクモアル」, 「美シクサエアル」; 「本デハアル」, 「本デモアル」, 「本デサエアル」; 「読ミハスル」, 「読ミモスル」, 「読ミサエスル」のような形(「美シイ」, 「本ダ」, 「読ム」等が2文節に分離し、その間に副助詞が入り得るような単語)を「分離形容詞」, 「分離繫辞」, 「分離動詞」と呼んでいる¹³。一般に著者は「分析的な形」に注意を払ってはいるようだが、それらを文法形式としてしかるべき扱いをしているかが曖昧な点は残念である¹⁴。

4.4.4. 語性 (Character) 著者は「動作動詞～形状動詞：楽シム (tanosi-m-u) ～楽シイ (tanosi-i), 騒グ (sawag-u) ～騒ガシイ (sawag-asi-i), 痛ム (itam-u) ～痛マシイ (itam-asi-i), 痛メル (ita-me-ru) ～痛イ (ita-i)」等を挙げ、かつ「富ム (tom-u) ～貧シイ (mazusi-i), 老イル (oi-ru) ～若イ (waka-i)」のように動作動詞が動的な属性を表すに対し、形状動詞は没時間的な静的な属性を表す(この場合状態体の「富ンデイル」, 「老イテイル」として見て、初めて意味的に「貧シイ」, 「若イ」の正反対の意味を成す)とする。著者はこのような動詞を継続動詞と呼び、形状動詞はすべて継続動詞であるとする。そして存在動詞 (Existential Verb) (「在ル」, 「居ル」), そしてそれらの意味的に正反対の形状動詞「無イ」, それらの丁寧語「御座ル」, 尊敬語「イラッシャル」, 謙譲語「オル」も継続動詞であり、「時間的に変化流動する事無く、ある瞬間継続する動作・作用または存在・状態などを叙述する語性【太字は筆者のもの】の動詞を継続動詞 (Durative Verb) と言う。」と述べている。さらに可能動詞 (Potential Verb) も継続動詞と見做されるとしている (さらに可能動詞は存在動詞とは違って完了連用形に補助動詞「イル」を付けて状態体とするとも言っている)。また中相動詞 (Medio-passive Verb) も可能動詞と同じく状態体の動詞句を作り得る (見エテイル) としている。上記の存在動詞, 可能動詞, 中相動詞以外の動作動詞は「語性の上から瞬間動詞 (Momentaneous Verb) と称される種類のものに属する」と言っている。著者は次のように言う。「すべての動詞は、語性的に継続動詞と瞬間動詞とに二分せられ、又それ以外の分類は無いにも拘わらず、巷間に、金田一春彦氏などの、「死ヌ」「点ク」「届ク」等は瞬間的動作をあらわすものとして、別に一類を設ける意見がある様であるが、この意見は文法論としては無意味である。」また「第四種の動詞」も認めない。ここにおいて語性なる概念はアスペクトの観点からの分類によって得られた動詞の部類であるらしいことがうかがわれる¹⁵。第四種動詞を認めない点は筆者も賛成である。

4.5. 第2編 第5章 文 (Sentences)

4.5.1. 主題-陳述 (Theme-Rheme) 著者は主題部と陳述部について述べる際に「日本の一部の学説に、主体的判断を反映して文を成立させる統覚作用の籠められているものと信じられている「陳述 (modus?)」とは全く別個の概念である。」と、まことに正当にも、断っている。ところで著者は「象ハ鼻ガ長イ」では「象ガ」が主題部を成し、一個の客体文たる「鼻ガ長イ」がこの文全体の陳述部を成す。」と言い、「小説ハアマリ読マナイ。」「日本ハ温泉ガ多イ。」では棒線部の主題は客体文における対格名詞, 位格名詞に相当するものであり、「僕ハ鰻ダ。」「明日ハ試験ダ。」では「ここでの主題はいずれの格に立つ実名詞にも相当していない。」と述べている。著者がこれらの「ハ」, 「モ」を提題助辞と呼ぶ所以で

ある。著者は題目語の類を一切立てない。題目語を立ててもそれであらゆる場合が説明付くものでもないが、朝鮮語にも類似物があり、筆者はこの点では大いに悩んでいるところである。

4.5.2. 節 (Clauses) 著者は「単文 (Simple Sentence)」、「複文 (Complex Sentence)」、「重文 (Compound Sentence)」及び「名詞節 (Nominal Clause)」、「連体節 (Attributive Clause)」、「副詞節 (Adverbial Clause)」(この三者を「従節 (Subordinate Clause)」と呼び、それ以外の「主節 (Main Clause)」から区別する) を認める。副詞節を成すものとして接続助辞と形式名詞が利用される。著者の説明はヨーロッパ諸語の場合とまったく同じと言ってよい。ここで筆者は国文法に反発する著者からして結局はヨーロッパ文法の枠を越えることのできないものとして次の点を挙げざるを得ない。1) 日本語においては(朝鮮語においても)複文と重文の本質的な差を認めることが困難である。2) 日本語では(朝鮮語においても)無主語文が多いために(本来の無主語文もあれば「春ニナツタ。」)、主語が義務的に省略されるもの(「ワタクシハ窓辺ニ座ルト、本ヲ読ミダシタ。」の2番目の部分の主語)、省略された主語を特定し得るもの(「行ッタ?」「ウン、行ッタ。」の主語)、主語を特定し得ないもの(シテモシナクテモヨイトイウ原則)その他により文あるいは節と句(主語を欠く単位)との区別が付けづらい。アルタイ諸語の中でも主語性を重要視するチュルク諸語と他とは異なるかもしれないが、日本語と朝鮮語は少なくとも著者のような明確な区分は不可能であると思われる。

4.5.3. 語順 (Word Order) 著者はイエスペルセンにならって「各有意音の語群内での職能を階 (Rank) と呼ぶ。階には三類がある。」として「アラユル言葉」、「極ク難解ナ書物」における「言葉」や「書物」がそれぞれの名詞句・名詞節における一次要素 (Primary Element) であり、「アラユル」と「極ク難解ナ」とかは、一次的要素への附随的存在と看做され、…二次要素 (Secondary Element) と認められる。…続いて、上掲の二次要素「極ク難解ナ」なる語群の中での副詞「極ク」は、更に形状名詞の「難解ナ」への附随的存在であるから、一次要素たる「書物」からすれば三次要素 (tertiary element) という事になるのであるが、「難解ナ」が一次要素と認められるのである。」と言っている。著者は主体文において主題部+陳述部という語順になるのも、時称副詞(「今日僕達ハ久シ振りニ芝居ヲ見タ。')や接続副詞(「シカシ今日ハ欠席スル訳ニハ行カナイ。')の文中の位置についても棒線部分が二次要素であると説明している。

4.5.4. 省略 (Elipsis) 著者は文の連続体としての文章 (Discourse)「ヤッパリ面白クナカッタネ。(省略)」、脈絡 (Context)「ドウゾコチラへ。」、要語省略 (Brachylogy)「ココデ待ッテイテ。(「下サイ」の省略)」、論理的省略 (Logical Elipsis)「兄ト姉ハ大阪デ、弟ト妹ハ東京デ生レタ。」、歴史的省略 (Historical Elipsis)「アレハ駅デスカ。」しかし*「アレハ駅ダカ。」;「ソレハ間違イダヨ。(男性語)」

～「ソレハ間違イヨ。(女性語)」;「外ハ寒カッタカ。」～「外ハ寒カッタ？」を扱っている。

5.1. 第3編 日本語動詞体系発達史 第1章 古代日本語の動詞接尾組織 第1篇と第2編とで現代語が扱われた後、第3編では現代語以前が扱われている。古代語の動作動詞と形状動詞の接尾組織、「加行延言」、「音便形」、「二段活用的一段化」の問題に各1章が割かれている。「序言」は本稿2.4.参照。

5.1.1. 古代日本語動詞の一次語幹 著者は「古代語におけるも、動詞の語構成は、本質的に現代語動詞と変わるところは無い。」と言い、「四段活用型」の動作動詞が「原始日本語に於いて語幹が子音に終わったもの」との推定に対する反論(例えば、「原始日本語」に閉鎖音が在ったとすることと、上代日本語が現に開音節だという事実との間は依然つながらない)に対して「語幹とは要するに文法的抽象なのである。それが語として認定せられると否とは個別の問題である。」と述べている。このことは一応容認されると筆者も考える。例えば古典ギリシア語で名詞主格 γάλα<牛乳>の語幹が γάλακτ- であるのは一般に語末に許容される子音が制限され、κτ がその位置に許容されないためである。また中期朝鮮語において動詞가<行く>、오<来る>の語幹のアクセントは実際には位置によって「低」と「高」とが現れ得るが、本来語幹に固有なものとして「低」が認め得るのは、アクセントに関する一定の規則の結果であり、抽象物としてそれが妥当だからである¹⁶。ただし著者が同じことは接尾辞や語尾についても言えることをここで明言していないことを指摘しておこう。

著者の次の発言は重要である。「子音幹動詞「聞く」の命令形は「聞け」である。ここから kik-e における接尾辞 -e を抽出し得る。母音幹動詞の命令形は、「見よ」「生きよ」「上げよ」の様に、後代に接尾辞「-よ」を伴うようになったが、この接尾辞は本来終助辞と思しく、文献時代に至るも 吉野よく見よ良き人よく三(見)(万一・27)(以下略一筆者) 等々の例を見出す。いずれも接尾辞 -yō を伴わずに mi-, tutomē-, *midare-, kō-, se- が夫々命令形として用いられている。殊に「來」の命令形は平安朝に至るも「來」として現れ、「來よ」の形は取らなかった。これらは、結果的には、母音幹がそのままの形で命令形として機能している事になるが、命令形接尾辞 -e が子音幹に現れるところから、形態論的に見て、この接尾辞が母音語幹に附いて潜在形を取り、ゼロ形態をもって附着しているものと解せられる。つまり、一個の連結母音より成る -(e)が古代語における命令形形成の文法接尾辞なのであって、上掲母音幹動詞の各命令形は、古文獻に語例を見ない。但し、これは、その命令形の記述が偶々現存する文献に見当たらないという事であって、命令形を欠いたという事では勿論ない。斯くて、前掲の「見る」「生く」「上ぐ」を以て代表せられる三種の母音幹動詞の語幹はそれぞれ

れ mi-、iki-、agë- であった事が知られると共に、「来」と「為」の語幹がそれぞれ kö- と se- であった事も知られるのである。】【以上2種の棒線は筆者のもの】つまり命令形が子音語幹に附く接尾辞 -e の存在により、語幹のみが命令形として機能するアルタイ諸語とは異なるものと認めつつも、古代語における母音語幹動詞の命令形における形の考察によっていわゆるカ変とサ変の語幹形を論理的に推測したのである。本稿の 3.2.6.参照。

5.1.2. 古代日本語動詞の派生語幹 著者は使役 (causative) -(a)simë- 【しむ】、
 -*(s)asë- 【す・さす】、受動 (passive)、可能 (potential) -*(r)arë- 【る・らる】、
 -*(r)ayë- 【ゆ・らゆ】、否定 (negative) -(a)n- 【*ぬ】、-(a)z- 【ず】、-(a)zu- 【ず】、
 -(a)zar- 【ざり】 (-(a)z-と補助動詞「あり」 ar-i の語幹との合成接尾辞)、完遂
 (completive) -*(i)të- 【つ】 (作意 (intentional) 動作を表す動詞幹+)、-(i)n- 【ぬ】
 (無作意 (nonintentional) 動作を表す動詞幹+)、状態 (statal) -(i)tar- 【たり】 (完
 遂の -*(i)të- の順接連用形 -*(i)të- + 補助動詞「あり」の語幹が融合)、-(e)r- 【り】
 (「聞けり」 kik-er-i 「思へり」 omöp-er-i) について述べている。著者は「この連
 結母音は i でなくて e であるが、この e は例外的に「来」や「為」の語幹母音 ö
 や e と交替するのみならず、通常之母音語幹動詞の末尾母音とも古い時代には
 交替した。」としている。著者はさらに連結母音を持つもの：回想 (retrospective)
 -(i)ker- 【けり】 (過去 (preterite) -(i)ke- 【き】 + -(e)r- 本来過去における状態を
 表した。その非完了連体形 -(i)ker-u に由来するものである。)、過去推量 (preterite
 conjectural) -(i)kem- 【けむ】 (過去の -(i)ke- 【き】 + 前望 (-(a)m-))、想定 (suppositional)
 -(u)ram- 【らむ】 (-(u)r- + -(a)m- 【む】。-(u)r- の意味は定かではない。) を挙げて
 いるが、様相 (evidential) の -(i)mer- 【めり】、いわゆる「ハ行延言」を作る -(a)p-
 【ふ】 (子音語幹にしか付き得ない) については懐疑的である。

5.1.3. 古代日本語動詞の代替母音 著者は言う。「古代語の終止形 (定動詞) と
 連体形 (動名詞) は別形態を取っていたが、現代語では、終止形と連体形は非完
 了・完了・前望の三態を通して完全に同形である。現代語の終止形は古代語の終
 止形に由来するものではなく、現代語の終止形・連体形の両形が、共に古代語の
 連体形に由来するものだからである。しかし、現代語の終止形・連体形と、その
 祖形である古代語の連体形の間には、語幹及び接尾組織の双方においてかなりの
 相違が見られる。」著者は子音幹動詞 (「聞く」, 「思ふ」), 母音幹動詞 (「見る」,
 「着る」) は現代語と同様に kik-(r)u → kik-u, omöp-(r)u → omöp-u; mi-ru, ki-ru
 とすればよいが、「生く」, 「上ぐ」, 「来」, 「為」の非完了連体形はそれぞれ iki-ru
 → iku-ru, agë-ru → agu-ru, kö-ru → ku-ru, se-ru → su-ru となり、「接尾辞-(r)u
 の附着に付随する逆行同化により、其の語幹末母音を一律に -u に交替せしめて

iku-, agu- 並びに ku-, su- になるのである。…この種の母音を代替母音 (alternate vowel) と呼ぶ。」著者は「古代日本語の非完了連体形を形成する文法接尾辞は」 「-^u(r)u と表記し得るもの」(「代替母音の *u* は、*-i* 以外の語幹末音と交替するという性質のものであって、子音語幹に附く時には関わりが無く、…母音の *-i* で終る母音語幹に附く時にも代替母音は関与」しない) であり、「非完了終止形を形成する文法接尾辞は」 「-^o(r)u と表記出来る」(「終止形の接尾辞 *-(r)u* の附着に付随する逆行同化により、語幹末母音を一律にゼロ形態に交替せしめて、恰も子音語幹と同形の *ikø-*、*agø-* 並びに *kø-*、*sø-* になるのである。斯くしてこの場合はゼロ形態の母音が代替母音と認められ」る。…「ここでも代替母音 *ø* は、子音語幹に附く時には関係が無く、*-i* で終る母音語幹に附く時には関与しない) が、「何故に非完了終止形の接尾辞 *-(r)u* は代替母音に *ø* を取り、同じく連体形の *-(r)u* は代替母音に *u* を取ったのか、その理由は判然としない。」としてさまざまな説を紹介している。筆者の代替母音による母音の交替例を示す。

| 接尾辞 語幹 | 非完了終止形 - ^o (r)u | 非完了連体形 - ^u (r)u | 逆説連用形 - ^{*u} (r)ë | 前置連用形 - ^u (r)aku |
|--------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|--------------------------------|
| (聞く)kik- | kik-u | kik-u | kik-ë | kik-aku |
| (見る)mi- | mi-ru | mi-ru | *mi-rë | mi-raku |
| (過ぐ) sugi- | sugiø-u | sugi-u-ru | *sugi-rë | sugi-raku |
| (寝) *në- | nø-u | nu-ru | *nu-rë | nu-raku |
| (来)kø- | kø-u | ku-ru | *ku-rë | ku-raku |
| (為)se- | sø-u | su-ru | *su-rë | su-raku |
| (死ぬ)sinø- | sinø-u | sinu-ru | *sinu-rë | sinu-raku |
| (散らむ)tir-am- | tir-am-u | tir-am-u | tir-am-ë | tir-am-aku |
| (有りつ)ar-itë- | ar-itø-u | ar-itu-ru | *ar-itu-rë | ar-itu-raku |
| (経ぬ)pë-nø- | pë-nø-u | pë-nu-ru | *pë-nu-rë | pë-nu-raku |

著者は「これらの接尾辞の附着に際し、何故に語幹末の母音 *-i* のみが代替母音と入れ替わらなかったのかが定かでない。」と述べている。8 母音説を支持する著者は単母音語幹の *pi-*、*mi-*、**wi-* だった「干」^干、「廻」^廻、「居」^居 が後代に一様に *pi-*、*mi-*、*wi-* へと推移したと述べている。

5.1.4. 古代日本語動詞の四動詞形 著者は古代語におけるさまざまな形を綿密に扱っている。

「終止形を形成する文法接尾辞には、非完了を表す^o-(r)u に加えて、過去 (preterite) を表す (-i)ki があつた。この接尾辞は、前述した回想を表す (-i)ker-【けり】や過去推量を表す (-i)ke-m-【けむ】における (-i)ke- と同源であろう。」
 「変格」動詞の「為」⁺se + (-i)ki → si-ki (「来」の例なし)。他に完遂の派生接尾辞 ^{*}-(i)të + (-i)ki → ^{*}-(i)të-ki, ^{*}(i)të + (-i)nø- → -(i)n-iki「テシマッタ」; 状態の派生接尾辞 -(i)tar- → -(i)tar-iki, -(e)r- → -(e)r-iki「テイタ」「デアッタ」がある。

「連体形を形成する文法接尾辞には、非完了態の ^o-(r)u に加えて、完了態を表す (-i)si が在つた。」カ変: ki-si, kö-si; サ変: se-si。「為る」:⁺「スルノ」,「為し」:⁺「シタノ」。

「連用形(副動詞)を形成する文法接尾辞には種々なるものが含まれる。」順接(copulative)連用形: -(i), カ変 ki-, サ変 si-。これの後に他の接尾辞が接続する事は無い。「完遂の派生接尾辞 ^{*}-(i)të【つ】の順接連用形は ^{*}-(i)të として文法接尾辞化した。」逆説連用形は「代替母音の u をもつた ^u-(r)ë によって用いられる。伝統文法に所謂「已然形」の「結び」と同形であるが、この形は連用形の一つであるから、文を完結する機能は無く、文末に置かれる時は逆説の意味の連用節を作り、主節を省略して余剰を残す。因由と譲歩の連用形も代替母音の u を持つ ^u-(r)ëba と ^u-(r)ëdö (^u-(r)ëdömö) だった。「否定の派生接尾辞 -(a)n-【ぬ】の -n- は純粹な子音であつたから、因由と譲歩の連用形形成に際し、代替母音とは関わりが無く -(a)n-ëba, -(a)n-ëdö の形を作つたが、完遂の -(i)nø-【ぬ】の方は ø を代替母音と交替せしめ、それぞれが ^{*}-(i)nu-rëba, ^{*}-(i)nu-rëdö と成つた。語幹の末尾に準母音の -nø- を持つ「死ぬ」「往ぬ」もまたこれと同様である。」完了態の逆説連用形 -(i)sika。因由と譲歩の連用形: -(i)sikaba, -(i)sikadö。語幹に附着して条件(conditional)連用形を作る接尾辞: -a(b)a。この連用形+詠嘆(exclamatory)の助辞「や」: -a(b)a-ya “ah, if I could...!”「レバナア」「タラナア」。完了態の条件連用形接尾辞: -(s)eba (完了態の連用形を作る一連の -(i)sika, -(i)sikaba 等に見られる -(i)si-【し】と此処に見られる -(i)seba の -(i)se とは、完了態連体形を作る -(i)si と同源であろう。-(i)seba における -(i)se の形は、完了態を表す接尾辞の -(i)si- に条件連用形の -a(b)a が続き、その逆行同化から -(i)seba へ変つたと思われる。)「譲歩を表す接尾辞としては、^u-(r)ëdö よりも仮定の意味の強い連用形を作る -(u)tö もある (-u)tömö も)。「これが古形と思われるが(恐らくは想定派生接尾辞 -(u)ram-【らむ】におけると同様に、一時期は交替母音 ø を持つ ^o-(r)utö または ^o-(u)tömö に変り)、遂には非完了終止形に近く接続助辞「とも」に移行して了つた。」否定連用形 ^{*}-(a)dë ← 否定の派生接尾

辞 $-(a)n-$ 【*ぬ】 + $-(i)t\ddot{e}$ (縮約合成接尾辞). 否定条件 (negative conditional) : $-(a)na-$ $-(a)nm\ddot{o}$, $a-(a)namu$. 「ナケレバ(ナア)」「ナクテハ(ネ)」、同時 (simultaneous) 連用形 : $-(i)tutu$, $-(i)nagara$.

命令形 : $-(e)$, 否定命令形 : $-(r)una$. 命令形接尾辞は次の語幹には附かない : 否定の $-(a)z-$ 【ず】, $-(a)n-$ 【*ぬ】, 前望の $-(a)m-$ 【む】, 想定 of $-(r)uram-$ 【らむ】, 過去推量の $-(i)ke-m-$ 【けむ】, 回想の $-(i)ker-$ 【けり】. 受動の $-(r)ar\ddot{e}-$ 【る・らる】, $-(r)ay\ddot{e}-$ 【ゆ・らゆ】 (肯定命令の $-(e)$ は付き得たと思われる). 「作為完遂の $-(i)t\ddot{e}$ 【つ】の肯定命令形 $-(i)t\ddot{e}-\emptyset$ が…用いられた点から推して、 $-(i)ne$ なる形も存在したと思われる。…現代語の「テシマエ」の意味に近い。」

著者はさらに言う。「文法接尾辞の結合する語幹の種類には一定の制約があった。例えば、完了の派生接尾辞 $-(i)se$ 【し】の作る派生語幹は条件連用を作る $-a(b)a$ 以外を附けず、又、此の文法接尾辞 $-a(b)a$ や順接連用形の文法接尾辞 $-(i)$ は、前望の派生接尾辞 $-(a)m-$ 【む】と其の合成派生接尾辞 $-(r)uram-$ 【らむ】、 $-(i)ke-m-$ 【けむ】などの作る二次語幹には附かず、否定の派生接尾辞 $-(a)z-$ 【ず】に附く時には必ず其の異形である $-(a)z-$ 【ず】を択んだ。非完了態終止形の文法接尾辞 $-(r)u$ が否定の二次語幹に附く時は、逆に $-(a)z-$ 【ず】を択び、非完了連体形の $-(r)u$ の他、前置連用形の $-(r)aku$ や逆接連用形の $-(r)\ddot{e}$ などは、 $-(a)z-$ 【ず】と其の異形 $-(a)zu-$ 【ず】の作る派生語幹には附かず、接尾辞 $-(a)n-$ 【*ぬ】の派生する否定二次語幹にのみ附く。完了態では、連体形を作る $-(i)si$ や逆説連用形を作る $-(i)sika$ などは否定の合成接尾辞 $-(a)z-ar-$ 【*ざり】による派生語幹のみを択び、過去終止形を作る $-(i)ki$ もこれと同様であったが、…古くは $-(a)zu-$ 【ず】による派生語幹も附いた。」

「非完了態終止形を作る $-(r)u$ は、動詞「有り」「居り」「侍り」の一次語幹…及び状態の $-(i)tar-$ 【たり】や、 $-(e)r-$ 【り】、回想の $-(i)ker-$ 【けり】、様相の $-(r)umer-$ 【めり】、否定の合成派生接尾辞 $-(a)zar-$ 【*ざり】による二次語幹とは結合する事が無い。」(本稿 3.2.7.参照)

5.1.5. 古代形状動詞接尾辞 著者は「現代語の形状動詞接尾辞には連結母音も連結子音も存在しない。」が、古代語では母音語幹と子音語幹 (s を末尾音とする) とがあり、終止形接尾辞は $-(s)i$ であり、前者では $taka-si$ (高し)、後者では $tanos-i$ (楽し) となる (本稿 3.2.7.参照) と言う。同様に非完了態連体形 $-(i)ki$: $taka-ki$ (高き), $tanos-iki$ (楽しき); 順接連用形 $-(i)ku$: $taka-ku$ (高く), $tanos-iku$ (楽しく)。しかし「動作動詞の過去終止形を作る文法接尾辞 $-(i)ki$ は、直接に形状動詞語幹には付き得ないから、動作動詞化の派生接尾辞 $-(i)kar-$ に依って先ず、形状動詞たる $taka-$ や $tanos-$ を動作動詞語幹たる $taka-kar-$ $tanos-ikar-$ に変え、然る後に文法接辞の $-(i)ki$ が附いて $taka-kar-iki$ (高かりき)、 $tanos-ikar-iki$ (楽しか

りき)の形を成したものである。」同様に *taka-kar-isi* (高かりし)、*tanos-ikar-isi* (楽しかりし)、前望の派生接尾辞 *-(a)m-*【む】、否定の派生接尾辞 *-(a)z-*【ず】や *-(a)n-*【*ぬ】、回想の派生接尾辞 *-(i)ker-*【けり】、命令形の派生接尾辞 *-(e)*等々の動作動詞接尾辞は動作動詞化の *-(i)kar-* を介してのみ形状動詞語幹に附着し得る。

さらに著者は「形状動詞の一次語幹を動作動詞化する語彙的接尾辞には、上述の *-(i)kar-* の他に *-(i)ke-* もあった。」とし、*-(i)ke-* に接尾する *-(a)m-*【む】の例以外にも「*-(a)ba* や古形 *-(ë)dö* の附いた *-(i)keba* と *-(i)kedö* が、それぞれ因由と譲歩の連用形を作る文法接辞に成ったと見做される。」「他に因由の *-(i)keba* と譲歩の *-(i)kedö* も併存して」おり、「動作動詞の連用形接尾辞たる因由の *-(i)keba* と譲歩の *-(i)kedö* とがそれぞれ附いて成った合成接尾辞であると思われるから、同様に逆接連用形の *-(i)keba* が附いて成った *-(i)kerë* (伝統文法での所謂「已然形」と同じ形)も存在したものと推定せられるが、現存する文献には記録をとどめていない。」「*-(i)kar-*、*-(i)ke-*、*-(i)ker-* は、動作動詞接尾辞の附着に際して介入するのみであって、特に意味内容は持たなかった。」また「これらに限らず、例えば *-(i)m-*【む】は形状動詞の語幹を他動詞の語幹に変えた。この派生接尾辞に動作動詞の順接連用形を作る *-(i)*の附いたものがいわゆる「ミ用法」である」とした。

「動作動詞の語幹に附着して、逆にこれを形状動詞化する派生接尾辞」：必然 (*apodictic*) *-(r)ubë-*【べし】、非完了態終止形 *-(r)ubë-si*、連体形 *-(r)ubë-ki*、順接連用形 *-(r)ubë-ku*；否定 *-(r)ubë-kar-az-u*、前望 *-(r)ubë-ke-m-u*。古形は *-(u)bë-*【べし】であったと思われる。「本義は必然を表したところから、可能・推量・義務などの意味を語幹にそえるに用いられた。」想定：*-(r)uras-*【らし】、非完了終止形 *-(r)uras-i*、連体形 *-(r)uras-iki*、古形 *-(u)ras-*。 *-(a)ma-*【まし】(これは前望の動作動詞派生接尾辞 *-(a)m-*【む】と同源と思われる)。非完了終止形は *-(a)ma-si*。条件連用形 *-(a)ma-seba* (この形は、完了態の条件連用形を作る *-(i)seba* が動作動詞化接尾辞を介せず附着した唯一の例外である。) 否定推量 *-(r)urasiz-*【ましじ】、非完了終止形 *-(r)urasiz-i*、古形は恐らくは *-(u)masi-z-i*。平安朝以降の文献に現れる願望 (*desiderative*) *-(a)mapos-*【まほし】。

著者は「否定の派生接尾辞 *-(a)z-*【ず・じ】は、動作動詞の文法接尾辞 *-(r)u* を付けて非完了終止形 *-(a)zu* の形を作る事は前述したが、同時に形状動詞の文法接尾辞 *-(s)i* を付けて *-(a)z-i* の形も取り得た。終止形に限られるが、*-(a)z-* は動作・形状の両動詞二次語幹を派生し得る特殊な派生接尾辞であった。」とし、山田孝雄氏の説を引用し、著者はこれを動作動詞と形状動詞の語性 (*character*) の違いに帰せしめている。

5.1.6. 所謂「ラ行変格活用」の淵源 著者は語性の説明をした後（本稿 4.4.4.参照）、「有り」、「居り」、「侍り」の類の動詞に関する諸説を検討し、「形状動詞「無し」の正確な反意語は動作動詞の「有り」である。「無し」とは、“to be non-existent”という意味であり、「有り」とは“to be in existence”るから、語性的に言って、「有り」は継続動詞と認められる。形状動詞の形状動詞性は、もっぱら文法接尾辞の -(s)i の部分に依って表示せられる事は先に述べた。斯くて、継続動詞たる「有り」は、語幹の ar- に形状動詞接尾辞 -(s)i が結合して ar-i の形を成したものであると認める事が出来る。」と述べている。最後に著者は次の表を挙げる。

| 文法接尾辞 | | 動作動詞非完了態 | | 形状動詞非完了態 | |
|-------|---------------------------|----------------------------|----------------------------|----------------------------|------------------------------|
| | | 終止形 - ^o (r)u | 連体形 - ^u (r)u | 終止形 -(s)i | 連体形 -(i)ki |
| 派生接尾辞 | | | | | |
| 使役 | -(a)simë- | -(a)sim-u | -(a)sim-ru | — | — |
| 受動 | -([*] r)arë- | -(r)ar-u | -(r)ar-ru | — | — |
| 完遂 | -([*] i)të- | -(i)t-u | -(i)t-ru | — | — |
| 〃 | -(i)nø- | -(i)n-u | -(i)nu-ru | — | — |
| 状態 | -(i)tar- | — | -(i)tar-u | -(i)tar-i | — |
| 〃 | -(e)r- | — | -(e)r-u | -(e)r-i | — |
| 回想 | -(i)ker- | — | -(i)ker-u | -(i)ker-i | — |
| 前望 | -(a)m- | -(a)m-u | -(a)m-u | — | — |
| 過去推量 | -(i)këm- | -(i)këm-u | -(i)këm-u | — | — |
| 否定 | -(a)z- | -(a)z-u | — | -(a)z-i | — |
| 〃 | -(a)n- | — | -(a)n-u | — | — |
| 想定 | - ^o (r)uram- | - ^o (r)uram-u | - ^o (r)uram-u | — | — |
| 〃 | - ^o (r)uras- | — | — | - ^o (r)uras-i | - ^o (r)uras-iki |
| 否定推量 | - ^o (r)umasiz- | — | — | - ^o (r)umasiz-i | - ^o (r)umasiz-iki |
| 必然 | - ^o (r)ubë- | — | — | - ^o (r)ubë-si | - ^o (r)ubë-ki |

5.1.7. 結語 著者は日本語に活用がなかったことを挙げて、諸家に反駁している。「未然形なる概念に固執する伝統文法家に拠ると、平安朝に至って一般化する使役の「助動詞」に「す」「さす」の二様があったと言う。阪倉氏に従えば、「さす」は「す」の肥大形であり、「二接尾語の膠着による新形」であって、「活用語尾にア列音を有しない動詞にはこの「さす」が接尾し、それによって、この「す」といふ接尾語がつよく有してゐる、「ア列音に接続線とする傾向」【中略】を満足せしめてきたもの」といふ事になる。しかし、事實は斯く複雑なものでは決してなく、所謂「す」とは、派生接尾辞 -(^{*}s)asë- が子音語幹と結合して連結子音を潜在せしめた形であり、所謂「さす」とは、母音語幹と結合して連結子音を顕在

せしめた形に過ぎない事は、今さら言うを俟たない。」これが著者の提起した論の根幹であると思われる。

5.2. 第3編 第2章 上代語「加行延言」又は「久語法」の本質

5.2.1. 「延言」から「添加」へ 著者は「現代語に化石的に残る「曰く」「思或」^{いわ}「須く」^{おもわく}のような動詞形は江戸時代…から加行延言と称されて来たが、現在はク語法なる呼称がほぼ定着している。」とし、「上から延びたもの」とは考えずに、「下から附いたもの」という岡倉由三郎氏説に沿ったものであろうと述べている。

5.2.2. ク・ラクの所謂「接続」の問題 著者は岡田希雄氏の「nusum+aku=盗まく」説を嚆矢とし、「大野晋氏に拠れば、コトとかトコロとかいう意味の接尾辞 aku が動詞の連体形に接続して ua という母音連続が生じるので、前の狭い母音 (=高母音) の u が落ちて ua → a という変化が起きるのだと言う。」として大野晋氏に従ってその変化礼を次のように示している。

(四段)聞く kiku+aku → kikaku (聞かく), (ラ変)有る aru+aku → araku (有らく), (上一)見る miru+aku → miraku (見らく), (上二)起くる okuru+aku → okuraku (起くらく), (下二)告ぐる tuguru+aku → tuguraku (告ぐらく), (サ変)する suru+aku → suraku (すらく), (カ変)来る kuru+aku → kuraku (来らく), (ナ変)死ぬる sinuru+aku → sinuraku (死ぬらく); 「助動詞」行かむ -mu+aku → -maku (行かまく), 明かしつる -turu+aku → -turaku (明かしつらく), 明けぬる -nuru+aku → -nuraku (明けぬらく), 知れる -ru+aku → -raku (知れらく), 有らぬ -nu+aku → -naku (有らなく); (ク活)寒き samuki+aku → samukeku (寒けく), (シク活)悲しき kanasiki+aku → kanasikeku (悲しけく) 補³。

著者は「アク説には賛否両論がある。」として次のように続けている。「この説は上代に於ける母音変化を唯一の拠り所とするもので、此のように「音約された」と一様に解するのが最も合理的な説」と讃せられる築島裕氏は、「この説は、語源的説明として妥当であるが、共時的説明としても、少なくともこの語が広く行はれた奈良時代については、成り立ち得たと考へられる」と言われる。動詞に見る u+a → a の変化とは『語意考』に謂う約言^{つづめこと}であって、これは母音連続 (hiatus) 回避のための母音脱落で共時的変化と言えるかも知れないが、形容詞に見える i+a → e の変化とは、これが実際に起こったとしても、接触同化 (contact assimilation) であるから、通時的変化なのである。」

5.2.3. 上代語連体形の語構造 ここで著者は注目すべきことを述べているので、少し長いですが、引用しよう。「ク語法の語構成が果たして連体形に aku が附いてできたものか否か、極めて疑わしくはあるが、まずは連体形の語構造から見よう。夙に濱田敦氏が、「アルタイ語に属する諸言語には、本来開音節であったものは

全く見られない」として、「四段活用型」の動詞は「原始日本語に於いて語幹が子音に終わったもの」であるとの卓見を提出された。…しかし、敢えて原始日本語と言わずとも、現代語でも「四段活用」動詞の語幹は子音終止である。仮名文字に慣れた現代人は、その文字（即ち音節）を最少単位と捉えて「吞-マ・-ミ・-ム・-メ」のような「活用」（変化形）を聯想する。しかし、言語習得中の幼児は文字を識らない。ただ“nom”と発話して“ものを嚥下する”概念を表出し、“anai”と発話して“否定”の概念を表出する。同様に“nom”と発話した直後に“u”と発話して“肯定”の概念を表出する。又、“mi”と発話した直後に“ru”と発話して“肯定”の意を表出する。即ち、「吞む」の語幹は子音終止の nom- であり、「見ル」の語幹は母音終止の mi- なのである。」著者は先に「語幹とは要するに文法的抽象物なのである。」と説かれた（本稿 5.1.1.参照）のだが、ここにおいて著者は文字による錯誤の場合を含めて、幼児の言語における概念にも文法的抽象物を関連せしめていることが明白である。こうなるとそれは単なる抽象物ではなくなり、言語における現実をも考慮した概念であるということになる。

「…日本語の凡ての語（word）が開音節化した関係上、子音終止語幹動詞の命令形だけは例外的に母音 -e を添える。しかし、全アルタイ言語に並行して、他の凡ての動詞の語幹は命令形として表れると思われるから、上代の「上二段」動詞の語幹は乙類母音の -i 終止であり、同じく「下二段」動詞の語幹は乙類母音の -ë 終止であったと見做される。」【著者の記述からしてこの現象がもっとも顕著に表れるのはカ変とサ変の場合である一筆者】。しかしこの場合の語幹の具体的な形の抽出はアルタイ諸語にほぼ共通している動詞語幹=命令形という現象との奇しき一致を根拠としているところは著者ならでは語幹抽出の見事な技術と言わざるを得ない。ついでながら、朝鮮語の命令形は歴史時代における限りはいかようにもアルタイ諸語とは趣を異にすると言わざるを得ない。著者はこのように形容詞の場合も説明している。

5.2.4. 久語法の構造の実体 著者は子音語幹の動詞、形容詞、「助動詞」の当該形を次のように分析して示している。

思はく（四段）omöp-^u(r)aku → omöp-øaku = omöp-aku, 在らく（ラ変）ar-^u(r)aku → ar-øaku = ar-aku, 見らく（上一）mi-^u(r)aku → mi-raku = mi-raku, 恋ふらく（上二）kopï-^u(r)aku → kopï-raku = kopu-raku, 告ぐらく（下二）tugë-^u(r)aku → tug^u-aku = tugu-raku, 来らく（カ変）kö-^u(r)aku → k^u-raku = ku-raku, 為らく（サ変）se-^u(r)aku → s^u-raku = su-raku, *往ぬらく（ナ変）inø-^u(r)aku → in^u-raku = *inu-raku; 「助動詞」思はしむらく omöp-(a)simë-^u(r)aku → omöp-asim^u-raku = omöp-asimu-raku, 散らまく tir-(a)m-^u(r)aku → tir-am-øaku = tir-am-aku, 逢へらく ap-(e)r-^u(r)aku → ap-er-øaku = ap-er-aku, 明かしつらく akas-*(i)të-^u(r)aku → akas-it^u-raku = akas-itu-raku, 経ぬらく pë-(i)nø-^u(r)aku → pë-øn^u-raku = pë-nu-raku, 在り

けらく ar-(i)ker-^u(r)aku → ar-iker-øaku = ar-iker-raku, 語りけまく katar-(i)kem-^u(r)aku → katar-ikem-øaku = katar-ikem-aku; 悲しけく (シク活) kanas-(i)keku- → kanas-ikeku = kanas-ikeku, 寒けく (ク活) samu-(i)keku → samu-økeku = samu-keku]

著者は丹念に「残された若干の問題」を論じている。「上代語に於いて自由に造語されたク語法も、中古語に入るや一部の語が歌語として固定的に残存して引用句的に体言用法が具わり、一方では「曰く」「願はくは」「恨むらくは」等々が漢文訓読や漢文調の日本語に多く用いられ、同種の文に「須く」(se-^o(r)ubë-(i)kar-^u(r)aku → s^o-øubë-økar-øaku = s-ubë-kar-aku)や「体たらく」(tei+tar-^u(r)aku → tei+tar-øaku = tei+tar-aku)のような語が造語された。「惜しむらくは」「望むらくは」等は「言へらく」などの、恰も語尾であるかに見える「らく」が熟成した後に、類推によって生じた語用である。同種の誤用に「思ふらく」「疑ふらく」「喜ぶらく」等々がある。」また「おいらく」については「元々「老ゆ」は「上二段」動詞であるから、右の二種(『万葉集』に見える一筆者)「老落」は当然「おゆらく」を筆写したものである(*oyi-^u(r)aku → oy^u-raku = oyu-raku)。それが中古音になると、…「老いらく」に変っている。…平安朝…にあつては「老い」の語幹は oyi- (後に oi-) と認識されていたので、交替母音が作用せず、oyi-^u(r)aku → oyi-raku で「老いらく」の形が造成されたと見るべきである。」ここでは乙類の母音が甲類に変化することが考慮されている。

5.2.5. 久語法の機能 著者はク語法の意味に関する諸説を紹介しつつ、「上代語の文中に現れるク語法は、この副動詞だったのではないのか。」として満洲語の -me 副動詞を挙げ、「語幹に -me の附いた動詞は、通常は日本語の連用形のように中止法的に用いられるが、「言う」や「思う」を意味する動詞の語幹がこの -me を伴う時には、多くの場合、直接引用文がその後に続くのである。」と言う。そして蒙古語の -(u)run/-(ü)rün をも挙げ、「ク語法」をこの種の副動詞と同種のものとしている。

5.2.6. 「添加」か「延言」か 著者はク語法すなわち「一次または二次の語幹に語尾(文法接尾辞)-^u(r)aku が附いた派生形」が「接尾辞の側から見れば、此れが語幹に膠着するのであるから「沿はり」であるに違いない。翻って語幹の側から見れば、ク語法とは接尾辞を付けて派生した形なのであるから、これは「延ばり」なのである、此の見地からは、「加行延言」なる述語は言語学的には誤りではない。とは言え、江戸時代の国学者が考えた様な語末音節の延びではない。「延言」とは派生の一つの謂いだったのである。「波行延言」また然り。」と述べている。

5.3. 第3編 第3章 所謂「音便形」の起源と成立——日本語動詞の形態素分析に寄する——

5.3.1. 〈起〉. 動詞「音便形」の源流—中古語から中世語を経て現代語へ— 著者は次のように言う。「今日でも猶「音便」の定義と言え、発音の便宜に従って生ずる語中・語尾の音変化と云った程度の、極く大雑把なものなのであるが、一応「イ音便」「ウ音便」「促音便」「撥音便」の四種を認めている。「音便」とは、もと悉曇学に謂う連声(れんじょう)(samdhi)の一概念の和語への応用であり、…悉曇学系統の韻学者は、かなり後世迄「音便」現象を連声に含めた。」そして「動詞語彙への接辞の附着に伴う同化や異化に依って生起する音変化の形を指すのである」としてあくまでも「音便」を文法現象に限っている。また「「音便」現象は中古語に始まる。平安朝初期の九世紀中葉から既に「イ音便」「ウ音便」「促音便」「撥音便」が訓点資料に見られる事は、大矢透氏の研究により夙に知られたところである。したがって、動詞の「音便形」も之と平行して、ほぼ同時期から現れ始めた。中古語では、「音便形」の諸例のほとんど凡てが点本類に限られていて、和文には、『土佐日記』(935年頃) 其他に見られる若干を例外として、その使用例が見られない。殊に和歌に於いては、懸詞(かけことば)など言葉遊びを別とすれば、「音便形」の用いられる事は無かった。」として、以下各音便形についてその歴史と諸説を概観し、「中古語にその発生を見た「音便形」は、中世語へと継がれて行く。中世語では、動詞「連用形」の变化形であった「音便形」が、現代語に於けると同じく、口頭語にあつては元の「非音便形」との選択的併用ではなくて一つの文法形態 (grammatical form) として、ほぼ確立していった。」としている。著者は音便形との関連でサ行子音が硬口蓋破擦音か歯茎破擦音であったこと、「かなり時代が下がるまで -p- の音価を保持していた」ことに言及している。連声、音便は現在の言語学では音声交替の一種で、異形態間における1) 脱落(イ音便, ウ音便) または添加, 2) 置換(促音便, 撥音便) を含み、フランス語のリエゾンも連声の一種である(上記1)の添加に該当する。現代朝鮮語にも一種のリエゾンが存在する。なお朝鮮語には歯音の前のr脱落という現象が早い時期から存在したと思われる) ^{17, 18}。

5.3.2. 〈承〉. 「音便形」の起因に関する諸説—何故「四段活用」の方にのみ音便現象が?— 著者は四段活用にのみ音便現象が生じたかに関する諸学説を検討した結果、次のように述べている。「世に「四段活用」「ラ行変格活用」「ナ行変格活用」と称せられている各動詞の語幹は子音終止であり、「上・下一段活用」「上・下下一段活用」「カ行変格活用」「サ行変格活用」と称せられている各動詞の語幹は母音終止であつて、且つ、所謂「音便」とは、語幹への接辞 (affix) の後接に伴って生ずる連声(れんじょう)(samdhi) なるが故に、前者の各動詞は「音便形」を生み、後者の各動詞はそれを生まなかつたと云うのが実相なのである。」

5.3.3. 〈転〉. 日本語動詞の語幹抽出——「四段活用」動詞は子音語幹動詞——
 著者が最終的に述べている次の発言は重要である。「今仮に、或る話し手が「勝
 タナイ」と発話したとする。聞き手は、先ず聴覚器官を通して kat- の所迄聞いた時、直ちに“victory”に相当する概念を脳裏に受容する。更に -anai の所迄聞いて、直ちにそれが「否定」であると受容する。そして、kat-ana-i の一語全体を聞き終わった時点で聞き手は、“victory”の否定的行為が現在または未来に於いて遂行されるのだと、総合的に理解するのである。」ここで著者は音声連続における形態素の順次性に呼応した言語的概念（語彙的、この場合「勝つこと」すなわち“victory”，および文法的「否定形」，「終止・連体形」，さらに著者の用語では「非完了態」，筆者の用語では「非過去，断定形」）の理解についてこの章に於いて本書で初めて明言したわけであるが，この点が大きな問題，時に諸学説（特に国語学者）と著者の相違点になっていると思われる。多くの国語学者がいわゆる四段活用動詞についてその子音語幹性についてまで疑いをはさんでいるとは、彼らがいやしくも言語学者なら、信じられないが、活用説に傾く理由も考察する必要があると思われる。例えば、モンゴル諸語，チュルク諸語及び朝鮮語ならば子音語幹動詞のみならず子音語幹名詞の存在も明白であるから問題はない。それらの言語では子音+子音の結合も一定の制約はありつつも可能である（ただし朝鮮語だけは動詞に関して別に「語基」成立/不成立の問題が生ずる。多くの朝鮮人学者は「語基」の存在を認めない）。日本語では後世に生じたと思われる「促音」と「撥音」を除くと，末尾に子音だけを持つ形態素も子音+子音の結合も存在しない。もっとも著者のように「語幹とは要するに文法的抽象なのである。」（本稿 5.1.1.参照）と述べつつも，上のような著者の説明からして，その抽象物が概念をも代表するものとしたら，否定形におけるいわゆる未然形「kata-勝た」の方が（「kara-刈ら」，「kawa-買わ」との対比においても。kat-ta「かった」は kat-「勝つ」，kar-「刈る」，kaw-「買う」のいわゆる過去形で，アクセントを考慮しなければ，同音異義語となる）日本人にははるかにその概念代表性あるいは概念の理解度が強いと言えのではないだろうか？ 語幹と接辞あるいは語尾との結合の問題は膠着語に限られないのだから，ギリシア語 γάλα<牛乳>（語幹：γάλακτ-）の場合は語幹のすべてを発音せずとも理解可能であることをも考慮すべきである。筆者は語幹の文法的抽象性と概念代表性（理解性）とは相互関連を認めつつも切り離すべきものと考え。同様に「否定」の接辞すなわち著者の -anai は実際には多くの日本人により形容詞「無い」と同形と意識されていることも事実である。勿論文法的抽象としての接辞の形は意識における形と一致する必要はないという論理もあり得る。そうだとすると，例えば「書かない」を“kak-a-na-i”と分析する可能性をどうして排除するのか？ 例えば，“mi-nai 見ない”，“de-nai 出ない”からして -(a)nai という形態素よりも -nai の抽出の方がは

るかに理解しやすい。しかしもしも -nai を選択するならば、ここに -a- という接辞が生じ、-(a)nai よりも複雑になるという問題が生ずる。この問題は後にも論ずることとする。

5.3.4. 〈結〉. 内的連声「音便形」の形態素——中古の随意連声から現代の強制連声へ—— 著者は次のように言っている。「現代語の所謂「音便形」には、対立して競合する元の形、即ち「非音便形」と云うものは存在しない。つまり、同一の意味を担う文法形態としては、「音便形」と称される形態 (form) のみが存在しているのであって、他の形態との選択の余地は無い。従って、…現代語にあっては、最早「音便形」ではなく、一個の個定した文法形態なのである。語の連続や接辞の添加に於いて、必ず生起する此の種の連声は、強制連声 (compulsory sandhi) と呼ばれる。」…「日本語の動詞の派生に見られる内的連声は、中古語に於ける随意連声 (optional sandhi) から、中世語を経つつ強制連声へと傾斜し、現代語に於いては完全なる強制連声に移って了ったのである。」著者の言う通り、現代語においてはいわゆる連用形における音便形「書いた」と非音便形「書きつつ」の違いはもっぱら接辞いかにかかっていると言ってよい。

5.4. 第3編 第4章 所謂「二段活用の一段化」の起因——音韻変化が文法変化を——

5.4.1. 史的変化の要因は? 著者は「古代語より現代語に至る日本語文法史での最も大きな体系的変革は、「音便形の定着に加えて、「終止形」即ち定動詞 (finite verb) が述語動詞としての位置を占めるに至った事、並びに所謂「上・下二段活用」動詞がすべて語形を変えて」「上・下一段活用」に同化吸収されてしまったことの二件が在る。」とし、さらに続ける。「所謂「二段活用」に「一般化」は、古代 (上代・中古) にも見られた特定語 (第6節【本稿 5.4.6.参照】と第7節【本稿 5.4.7.参照】初頭に後述)」院政期 (1068-1192) にまず片仮名交り文に見え始め、鎌倉時代 (1192-1333) の訓点語にも徐々に現れて来るが、室町時代 (1336-1573) に至っても語 (word) によって遅速の差があって一般化していなかった。文法史的に見ると、短い語は長い語より早く、活用型では「上二段」が「下二段」より早く、活用形では「終止・連体形」が「已然形」より早く、地域的には関東の方が上方より早く現れて、近世半ばに江戸語が「一般化」しても上方では猶「一・二段」併用期が続き、一般に「一段化」したのは近世後期であると言われている。」著者は「何が要因で「一段化」現象が生起したのであろうか。」と問い、渡辺実、川端善明、濱田敦の諸氏を批判している。

5.4.2. 音韻変化が文法変化を この要因に関して柳田征司氏が述べている事例を挙げ、著者は「日本語史に於ける所謂「サ行イ音便」の消長も、音韻変化が文法変化を惹起せしめた例である。」とし、次のように述べている。少し長いが、そのまま引用しよう。「サ行イ音便」は平安時代 (794-1192) 半ばの十世紀に現

れ、「指イテ」「出イテ」のような形を取って中世語に猶も残ったが、近世に至って衰退し臆て消滅した。消滅の起因に関しては諸説があるが、これは、破擦音 (affricate) であったサ行子音が摩擦音 (fricative) に変化した為であると筆者【= 著者】は解釈している。「四段活用」動詞の語幹は子音終止であり、「サ行四段」動詞語幹の末尾子音はサ行子音である。中古音のサ行子音を口蓋化摩擦音 ɣ (= [ŋ] とする説 (馬淵和夫氏) も在るが、多数説 (安藤正次氏、亀井孝氏他) は古代 (上代・中古) においては破擦音であったと見る。但し、それが直接的な c (= [tʃ] であったかは、学説が区々であるが、ここではこれを非口蓋化の c と推定すると、上掲の 2 例はそれぞれ cac-ite 、 dac-ite の語幹末子音の脱落 (所謂「イ音便」) により $\text{ca}\text{ø-ite}$ 、 $\text{da}\text{ø-ite}$ の形が成立したことが分る。語幹末のサ行子音 (破擦音) が摩擦音に変化した故に、「サ行イ音便」を生起せしめた因子が消滅して元の「非音便形」に復帰したのである。「四段活用」動詞であっても、語幹末が摩擦音の /s/ 出ある場合に限り「音便形」即ち内的連声 (internal sandhi) が生起しない。因みに、現代語の「四段活用」動詞のうち「音便形」を欠いているのは「サ行四段」のみである。」「サ行子音が破擦音 c から摩擦音 ɣ に移行した時期は正確には分かっていないが、チ・ツにおけるタ行子音の破擦音化 ($\text{ti} > \text{çi}$ 、 $\text{tu} > \text{cu}$ の変化) より以前であった事は確実であるから、鎌倉時代を降る事は無い。しかし、文法変化は保守的であって音韻変化に直ちには追随し得ず、完全に摩擦音化が終了した後もしばらく「サ行イ音便」はそのままの形で中世から近世半ばへと続いたのである。」著者は「以上の類例を踏まえて「二段活用の一段化」の真因に迫ろう」としている。

5.4.3. 現代語・中古語「終止・連体」両形の形態素分析 著者はまず現代語の語幹と接辞の分析をした後 (このこと自体は著者がすでに上に述べたことの反復である)、以下のようにカ行「上・下一段活用」動詞の「終止・連体形」の語構成 (word formation) を示す (対比のためにカ行「四段活用」動詞も挙げる)。ここで筆者は接辞の形 $-(r)u$ を問題にしたいが、それは後に廻す。

表 1 現代語「終止・連体形」の語形成

| 例語 | 語幹 | 接辞 | 接合形 | 成立形 |
|---------|------|-------|----------|----------|
| 「上一」着ル | ki- | -(r)u | → ki-ru | = ki-ru |
| 「上一」起キル | oki- | -(r)u | → oki-ru | = oki-ru |
| 「下一」受ケル | uke- | -(r)u | → uke-ru | = uke-ru |
| 「四段」置ク | ok- | -(r)u | → ok-øu | = ok-u |

著者は言う。「文語文の依拠する平安時代中期の中古語の語法では、母音終止形の語幹、すなわち母音語幹 (vowel stem) を持つ動詞の典型的な「活用形」は「上一段・上二段・下一段・下二段」の4種である。殊に現代語の「下一段」動詞は、中古語ですべて「下二段」であった。中古語での「下一段」動詞は「蹴ル」のみであるが、この動詞は現代語では「四段」に変わっている。これは接尾辞が変わったのではなく、母音語幹であった ke- が、「ラ行四段」動詞への類推に依って子音語幹 (consonant stem) の ker- に変わった為である。中古語と雖も「終止形」と「連体形」の接尾辞は -(r)u だった筈であるが、表2・表3に見られる通り、これは「上・下二段活用」の語形成にはまったく合致しない。」ここで著者が1個しかない下一段動詞「蹴ル」の四段動詞への合流が「ラ行四段」動詞への類推によると推測する以前になぜ語幹末音が r であるような四段動詞(扱ル, 迫ル, 照ル, 練ル, 減ル, 減ルその他)への類推が問題になり得ないのかについて筆者は素朴な疑問を持つ。

表2 中古語「連体形」の語形成

| 例語 | 語幹 | 接辞 | 接合形 | 成立形 |
|---------|------|--------|-------------|----------|
| 「上一」着ル | ki- | -(r)u | → ki-ru | = ki-ru |
| 「上二」起クル | oki- | -(r)u? | → oku-ru(?) | = oku-ru |
| 「下一」蹴ル | ke | -(r)u | → ke-ru | = ke-ru |
| 「下二」受クル | uke- | -(r)u? | → uku-ru(?) | = uku-ru |
| 「四段」置ク | ok- | -(r)u | → ok-øu | = ok-u |

ここで著者の「日本語もアルタイ諸言語に並行して、語幹は「命令形」に求められる。」という実に見事な語幹抽出の技術に筆者は感嘆し得ないのであるが(5.2.3.), ついでながら筆者が指摘したいのは朝鮮語は、現代語であれ中期語であれ、いかようにも命令形を語幹と扱うことはできず、命令形は必ず語尾を持ち、動詞の語幹自体が単独で用いられることはないのである。

表3 中古語「終止形」の語形成

| 例語 | 語幹 | 接辞 | 接合形 | 成立形 |
|--------|------|--------|------------|---------|
| 「上一」着ル | ki- | -(r)u | → ki-ru | = ki-ru |
| 「上二」起ク | oki- | -(r)u? | → ok-øu(?) | = ok-u |
| 「下一」蹴ル | ke- | -(r)u | → ke-ru | = ke-ru |
| 「下二」受ク | uke- | -(r)u? | → uk-øu(?) | = uk-u |
| 「四段」置ク | ok- | -(r)u | → ok-øu | = ok-u |

著者は「連体形」の「起クル」と「受クル」並びに「終止形」の「起ク」と「受ク」は造語法的に見て如何にも不自然であり、当然のこととして現代語と同様にそれぞれが「上一段」と「下一段」に落ち着いて、両「活用形」とともに「起キル」「受ケル」の形を取るべき筈であった。その「当然の事」が中世語に至るを待って漸く始るのである。」と言う。

5.4.4. 上代語「終止・連体・已然」三形の形態素分析 著者はまず「中古語の「二段活用」に見られる不安定な「終止形」「連体形」は、特殊仮名遣の未だ保持せられていた前代の上代語から、いわば惰性的に受け継がれた形であり、特殊仮名遣が崩壊した後の中古語に猶も残る「二段活用」形式は、当然消え去るべき筈のものであったのだ。」と述べ、「特殊仮名遣」とは、母音の合流 (merger) によって 8 母音体系が 5 母音体系へと移行した音韻変化 (sound change) の謂いに他ならない。」とし、なおも、著者が村山七郎氏と相前後して主張したように、さらに「太古にあつては、8 母音があらゆる子音と結合し、又単独でも音節を成し得たものと史的言語学の上から内的再構 (internal reconstruction) する事が出来る。」と推定した。著者はここで接辞 ${}^u(r)u$ は「直前の語幹末母音 i と e を u に後退せしめる機能を有する代替母音 (alternate vowel) u を伴う」ものとしている。著者はさらに次のように言う。「ここに便宜上“代替母音”と呼んだが、実際は同化 (assimilation) による或る種の (後世の「音便形」とは別の) 内的連声で、その生起を明示するために ${}^u(r)u$ と表記したに過ぎない。此の代替母音は中舌の乙類母音 i, e には作用しても、何故かは明らかにし得ないながら甲類 i には作用しなかった。従って、「上一段」動詞の「連体形」は現代語や中古語に於けると全く同形で、「着ル」は $ki\text{-}ru$ 、「似ル」は $ni\text{-}ru$ 、「見ル」は $mi\text{-}ru$ 等々の形を取った。「四段活用」動詞の語幹末は子音であったから、代替母音とは無関係であり、且つ連結子音の r も潜在化して顕れないので、これも現代語・中古語と同形であり、且つ連結子音の r も潜在して顕れないので、これも現代語・中古語と同形であり「置ク」は $ok\text{-}u$ 、「申ス」は $maoc\text{-}u$ 、「待ツ」は $mat\text{-}u$ 等々の形を取った。」(本稿 5.1.3.参照)。ここで注目すべきは著者が抽象物である接辞が内的再構の産物であると言っている点であり、つまり歴史的に実在した形と認定している点である。

表 4 上代語「連体形」の語形成

| 例語 | 語幹 | 接辞 | 接合形 | 成立形 |
|---------|------|------------|-----------------|---------|
| 「上一」着ル | ki- | ${}^u(r)u$ | → ki-ru | = ki-ru |
| 「上二」起クル | okī- | ${}^u(r)u$ | → ok u -øu | = ok-u |
| 「下二」受クル | ukē- | ${}^u(r)u$ | → uk u -øu | = uk-u |
| 「四段」置ク | ok- | ${}^u(r)u$ | → ok-øu | = ok-u |

著者は言う。「直前の語幹末母音 i と e を \emptyset ^{ゼロ}化して脱落せしめる機能を有する代替母音 \emptyset を伴う $-\emptyset(r)u$ 」に関してすでに述べられたことを繰り返している（本稿 5.1.3.参照）。

表 5 上代語「終止形」の語形成

| 例語 | 語幹 | 接辞 | 接合形 | 成立形 |
|---------|------|------------------|-----------------------------------|---------|
| 「上一」着ル | ki- | $-\emptyset(r)u$ | → ki-ru | = ki-ru |
| 「上二」起クル | okī- | $-\emptyset(r)u$ | → ok ^o - $\emptyset u$ | = ok-u |
| 「下二」受クル | ukē- | $-\emptyset(r)u$ | → uk ^o - $\emptyset u$ | = uk-u |
| 「四段」置ク | ok- | $-\emptyset(r)u$ | → ok- $\emptyset u$ | = ok-u |

著者は言う。「所謂「已然形」を造る上代語の接尾辞とは $*-u(r)\ddot{e}$ と表記し得るものであって、見られる通り、連結子音の r に加えて“代替母音”の u を伴っていた。」

表 6 上代語「已然形」の語形成

| 例語 | 語幹 | 接辞 | 接合形 | 成立形 |
|---------|------|------------------|---------------------------|--------------------|
| 「上一」着ル | ki- | $*-u(r)\ddot{e}$ | → $*ki-r\ddot{e}$ | = $*ki-r\ddot{e}$ |
| 「上二」起クル | okī- | $*-u(r)\ddot{e}$ | → $*ok^u-r\ddot{e}$ | = $*oku-r\ddot{e}$ |
| 「下二」受クル | ukē- | $*-u(r)\ddot{e}$ | → $*uk^u-r\ddot{e}$ | = $*uku-r\ddot{e}$ |
| 「四段」置ク | ok- | $*-u(r)\ddot{e}$ | → ok- $\emptyset\ddot{e}$ | = ok- \ddot{e} |

著者は言う。「二段活用已然形」は中古語にも受け継がれたのであるが、上代特殊仮名遣の崩壊後であるから極めて不安定な存在であり、やがて「上・下二段活用已然形」が共に各「一段活用已然形」と同形となって安定した。中世及びそれ以降の事である。」

5.4.5. 「二段活用の一段化」の真因は ここで著者は最後の問題に入る。長いが、引用する。「上代語は、日本語学の音韻史に於いて過渡期の言語であった。太古にあっては 8 母音のすべてが、その当時のあらゆる子音と結合し、また単独でも音節を成し得たことは前節に述べた。奈良時代は 8 母音を有した日本語の最後の時代であって、子音 $\emptyset-$ と $y-$ の別であったエの甲・乙類別を除き、わずかに 13 音節（及びその濁音節）にのみ甲・乙類別を残した。そのうち、 mo と $m\ddot{o}$ の別は 8 世紀想起の『古事記』（712）の頃を最後として、失われてしまい¹⁹、9 世紀に入るや、 ko と $k\ddot{o}$ の別のみは昌住撰『新撰字鏡』（901）の頃まで残ったものの、5 母音体系の中古語へと移行したのである。」「上代特殊仮名遣の甲・乙 2 類の別が失われた結果として「上一段」型と「上二段」型の語幹は同形となり、新

たに参入した「下一段」型と従来からの「下二段」型の語幹も同形と成って、中古語での「着ル」「起ク」や「蹴ル」「受ク」の語幹が ki-、oki- や ke-、uke- であった事は表2と表3に示した通りである。ここに「二段活用」を「一段活用」と区別すべき因子は、音韻的には完全に消滅したにも拘わらず、それ以前に形成された「二段活用」的文法形態は、先に例として挙げた「サ行イ音便」の消長に見られたが如く、音韻変化の急激な速度には追従し得ずして、そのままの形態で保守的に中古語へと受け継がれて行ったのである。しかし、「二段活用」を因子はすでにして消え去り、最早そこには存在しない以上、その「活用」形態は極く不安定であり、中世に至って次第に安定化の道をたどる事になる。この安定化が「二段活用的一段化」と言われるものの実体である。…平安時代は文法史上の過渡期だったのである。」「下二段」型の派生語幹 (derivational stem) を造る接尾辞 (所謂「助動詞」) のうち、受動や可能を表す *-(r)arē や使役を表す -(a)cimē も、前者は奈良町以前に…、後者は平安朝初頭に…、共に「下一段」型に変わったのであるが、しばらくは惰性が続いて文法上は「下二段」形態を保ち、書記言語 (written language) でこれらが一般に「一般化」したのは江戸時代 (1603-1867) も後期に入ってからである。」

5.4.6. 上代語における「二段活用的一段化」 著者は「…上代に「上二段」の「ウ(居)」という形があったと言われる。音節半の甲・乙類別が奈良時代にはすでに失われていたのであるから、古く *wi- であった語幹が wi- に変って「一段化」したものであると思われる。「キル」が文法的安定化の最も早い例であると言えよう。」と言って、具体的にいろいろな例を精密に検証している。

5.4.7. 文法的「安定化」へ 著者はまとめとして次のように言っている。「言語は常に保守的である。或る種の変化が生起すると、必ずやその反動が見られる。平安時代には「音便形」と「非音便形」とが併存していて、その何れを採るかはその話し手の恣意により、和歌や文学作品のような謂わば洗練された文には「音便形」は好まれず、点本など (その当時の) 俗語を反映する文に主として用いられた。同様にして、一つの動詞に「二段活用」形式と「一段活用」形式の併存した江戸時代前期までは、「一般化」された形は俗語的なものとして知識人らには好まれなかったと考えられる。上層階級に属した彼らが「一段化」動詞の使用を意識的に回避したからこそ、「試ム」「顧ム」「用ウ (フ・ユ)」のような「一段活用の二段化」とでも称すべき逆行現象が生じたのである。これは過剰修正 (hypercorrection) であるから、文法史 (言語史) 上の問題では勿論ない。」ここで著者は「江戸時代を通して発達し、現代語に入って更に進出した「下一段」可能動詞」が子音語幹動詞にだけ及ぶ変則性を除去するような「見レル」「起キレル」「寝レル」のような所謂「ラ抜き言葉」が一般化しつつある」現象に関

して「その趨勢は人為的に抗すべくも無く、遠からず可能の派生接尾辞 *-(r)e* が定着して安定化するに違いない。これが文法変化の動向なのである。」と結んでいる。

このように著者にあつては「文法的安定化」の問題には上代特殊仮名遣が大きく関わっているのであるが、上代特殊仮名遣の本質について諸説がある今日、もしもいわゆる 8 母音説が崩れた場合はどうなるのであろうか？ もしも音素としての 8 母音説ではなく音声としての 8 母音説の場合は著者の論拠はどうなるのであろうか？ 残念ながら、このことについて定見を持たない筆者の考えの及ぶところではない。

5.4.8. あとがき 著者が本書を著わした意図は「保守的な国語学界のことであるから、多少の歳月は要するであろうが、やがては日本の中等国文法が、標準的国文法として教えられる日が来るものと信じている。」に尽きるであろう。これは筆者の信じるアメリカ構造主義に基づく記号化された諸形態素（動詞の語幹と接辞）の羅列によって単純化し得る文法を目指したものと言ってよいだろう。

6.0. 以上に見たように、本書はアルタイ諸語に対する著者の大きな関心の基にそれに構造的に類似した日本語の文法を叙述したものであり、著者の日本語文法論の形成過程には著者のアメリカの大学でのアルタイ諸語研究及び日本語教授が大きく影響したことが考えられる。本書は主として膠着語たる現代日本語の特に動詞の形態論の共時的研究に焦点を絞り、併せて通時的にも概観したものであり、語彙的側面は考察の対象とはなっていない。著者の文法が共時的なものだとはいえ、多分に通時的な考察が著者の語幹及び接辞の形の決定に決定的な影響を与えていると見られるため、両者は切り離して見ることはできない。

著者の日本の国語学者たちに対して向けられる不信の念は著者の諸研究の背景と無関係ではなく、日本語を常に外国語との対照研究において眺めることで日本語の諸現象の普遍性と特殊性とを認識し得るという当たり前のことが看過されてきたことを著者が指摘するのは当然のこととして大きな意義を持つ。

6.1.1. 著者は形態素を徹底的にアメリカ構造主義的に捉えようとしている。

著者は次の記号を用いる。例えば、*kak-sase-rare-itagar-imas-umai* → *kak-ase-rare-itagar-imas-umai*（書かせられたがりますまい）においてハイフンは形態素（語幹、イタリック体は接辞）の境界、太字のうち斜線の入ったものは結合において除去されるものを表す（本稿 3.1.1. 参照）。太字のうち子音は連結子音、母音は連結母音と呼ばれる。著者は *kak-ru*（書く）、*kak-sase-rare-itagar-imas-umai* を *kak-(r)u*, *kak-(s)ase-rare-(i)tagar-imas-umai* と表記し、括弧に包まれた子音字は子音の後で脱落する子音（連結子音）を、括弧に包まれた母音字は母音の後で脱落する母音（連結母音）を表す。ただし著者が本書に収録以前の論文「連結子音と連結

母音と一日本語動詞無活用論一」(本稿 1.2.の 4) 参照) では連結子音や連結母音を $-^s u$, $-^s aseru$, $-^i tagar-u$, $-^i masu$ のように表記した. 所謂「連用形」(子音語幹)+文法接尾辞 $-(i)ta$ (内的連声を興す場合) の表記は本稿 3.1.4.の如くであるが, 例えば $— k-(i)ta \rightarrow — \text{ø}ita$ (書く~書いた), $— g-(i)ta \rightarrow — \text{ø}ida$ (漕ぐ~漕いだ) は旧稿では $— k-ita \rightarrow — \text{ø}ita$, $— g-^i ta \rightarrow — \text{ø}ida$ のように表記し, さらにこの接尾辞 $-(i)ta$ は旧稿では $-Ta$ と書かれたところを見ると, T は子音 t と d の交替を念頭に置いたものかも知れない²⁰. ついでながら, 著者が現代語の促音と撥音を $tota$ (切った), $nōda$ (汲んだ) のように表記しているところを見ると, それぞれの音素を t と n のように把握していたのかも知れない²¹. 著者は, 古代日本語になると, さらに接辞において複雑な代替母音を次のように小字で示す: 非完了終止形 $-^{\text{ø}}(r)u$, 非完了連体形 $-^{\text{u}}(r)u$. この小字 ø と u は母音語幹動詞(いわゆる「上二段」, 「下二段」, 「カ変」, 「サ変」, 「ナ変」)の語幹末母音をゼロ及び u に変える機能示すものであるが, 「四段活用」, 「上一段活用」動詞の語幹には何らの作用も及ぼさないのである(本稿 5.1.3.参照). 著者がアメリカ構造主義の言う「形態素」を異形態及び形態素の頭音が影響を及ぼす前接される形態素の末音の変化をも見据えてこれらの記号を作ったことは明らかである. ただし著者が現代語のいわゆる音便形, すなわち $-(i)ta$, $-(i)te$ 等々についてこれ以上の記号を作らなかったのは音便形の複雑さ故であろう. しかも「命令形形成の文法接辞」(本稿 3.1.4.参照)で $-(e)$ (「四段活用」)と $-ro$ (「一段活用」)があたかも別の形態素扱いになっているかのようであることは, 恐らく単独の形として認めるにはあまりにも形の違いが大きすぎることに由来するのであろうが, 大いに違和感を覚える. ついでながら, しかも文法接尾辞 $-(r)una$ はどう見ても常識的に終止形+ $-na$ ではないのだろうか? 著者が「カ」, 「ヨ」を「終助詞」と認めているのならば(本稿 4.1.2.参照), 「ナ」も終助詞として認めない理由はない. 著者が否定形 $-(r)una$ を立てた理由はあくまで肯定形 $-(e)$ との対比においてであり, ここで奇しくも形態素の意味の面と形態の面との不一致をわれわれは素直に認めるべきなのである.

ここにおいて, 著者においては形態素の形とは異形態の形の違いをも示し得るようなものとして設定されているのだが, それも不徹底なものである, というよりもそうならざるを得ないものなのだとすることを認めざるを得ないのである.

6.1.2. アメリカ構造主義言語学では音(異音)のレベルと対応する音素のレベルに呼応して形態(異形態)に形態素が対している. 音と音素の違いについてはずいぶん議論され, 種々の学説の違いはあれ, おおかたの一致を見てきた. ここであたかも音=具体物, 音素=抽象物であるかのように言う者がいるが, 音素は諸異音から抽象されてできた産物でもなく, 音も音素もともに実在するもの

として存在するのである。音とは異なり、音素は単独では発音困難な場合もあるが、その実在は言語話者の音に関する意識にも現れる。例えば、日本語の「ン」は個人によって発音の形に差があろうとも、どれも同一の「音素」である。形態（異形態）—形態素のレベルの形は音素からなる（当然音素は音（異音）を含み得る）。音素のレベルの識別が意味の差異の識別にあつたとするならば、形態素のレベルの差の識別も意味の差異に求め得る。かくして朝鮮語 *바다가 badaga* [padaga] /badaga/ <海が>と *마닥이 badagi* [padagi] /badagi/ <床が>における母音語幹名詞 *바다 bada* [pada] /bada/ <海>に附く格助詞 *-가 -ga* [-ga] /-ga/ <-が>及び子音語幹名詞 *마닥 badag* [padak] /badag/ <床>に附く格助詞 *-이 -i* [-i] /-i/ <-が>とは相補分布を成すだけでなく、意味も完全に同じと認定し得るから、両者の格助詞は形の大きな違いにもかかわらず同じ形態素を成す（従って2つの異形態 *-가 -ga* [-ga] /-ga/ と *-이 -i* [-i] /-i/ は同一形態素に属する）。ここでアメリカ構造主義もモスクワ音韻論学派も、観点の違いはあれ、形態音素なるものを立てるが（多くの場合2つ以上の異形態がある場合に形態音素なる概念が適用される）、共通して言えることは、音素が実体を持つのに反して、形態音素なる抽象物を設定して見たところで、その実体は存在しないということである。存在するのは「形態音素論的交替」だけである。よく引かれる例ではあるが、英語における規則名詞複数の接辞 /-s/, /-z/, /-iz/; 規則動詞現在3人称単数の接辞 /-s/, /-z/, /-iz/; 規則動詞過去形及び過去分詞形の接辞 /-t/, /-d/, /-id/ の形態素をそれぞれ仮に{-Z}, {-S}, {-D}²²のような記号であらわしたところで（この段階で他の音素等が無視されているし、形態音素の代表形の決め方もまことに恣意的である）、それは異形態の交替 /-s/ ~ /-z/ ~ /-iz/; /-s/ ~ /-z/ ~ /-iz/; /-t/ ~ /-d/ ~ /-id/ が実体としてあるだけである。be動詞がさまざまな異形態を持っており、通時的に異なる動詞の形を含んでいることを考慮してすべての音素を混ぜ合わせた人工的な形態素を考案したところで同じことである。例えばロシア語 *got* / *got* [got] /got/ <ゴート人>— *год* / *god* [got] /got/ <年> [ともに単数主格] は全くの同音であるが、斜格において区別される：[単数属格] *гота* / *gota* ['gota] /góta/ — *год* / *god* ['godə] /góda/; [単数与格] *готу* / *gotu* ['gotu] /gótu/ — *году* / *godu* ['godu] /gódu/。ここで斜格では語幹末音は前者が /t/、後者が /d/ であることが明らかである。しかし構対^{補4}有声音の現われない現代ロシア語の語末においては構対^{補4}無声音と構対^{補4}有声音は中和し、その位置に前者のみが現れるが、この時の音素（この場合 /goT/ を立てる）をモスクワ音韻論学派は原音素 *архифонема* と呼ぶ。しかしこの場合単数斜格において意味の識別に資する有声音と無声音の別は単数主格では失われているのだから、それは音素としては同音異義語の要素として機能するのみであるとするサンクト・ペテルブルク学派の方を筆者は支持する。

ここにおいて形態音素なる概念は、1つの形態素において交替する音素の総体としてであれ、否定されなければならない。従って先の *-(e)* (「四段活用」) と *-ro* (「一段活用」) とは命令という形態素の異形態であるが、複数の異形態を無理して一つの形態素形にまとめる必要はないのである。Bernard Bloch もまた日本語の命令形の2つの異形態を別個に表示している(前掲書(本稿【注】20の p. 8, p. 11 参照))。

6.1.3. 著者は恐らくアメリカ構造主義的原則に徹底的に依拠しつつ、まず現代日本語の語幹と接辞の単なる添加という大原則を構築し、後にそれを古代日本語にも及ぼしたと思われる。通時態の結果である現代語という共時態における連結子音と連結母音(これ自体はアルタイ諸語にも存する)及び内的連声(音便)の概念に加えて、古代語では代替母音の概念を取り入れたのが著者の理論の特徴である。著者の徹底的な研究方法は、第一に特に現代語研究の段階で日本語接辞のアルタイ諸語との同一性を認めることに端を発して、第二に特に古代語研究の段階で命令形が語幹として意味を持っていたという又しても著者の独創的な見解(これとて結局はアルタイ諸語との類似性を際立たせるものである)を生み出すこととなった。さらに古代語の考察においてはいわゆる 8 母音の問題も *p* あるいは *s* の音価(破擦音?)も巧妙に絡み合っていて論ぜられている。あらゆる点において著者は格段の用意周到ぶりを見せている。

現代語、古代語を通して子音語幹動詞において著者の強調する語幹末の子音性を肯定しつつも、国語学者だけでなくアルタイ語学者も含めて多くの学者が子音語幹への接辞(母音で始まるもの、及び子音で始まるもの)の直接の添加という規則に対して躊躇せざるを得ない現実を著者は一刀両断で切る。日本語は、子音語幹の存在を認めるとしても、本来開音節語だったと思われる。この点が朝鮮語との大きな違いである。朝鮮語には子音語幹用言と母音語幹用言があり、その文法接尾辞は本来子音で始まったと思われる。朝鮮語の子音語幹用言にある種の文法接尾辞(子音で始まる)が接続すると、語幹(これを河野六郎氏はゼロ語基あるいは第 I 語基と呼ぶ)と接尾辞の間に連結母音が加わる(これが河野六郎氏の言う第 II 語基 [語基母音: $\backslash e [A] / \text{---} \ddot{u} [w]$ (両者は母音調和する)]である。なお母音語幹には第 I 語基と第 II 語基の区別はない。すなわち語基母音はゼロ)。この限りでは第 I 語基と第 II 語基とは純粹に形態的な違いであって、意味上の違いは全くない。ところが中期語では母音語幹も子音語幹も第 IV 語基 [語基母音: $\perp o [o] / \text{---} u [u]$ (両者は母音調和する)] というのがあって第 I 語基・第 II 語基とは機能上の対立を起こす。他に現代語も中期語も第 III 語基 [語基母音: $\text{---} a [a] / \text{---} \ddot{o} [o]$ (両者は母音調和する)] というのがあり、日本語のいわゆる「連用形」と機能上もよく似ている。朝鮮語の場合、ここで語基と呼ぶものは連用形を除くと文法的に独立し得ず、日本語のように連用形が終止・

連体形と共に単独で文法形式を成すのとは違いがある（なお朝鮮語は命令形も接辞によって作られる）。現在南北朝鮮の言語学者は語基説を取らず、著者と同じく、語基母音を接辞に所属せしめる（II-면 -myŏn [-mjɔn] あるいは -면 -myŏn [-mjɔn] [母音語幹+] / -으면 -ŭmyŏn [-uumjɔn] [子音語幹+] <…すれば>）

補²。これは著者の -(i)masu（すなわち -masu / -imasu）等々と似ている。現実には現代語においても子音語幹は語幹と接辞の間に内的連声を起こし、もっと複雑になるが、それらを加味した規則の設定は困難ではあるが、可能である。さらに子音語幹の末尾子音は、規則的ではあるが、交替を起こす（例：(I) 읽-irg- [ik-] /ik-/（口音の前） / ~ [iŋ-] /iŋ-/（鼻音の前）；(II) 읽-irg'ŭ- /ilgu-/ <読む>）。いわゆる「変格用言」は次の如くである：子音語幹 (I) 듣-dŭd- [tut-]（口音の前） / [tun-]（鼻音の前） ~ (II) 들- dŭr'ŭ- [turu-] /duru-/ <聞く>；(I) 좃-joh- [tʃot-] /jod-/（口音の前） / [tʃon-] /jon-/（鼻音の前） ~ (II) 좃- joh'ŭ- [tʃow-] /jou-/ <聞く>；(I・II) 가르- garŭ- [karu-] /garu-/ ~ (III) 갈라- garra- [kalla-] /garra-/ <分ける>。このように朝鮮語は、日本語とは異なり、子音語幹の設定は容易である。さらに言えば、朝鮮語の文法接辞は歴史的にはほとんどが子音で始まっている²³。なお朝鮮語の第II語基が本来連結母音であったことは明らかであるが、第III語基と第IV語基は何らかの接尾辞が語基形成接辞化した可能性がある。ギリシア語は語末に来得る子音が限られる（n, r, s）が、子音語幹を設定しなければならないことは既に示した（本稿 5.3.3.参照）。

日本語が開音節語でありながら（語末に子音が来ることは動詞の場合 -masen 「-ません」以外はない）、子音語幹動詞を認めなければならないことは明らかであるが、さりとて現実には「語幹末子音+母音」という単位（いわゆる「活用形」）が二次的に成立しており、ここにさらに他の接辞（多くは子音で始まる）が付加されたことが考えられるのである。この「活用形」が、国文法の言うように、「未然」だの「連用」だの「假定」だのの意味とは関係ないことは著者の言うとおりであるから、いっそのこと朝鮮語における河野六郎方式により数によって語基の別を示した方がよい（語基の意味は、語基だけで単独の用言の形である終止、連体、中止、命令以外は、設定し得ない）。どうしてこのような「語基形」が日本語に生じたのかは日本語史の問題で、解決困難であるが、共時言語学的にはそれらの形（いわば意味のない形態素）は設定可能である。

6.1.4. さらに日本語において、著者がしばしば行ったような「語幹末子音+接辞頭子音」といった結合（yom-(r)u 読む, yom-(s)ase-ru 読ませる, yom-(r)are-ru 読まれる）が実際に存在した可能性があろうか？ 筆者によれば、それらは yom-u, yom-a-se-ru, yom-a-re-ru（-u/-ru は終止・連体の語基接辞の異形態、また -se- ~ -sase-, -re- ~ -rare- はそれぞれ「使役」、「受身」等の接辞の異形態）となる。著者よりも形の認定が複雑になるし、それではいわゆる国文法と同じではないか

と言われるだろうが、現実の複雑さは分析された形にもそのまま反映させるべきであって、叙述の簡単化が文法記述の目的ではないはずである。かくして著者の -(a)nai, -(i)masu, -(r)eba はそれぞれ -a-nai ~ -nai, -i-masu ~ -masu, -e-ba ~ -re-ba (それぞれ前者は子音語幹に、後者は母音語幹に附く) となる。母音+母音 (i) の結合と後続の母音の消滅が歴史的に存在したことが確かでない以上、そのような抽象を現代のわれわれが行うことは正当とは言えない。共時態は常に通時態と関連をつけておかなければならないと筆者は考える。

かくして日本語と朝鮮語は、他のアルタイ諸言語とは異なって、語幹の具体的な形としての語基を認めざるを得ないのである(太字は語基形成接辞)。

| 語基 [活用形] | 五段活用動詞 | 上一段活用動詞 | 下一段活用動詞 |
|--------------|------------------------------|--------------------|--------------------|
| I [未然形] | kak- a -nai | mi-nai | ne-nai |
| | kak- a -reru(kak-eru) | mi-rareru(mi-reru) | ne-rareru(ne-reru) |
| | kak- a -seru | mi-saseru | ne-saseru |
| II [連用形] | kak- i -masu | mi-masu | ne-masu |
| II' [音便形] | kai-ta | mi-ta | ne-ta |
| III [終止・連体形] | kak- u | mi- ru | ne- ru |
| IV [仮定形] | kak- e -ba | mi- re -ba | ne- re -ba- |
| V [命令形] | kak- e | mi- ro | ne- ro |
| VI [勧誘形] | kak- oo | mi- yoo | ne- yoo |

日本語の I kak-eru の -e は新しい語基形成接辞かも知れない。上一段と下一段の -ru, -re, -ro, -yoo の子音 (-r-, -y-) が何らかの接辞ととらえることさえ可能かもしれない。さらに上一段と下一段とを m-ir-u, n-er-u のような分割さえ可能で(この場合すべての動詞は子音語根ということになってしまう), すると動詞「居る」, 「得る」の語幹はゼロということにさえなる。

(参考) 朝鮮語の語基 [太字注意. r 語幹は母音語幹に似る]

| 語基 | 接尾辞の意味 | 子音語幹用言 | r 語幹用言 | 母音語幹用言 |
|-----|--------|-------------|-----------------|------------|
| | | <食べる> | <知る> | <見る> |
| I | 終止. 勧誘 | mög-ø-ja | ar-ø-ja | bo-ø-ja |
| | 連体. 継続 | mög-ø-nŭn | a -ø-nŭn | bo-ø-nŭn |
| II | 接続. 仮定 | mög-ŭ-myŏn | ar-ø-myŏn | bo-ø-myŏn |
| | 連体. 過去 | mög-ŭ-n | a -ø-n | bo-ø-n |
| III | 接続. 先行 | mög-ŏ | ar-a | bo-a |
| | 終止. 過去 | mög-ŏ-ss-da | ar-a-ss-da | bo-a-ss-da |

朝鮮語は中期語の段階でも母音調和を保ち、現代語においても擬声擬態語を含む音象徴語や文章語における第 III 語基になおその痕跡をとどめていることでも（口頭語では第 III 語基は陰性（女性）母音化の傾向が強い）、日本語とは異なり、アルタイ諸語的である。

朝鮮語も日本語も明らかな文法形態素として単独で用い得るもの（朝鮮語の第 III 語基、日本語の終止・連体形、命令形、勧誘形、中止形（=連用形）を除けば、語基はすべて文法上の諸形式を作るための手段でしかなく、意味不詳の形態素である（勿論歴史上のある時期にそれら〔明らかに本来連結母音であった朝鮮語における第 II 語基を除き〕が意味を持ち得た可能性は否定できない）。

6.2. 著者が文法接辞 $-(r)una$ と $-(r)uto$ のうち前者を立てる理由については本稿 6.1. で述べたが、後者に関して言うならば、接辞 to がいわゆる過去形を持たないことに由来するものであらうと思われる（「と」以外の接続助詞「けれど（も）」、「が」、「から」、「し」はすべて過去形と非過去形を持つ）。確かに、「と」は、その点で典型的な接続助詞とは異なり、「連用形」に近いし、そう認定してもかまわないが、形態素としての文法接辞のあり方がさまざまであり得ることは認めべきであり、かように形と意味の不一致があり得ることは前提としなければならない。

6.3. 著者がいわゆる「用言」を動詞ととらえ、それを動作動詞（いわゆる動詞）と形状動詞（いわゆる形容詞。本稿 3.1.5. 参照）とし、それらの違いを「語性（Character）」（本稿 4.4.4. 参照）にあるとしたのは、形状名詞（いわゆる形容動詞の語幹に当たるもの）を立てたこと（本稿 4.1.1. 参照）と並んで、それなりの卓見であると思うが、著者が「白い犬」を ‘white dog’ ではなく ‘dog which is white’ に相当すると言ったのは（本稿 3.1.5. 参照）言い過ぎではなからうか？ 朝鮮語の形容詞は明らかにその活用が動詞と大差ないことから、動詞と共に用言に属することは確かであり、日本語も朝鮮語も動詞と形容詞は繫辞と並んで述語詞であるが、日本語も朝鮮語もモンゴル語、満洲語等と並んで連体形（日本語では助動詞「だ」の連体形「な」だけが特殊に残存しているが、他はすべて終止形に合流した。しかし現代語では連体形では丁寧形はほとんど使われないし、なおも連体形は終止形とは種々の文法的特徴によって区別される）は先行詞としての関係詞の欠如と相俟って対応する主語のないものが多いだけでなく、連体形を率いる語句が句（=修飾語。主語なし）であるのか節（=文。主語あり）であるかが曖昧であることにより（このことについては筆者の意見を本稿 4.5.1. で若干述べた）、「白い犬」は ‘dog which is white’ なのか ‘white dog’ なのかが曖昧であるとしか言いようがないのである。断っておくが、筆者は現代語及び歴史時代に入ってから日本語に形容詞という用言の一種を立てることに賛成である。

さらに形容詞(形状動詞)の歴史に遡れば、いわゆる「カリ活用」は連用形「ク」+「アリ」すなわち $u+a \rightarrow a$ の結果による短縮形だったことは、「ニ」+「アリ」→「ナリ」, 「テ」+「アリ」→「タリ」とともに、学界の常識となっているのではあるまいか? そうであるならば、上代語のある時期に *Nomen* の語幹(形容詞と名詞の境界の曖昧な品詞)の存在を認め、それに付く付属的な一種の助辞: *ku* (副詞形), *ki* (連体形), *si* (終止形)があったと認定することはできないのか? この品詞(これを仮に形容名詞と名付けておく。これは現代語の形容名詞、すなわちいわゆる形容動詞の語幹、例えば「静カ」と機能的に似ている)が語幹そのものが名詞として使われることもあれば、修飾語としても用いられたと思われる。例:「白」(名詞),「白い」<「白き」(形容詞),「白く」(副詞);また造語成分としての「白石(しろ-いし)」,「高市(*たか-いち *taka-iti*>たけち *taketi*)」。形容詞の *Nomen* 的性格はモンゴル語や満洲語とよく似ている。Cf. モンゴル語: *sayin* <善>(名詞), <よい>(形容詞), <よく>(副詞)。こう見ると、朝鮮語の方が形容詞が動詞と軌を一にしている点でアルタイ諸語の中で孤立していることになるが、金芳漢氏は朝鮮語のアルタイ語的特徴を挙げている:現代語 *sai* (連体詞<新しい>), *sai-ro* (副詞[名詞+具格]<新しく>), *sai-rob-da* (形容詞<新しい>)<*sai-rob-da* 名詞+接尾辞+語尾²⁴。

著者の綿密さは「ラ行変格活用」が語性的に継続動詞であるから、これに形状動詞接尾辞の接辞 *-(s)i* が附いて「有り」となったという説にも現れるが(本稿 5.1.6.参照),こうなるとただただ感嘆の他はない。著者は“*r-i*”という成り立ちを考えたと思われるが、音声変化というものがそう簡単にいくのかとも思われる。

著者は文語の形容詞(形状動詞)には母音語幹と子音語幹(*s-*)があったとしている(現代語では子音語幹は母音語幹に合流。本稿 3.1.5., 5.1.5.参照)が、筆者にはどうしても理解が行かない。そのほかにもいわゆる已然形その他のかなり重要な文法接辞の来歴について著者の貴重な説が挙げられているのだが(本稿 5.1.4., 5.1.5.参照),筆者の貧弱な知識では到底それらを理解する力がないことを告白せざるを得ない。

筆者は歴史以前に起こったと思われる形態素の末音と頭音たる「母音+母音」という結合における変化、例えば $u+a \rightarrow a$ ($-ku+ari \rightarrow -kari$), $a+i \rightarrow e$ ($taka-iti \rightarrow taketi$) 等々の一般的な傾向の研究²⁵の積み重ねがもっと必要ではあるまいかと考えるのみである。

7.1. 本書の書評は、わたくしの知る限り、黒木邦彦氏(神戸松蔭女子学院大学准教授)のもの(『日本語の研究』第11巻4号, 2015.10.1., 35-42頁)がある。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongonokenkyu/11/4/11_KJ00010239604/article/-char/ja/ 黒木邦彦氏【以下に評者とする】の書評の概要は次の如くである。微妙なところがあるので、評者の示した表の他に評者の発言の多くの部分を引用して示す。

1 はじめに

評者は次のように書評を始めている。「近年の日本語学界に言う「文法（研究）」は、アスペクトやモダリティーといった意味範疇（学界では「文法範疇」とも呼ばれている）の研究が 1980 年代以降に隆盛したことを承けてか、「特定の意味範疇における類義形式の使い分けや大義形式を標榜しながら、形式間の対義形式の用法（を解明すること）」も意味するようである。そのため、文法研究を標榜しながら、形式間の連辞関係・範例関係に無頓着で、意味論に終始している論考も少なくない。」「その点、著者が「今までに公にした多くのものの中から、日本語の文法論に関する和文の論文・著作のみを集めて一緒に編んだ」(p.287【あとがき】)「本書は、音韻、形態、統語の洞察に基づく、正真正銘の文法研究であり、記述の合理性・経済性に欠ける、国語教育の伝統文法(以下「学校文法」)を打破せんとする意欲に溢れている。」筆者のつたない見識によれば、日本語文法は種々あるが、山田孝雄、松下大三郎、木枝増一、佐久間鼎といった意味を重要視する諸派のほか、橋本進吉の文法の台頭により事実上形態重視の平均的な国文法の像ができあがり（時枝誠記の文法も実質的には橋本寄りのものであり、ヨーロッパ言語学を根拠として発言した亀井孝、河野六郎も日本語に関しては基本的には国文学派に属する）。それに影響された流派の内でも意味との関連において、部分的にであれ、全体的にであれ、かなり独自の理論を出す学者が現れたが（金田一春彦、言語学研究会²⁶等々も）、アスペクトとか連語とかその他の研究がそれであり、筆者はこの動きも著者の文法もそのような文脈において眺めるべきものと思う。そういう意味では日本ではアメリカ構造主義に基づく日本語文法がさほど流行らなかったとも言い得る。

評者はさらに続ける。「3 編 12 章のうち、「第 2 編第 2 章 名詞と接尾辞【本稿 4.2.】」と「第 2 編第 5 章 文【本稿 4.5.】」は研究の目的、意義、位置付け等が明確ではないので、批評しかねる。また、本書の中核たる動詞形態論関係の章（第 1 編第 1-3 章【本稿 3.1.-3.3.】、第 2 編第 3-4 章【本稿 4.3.-4.4.】、第 3 編第 1-2 章【本稿 5.1.-5.3.】）は部分的に重複しているので、各章を整理して、次の順に評していく。」評者は第 2 編第 2 章と第 2 編第 5 章の目的、意義、位置付け等が明確でないと言っているが、著者は著者の目指す日本語文法の全面的な簡潔な叙述の中で自己のもっとも中心的な理論—派生文法—、従って動詞中心の文法を通時態をも考慮に置きながら叙述しようとしたものであって、目的はそれなりに明確であると判断する。著者は現代語においてもテンスを認めないなど、大

胆な提案も行っている(本稿 4.3.1.参照)。なお筆者は、古代語とは異なり、現代語ではテンスを認めるべきであると思う。

2 著者の動詞形態論 評者は次のように評する。「著者が提唱する「派生文法」の根幹をなす動詞形態論は Bloch (1946a; 1946b) と大きくは変わらない²⁷。よって、新規性・独創性には欠けるが、記述の包括性・体系性 (cf. 第1編第1章, 同第3章【本稿 3.1., 3.3.】, 第2編第3-4章【本稿 4.3.-4.4.】, 第3編第1章【本稿 5.1.】, 同第2章【本稿 5.2.】) と、古代日本語も射程に収めている点 (cf. 第1編第1章§5, 同第2章【本稿 3.1., 3.2.】 §6-7, 第3編【本稿 5.】) は特記に値する。」Bernard Bloch によれば(本稿【注】30 参照), その *Studies in Colloquial Japanese* の I. *Inflexion* において動詞の活用が, II. *Derivation of Inflected Words* において文法及び語彙の変化形が扱われているが, 著者のものは文章語の形式も含んでいて, Bloch よりも包括的であり, 機能に関しては Bloch が Past (過去) / Non-past (非過去) とするところをパーフェクト/インパーフェクトとし, 文法書として意味に関しても簡潔ながらいろいろと述べられており, かつ Bloch と根本的に異なる点はアルタイ諸語をよく知る著者ならではのものとして, アルタイ諸語との徹底的な比較において日本語を眺めるといってこれこそまったく独創性に満ちた研究と言えるものではないかと筆者は思う。

2.1 現代日本語の動作動詞 評者は著者による現代日本語の動作動詞の諸形式を次のように整理する。なお評者のこの表では -s-, -r-, -a-, -j- は著者のものとは異なる。この表の下の記述を参照されたい。

| | 取(る) | 見(る) | 上げ(る) | 来(る) | す(る) |
|--------|-----------|-----------|------------|-----------|----------|
| 使役: | tor-ase- | mi-s-ase- | age-s-ase- | ko-s-ase- | sØ-ase- |
| 受動等: | tor-are- | mi-r-are- | age-r-are- | ko-r-are- | sØ-are- |
| 否定順接: | tor-a-zu | mi-zu | age-zu | ko-zu | se-zu |
| 前望: | tor-oo | mi-j-oo | age-j-oo | ko-j-oo | si-j-oo |
| 命令: | tor-e | mi-ro | age-ro | ko-i | si-ro |
| 非完了順接: | tor-i-Ø | mi-Ø | age-Ø | kØ-i-Ø | sØ-i-Ø |
| 否定前望: | tor-u-mai | mi-mai | age-mai | kØ-u-mai | sØ-u-mai |
| 非完了: | tor-u | mi-r-u | age-r-u | ku-r-u | su-r-u |

評者は「この分析で抽出される言語形式は次の3種類。」とし, 次のように述べている。長いが, そのまま引用する。

- 「(2) a. 母音幹: mi- ‘見(る)’, age- ‘上げ(る)’ のように母音で終る動詞語幹。
 b. 子音幹: tor- ‘取(る)’ のように子音で終る動詞語幹。
 (3) a. 母音辞: -oo ‘前望’, -ase- ‘使役’, -u ‘非完了’ のように母音で始まる動詞接尾辞。

b. 子音辞：-Ø ‘順接’， -mai ‘否定前望’のように「母音以外で始まる動詞接尾辞（ゆえに，正確には「非母音辞」）。

(注) ちなみに，「母音辞」「子音辞」という用語は本書には見られない。

(4) a. 連結母音：tor-azu ‘取らず’， tor-i-Ø ‘取り’， tor-u-mai ‘取るまい’の -a-, -i-, -u- のように，子音幹が子音辞を取る時に現れる母音。

b. 連結子音：mi-s-ase- ‘見させ(る)’， mi-j-oo ‘見よう’， mi-r-u ‘見る’の -s-, -j-, -r- のように，母音幹が母音辞を取る時に現れる子音。」

「著者は連結音を接尾辞に登録し， -(a)zu, -(i)Ø, -(u)mai, -(j)oo, -(s)ase-, -(r)u のように表記する。屋名池 (1987: §2.1.3) ²⁸ が説くとおり，これ（屋名池の用語では「活用部」）を語幹の方に登録すると，子音幹は tor(i/u/a)- ‘取(る)’のように，母音幹は mi(r/s/j)- ‘見(る)’のように記述しなければならない。

構造主義言語学の信奉者たる評者は，文節音レベルの分析に基づく著者の動詞形態論を支持しているが，些末ながら，次の点には違和を感じる。

(5) 【本稿 3.2.5. の第 7 行の「完了態終止形・連体形の…」から第 11 行の「スマイ」 s-umai のようになる。」まで】

確かに，ko-, se- の語幹末母音の交替は，「(i) i(i-u 持ち子音辞を取る時は Ø に，(ii) r 持ち母音辞 (e.g. -(r)u ‘非完了’， -(r)eba ‘仮定条件’， -(r)una ‘否定命令’) を取る時は u に交替する) と一般化できそうである。しかし，当該語幹末母音は，r 持ち母音辞 -(r)are- ‘受動等’ をとつても，u にはならないのである。

結局，ko-, se- の語幹末母音の交替は連結音では整理できないので，「特定の接尾辞を取る時は i ないし u に替わる」とする方が良からう。si-j-oo ‘しよう’， si-r-o ‘しろ’， si-na- ‘しな(い)’ を s-i-j-oo, s-i-ro, s-i-na- とは分析しがたいことをも考慮すると，なおさらである。」

筆者はアメリカ構造主義信奉者からしてこういう発想をすることに興味を持つものである（本稿 5.3.3., 6.1.1. 参照）。日本語学の専門家たる評者のこの考え自体は常にアルタイ諸語を考慮する著者の考えを根幹から揺るがすものである。

2.2 古代日本語の動作動詞

2.2.1. 語幹および接尾辞の分析 著者の分析を評者は次のように表にまとめて「(包括性と体系性を優先して，再考形式も実例を欠く形式も挙げる。）」としている。

| | 取(る) | 見(る) | 往(ぬ) | 上げ(る) | 来(る) | す(る) |
|--------|----------|-----------|----------|------------|-----------|-----------|
| 使役： | tor-asë- | mi-s-asë- | inØ-asë- | agë-s-asë- | kö-s-asë- | se-s-asë- |
| 受動等： | tor-arë- | mi-r-arë- | inØ-arë- | agë-r-arë- | kö-r-arë- | se-r-arë- |
| 否定： | tor-a-z- | mi-z- | inØ-a-z- | agë-z- | kö-z- | se-z- |
| 命令： | tor-e | mi-Ø | inØ-e | agë-Ø | kö-Ø | se-Ø |
| 非完了順接： | tor-i-Ø | mi-Ø | inØ-i-Ø | agë-Ø | ki-Ø | si-Ø |

| | | | | | | |
|-----|-------|--------|---------|---------|--------|--------|
| 終止： | tor-u | mi-r-u | inØ-u | agØ-u | kØ-u | sØ-u |
| 連体： | tor-u | mi-r-u | inu-r-u | agu-r-u | ku-r-u | su-r-u |

評者は言う。「著者は、学校文法に言う二段動詞および変格動詞の語幹を母音幹と見る。黒木 (2012) ²⁹ が指摘するように、「これらの子音幹とすると、次のような弊害が生ずる。

- (7) a. 動作動詞接尾辞に何種類もの異形態を設定しなければならない。
 b. 動作動詞語幹と同接尾辞の接続の型 (≒活用例) はどちらの音形からも知りえないので、個別に覚えなければならない。」

評者は第3編第4章【本稿 5.4.】における i/e 幹 (上/下一段) 以外の母音辞を取る際に語幹末母音を u に替える逆行同化に触れ、次のように言う。「著者の分析で腑に落ちないのは、(i) 「死ぬ」「往ぬ」における語幹末の -n は子音でありながら母音に準ずるものと認められるので、ゼロ形態の母音の Ø を附」(p.194) すという点【本稿 5.1.3.の表の上部にこの部分が載っているが、筆者はそれを引用していない】と、(ii) i/e 幹以外の母音幹が -(r)u ‘連体’ 以外の母音辞 -(r)u... を取る際に語幹末母音を Ø にするという点である。更に、i/e 幹動詞や子音幹 -(a)z ‘否定’ の分析にも最高の余地があるように見える。「評者であれば、以上の問題を考慮して、古代日本語の動作動詞を次のように分析する (著者の分析と異なる個所は斜体で示す)。」

| | | | | | | |
|--------|-----------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|
| 「(8) | 取(る) | 見(る) | 往(ぬ) | 上げ(る) | 来(る) | す(る) |
| 使役： | tor-asë- | mi-s-asë- | in-asë- | agë-s-asë- | kö-s-asë- | se-s-asë- |
| 受動等： | tor-arë- | mi-r-arë- | in-arë- | agë-r-arë- | kö-r-arë- | se-r-arë- |
| 否定： | tor-a-zu- | mi-zu- | in-a-zu- | agë-zu- | kö-zu- | se-zu- |
| 命令： | tor-e | mi-Ø | in-e | agë-Ø | kö-Ø | se-Ø |
| 非完了順接： | tor-i-Ø | mi-Ø | in-i-Ø | agë-Ø | ki-Ø | si-Ø |
| 終止： | tor-u-Ø | <i>mir-u-Ø</i> | <i>inu-Ø</i> | <i>agu-Ø</i> | <i>ku-Ø</i> | <i>su-Ø</i> |
| 連体： | tor- | <i>mir-u</i> | <i>inu-r-u</i> | <i>agu-r-u</i> | <i>ku-r-u</i> | <i>su-r-u</i> |

「分析に拠れば、動作動詞語幹は、その語幹末音素から次の3種8類に分けられる。

- (9) a. 子音幹：子音幹，形状性 r 幹 (学校文法に言う四段，ラ変)
 b. 母音幹：i/ë 幹，kö 幹，se 幹 (同じく上/下二段，カ変，サ変)
 c. 混合幹：i/e(r)幹，n(u)幹 (同じく上/下一段，ナ変)

(分析(8)では形状性) r 幹，i 幹，e(r)幹の例示を割愛)

母音幹と混合幹は，u 持ち子音辞，ないし，-(r)arë- 以外の r 持ち母音辞を取る際，その語幹末母音を後退させる。kö 幹と se 幹は，i 持ち子音辞を取る時もそうなる ³⁰。そして，著者が -⁰(r)u... とする動作動詞接尾辞は，分析(8)では -^u(u)... となる。

上一段動詞語幹を i 幹と r 幹から成る i(r)幹とする評者の分析は、語幹末音素の交替を追加する分、i 幹とする著者のそれより経済性の面で劣る。しかし、所属語幹数の少なさを考慮すると、in(u)-‘往(ぬ)’と sin(u)-‘死(ぬ)’しかない n(u)幹のように、子音幹と母音幹が後退する混淆幹とするのも、そう悪くは無かろう。

また、上一段動詞語幹を子音幹の要素も持つ混淆幹としておけば、九州方言、特に薩摩方言で上一段動詞語幹の子音化が進んでいることを説明する上で、都合が良い。」

筆者には評者の言い分も理解出来そうである。いずれにせよ、著者はカ変とサ変の扱いまではアルタイ諸語の「命令形=語幹」を参考にうまく出来たのだが、ナ変で思うようにいかなかったというところであろう。

2.2.2. -(a)zu の分析 評者は次のように言う。「終止形動詞は、副詞節を作ること、接続助詞 =te (清瀬が定める動詞接尾辞 -(i)te, -(i)kute と、名詞に付く =nite, =tote から抽出) を取ることもできない。よって、著者が -(a)z-⁰(r)‘否定-終止’と分析する -(a)zu (tor-a-zu ‘取らず’, mi-zu ‘見ず’, agë-zu ‘上げず’, etc.) のうち、次のように(10)副詞節を形成したり、(11)接続助詞=te (>動作動詞接尾辞 -(i)te) を取ったりするものは、-(a)zu-(i)Ø ‘否定-順接’ とするべきである。

(10) a. 安波受 思仁 世米
 [[ap-(a){zu-(i)}Ø/*z-⁰(r)u}] sin(u)-(i)Ø se-(a)m-^u(r)ë
 ‘会わず、死のう。’ (万葉：[15] 3740)

b. 之良受之 安良婆
 [[sir-(a){zu-(i)}Ø/*z-⁰(r)u]=si ar-(a)ba
 ‘知らず、あれば’ (万葉：[17] 3976)

(11) a. 由加受互 b. 安波受[弓+一(↓)]
 juk-(a){zu-(i)Ø/*z-⁰(r)u}=te ap-(a){zu-(i)Ø/*z-⁰(r)u}=te
 ‘行かなくて’ (万葉：[14] 3447) ‘会わなくて’ (万葉：[15] 3777)

また、「安波受家牟’会わなかったろう(連体)’ (万葉：[17] 4014) および「已受祁牟’来ななかつたろう(連体)’ (万葉：[20] 4323) の -(a)zukem- も、-(a)z-(i)kem- ではなく、-(a)zu-(i)kem- とするのが妥当である。

そして、以上のように分析するのであれば、次に挙げる文末の (=‘終止’ という統語的職能を持つ) -(a)zu は -(a)zu-^u(u)Ø ‘否定-禁止’ となる。

(12) 安米波 布例杼母 伊呂毛 可波良受。
 [[ame=pa pur-^u(r)ë=do=mo] iro=mo kapar-(a)zu-^u(u)Ø
 ‘雨は降るけれども、色は変わらない。’ (万葉：[20] 4442)]

2.3. 形状動詞 評者は著者の考えを以下のように整理し、評者の考えを述べている。

| | | | | |
|-------|--------|----------|---------|------------|
| 「(13) | 良い | 高い | 悪い | 楽しい |
| 名詞化： | jo-Ø | taka-Ø | as-i-Ø | tanos-i-Ø |
| 順接： | jo-ku | taka-ku | as-i-ku | tanos-i-ku |
| 連体： | jo-ki | taka-ki | as-i-ki | tanos-i-ki |
| 終止： | jo-s-i | taka-s-i | as-i | tanos-i] |

次の *umasi*, *taka* が「著者に拠れば、形状動詞語幹と形状動詞接尾辞から成る派生名詞語幹となる」ことを述べている。

「(14) a. 馬下乃

umas-(i)Ø+mono

‘美しいもの’ (万葉:[11] 2750)

b. 多可弥等毛比弓

taka-(i)Ø+ne=to#omop-(i)Ø=te

‘高嶺と違って’ (万葉:[14] 3514)

c. 伊夜 多可尔 山乎 故要須疑

ija taka-(i)Ø=ni jama=wo koje-(i)Ø+sugi-(i)Ø

‘ますます高く山を過ぎ越して’

(14)の形状動詞接尾辞 *-(i)Ø* ‘名詞化’ は、動作動詞語幹に付いて、名詞語幹を派生させる次の *(i)Ø* と同じものだろう。形状動詞接尾辞 *-(s)i* ‘終止’ が形状性 *r* 幹に付くこと (e.g. *ar-i //ar-(s)i//* ‘終止’) も踏まえると、古代日本語においては、動作動詞と形状動詞が形態の面でも通じていたのかもしれない。

(15) a. 安我伎乎

波夜美

agak-(i)Ø=wo paja-(i)mi

‘歩みが早いから’ (万葉:[15] 3540)

b. 宇伎弥乎

詞都追

uk-(i)Ø+ne-(i)Ø=wo se-(i)tutu

(万葉:[15] 3627)』

評者は著者のこのような根拠がラ変との関連にもあることには触れていない(本稿 3.2.7.参照)。

3. 「第3編第3章 いわゆる「音便形」の起源と成立」【本稿 5.3.】について

評者は言う。「著者は、…子音幹の連声(…)を「中古音に始まり、中世語から近世語を経て固定するに至るまでの言語史を通し、各時代に於いて共時的現象として継がれて来た」(p.259)【本稿 5.4.3.ただしここには引用されていない】ものと見ている。評者も同様に考え、黒木(2014)³¹において、現代薩摩方言における子音の自然音類(natural class)を示しながら、子音幹の強制連声はかつての日本語における子音の自然音類を示唆していると推定した(恥ずかしながら、著者の論攷を看過していたため、後続の研究としては位置付けていない)。

著者は次の2点に基づいて、室町以前のある事典における *s* の音価を [ʝ] ないし [ts] と推定する。

(16) a. *s* 幹は軟口蓋閉鎖音終わりの *k-g* 幹と同じく、*-(i)tar-* ‘状態’ や *=te* ‘完了順接’ を取る時にイ音便化していた(ゆえに、*s* の音価は *k-g* のそれに似ていた)が、*s* が無声歯茎摩擦音で実現する現在はそうではない。

b. 子音幹の連声は、t ないし s で始まる形態素 (e.g. -(i)tar-, =te, na- -so ‘禁止’, etc.) を取る時にのみ起こっていた。

t, k, g の音価を [t], [k], [g] と推定した上での推定ではあるが、大きく外れてもいないだろう。s の音価が [ʃ] ないし [ts] であれば、当時の子音幹の連声にとって、破擦音を含む [t] 始まりの形態素を取るとは必要条件であったということになる。

一方、現代標準語の -(i)tutu ‘持続’ が -(i)te ‘完了順接’ などと同じく、t 始まりでありながら、子音幹の連声を誘発しない理由は、次のように考えている。

(17) -(i)tutu も、同じく頭子音は t- であり、連結母音 -i- も伴っているが、この t- が音声的には「[ts-] である為か、此の接辞の添加した形は書キツツ・読ミツツ・咲キツツであって、内的連声は生じない。

しかし、破擦音 [ts] で始まる -(i)timaw-, -(i)tjaw- (-(i)te#simaw- の縮約形式) は子音幹の連声を惹き起こす^{注2.32}。」

4. 「第2編第1章 有意音」【本稿4.1.】について 以下に評者の言葉をそのまま引用する。

「著者は、「意義を伴う一纏まりの音声」たる「有意音」(p.71) を次の2種類に分ける。

(18) a. それ自体で実質概念を表す自立音

b. それ自体では実質観念を著わさず、常に自立音に附随して、自立音に一定の職能を附与したり、自立音の表す観念に特別な意味を添付したりする「…」従属音

自立音は学校文法に言う「自立語」と同義で、動詞/非動詞の別は用言/体言のそれに等しい。一方、従属音は、著者がモーラ単位の分析ではなく、音素単位のそれに拠ることから、学校文法に言う「付属語」とは大きく異なる。日本語の拘束形態素をモーラ単位で誤分析したことにより生まれた、活用語尾、接頭語、接尾語、助動詞、助詞という形式は、著者によって合理的に再定義され、接辞ないし助辞となっている。

なお、従属音の「常に自立音に附随して…」という定義は「単独では用いられず…」などに替え、動詞の構成要素たる動詞語幹を従属音に追加するべきだろう。なぜなら、従属音たる動詞接辞は、自立音たる動詞ではなく、従属音たる動詞語幹に付くからである (e.g. [動[動幹 tor]-imas]-u], *[動[動[動 tor]-imas]-u]‘取ります’)。

また、従属音を分類する際、「付属語」/「附属形式」の別を説く服部 (1950)³³ の研究成果に触れておけば、「多少とも自立性を保ち、自立者との結合度が接尾辞に比してやや低い」(p.75) という助辞の形態論的特徴は理解しやすかっただろう。」

5. 総評 最後に評者の言葉を全部引用する。

「難癖を付けるような書評となってしまったものの、構造主義言語学の信奉者たる評者は、次のような過程を抽出し、同類語幹同士（(19a) は動詞語幹同士、(19b) は名詞語幹同士）の派生とした点は特筆に値する。なぜなら、拘束形態素の分析精度に劣る学校文法に染まった日本語学者の多くは、このような観点を欠いているからである。

(19) a. kak- → kak-ase- → kak-ase-mas-
書(く) 書かせ(る) 書かせま(す)

b. kjaku → o-kjaku → o-kjaku-san → o-kjaku-san-tati
客 お客 お客さん お客さんたち

「さて、著者はあとがきにおいて次のように述べている。

(20) 【これは本稿 5.4.8. に引用されている。】

しかし、日本語学界においては、仮名単位の分析に基づく学校文法に対する信仰が根強く、方言研究においてさえこれらに拘わる研究者も少なからず存在する。40年以上も前の1971年に本誌の前身たる『國語學』で示された、本書第1篇第1章の明晰な分析原理は、残念ながら、未だ学会の主流とはなりえていない。評者としても、著者の派生文法が標準化することを熱望しているが、記述の合理性も経済性も、仮名表記という権威化された慣習の前では無力であるらしい。」まさに評者の憂えるとおりでである。

日本語史及び日本語方言研究に関心のある評者の具体的な批評は、アメリカ構造主義に対する態度の違いはあるが、もっとも有意義なものと筆者には思われる。

7.2. 国広哲弥、『日本語学を斬る』、東京：研究社、2015、177頁の第二章 動詞形態論—動詞に活用体系は存在しない—、27-41頁の【付記】に清瀬先生の著書【本稿2. 参照】が引用されている。

国広氏は常識外れの国文法がまかり通る不思議さの理由として(1)「日本人は活用なことなど何も知らなくても立派に日本語が話せる。」(2)「大学の国語学研究室では昔から現代語など学問研究の対象とするに値しないと考える風潮があった。」(3)「動詞活用表には語幹の欠如だけでなく、いろいろな疑問が含まれている。」(4)「もう一つの理由は「日本語の動詞には活用体系がある」という古来の「信仰」を無批判に信じ込んで来た日本人の保守性にあると思われる。」そしてもう一つ「日本語を構成する最小単位は仮名である」という信仰であることを挙げている。筆者は上記のうち(1)、(4)以外は同意見である。(4)のうち「日本語を構成する最小単位は仮名である」という信仰はその通りである。国広氏は「動詞の「語幹+語尾連鎖」の分析は、子音と母音の連鎖を切り離すことに基づいてい」と主張し、「着想が仮名の呪縛とは無縁のアメリカの構造言

語学者によるものであった」と述べているが、日本のローマ字論者はアメリカ人よりも先にこれに気付いていたと筆者は思う。なお国広氏は、カナダの言語学者 John Chew が「ブロックの論文集の原本を書評した中で (LANGUAGE, 1971, Vol. 47, Number 4), p. 34 以下で示した第一形態規則【以下を参照—菅野】と同様の考え方がブロック以前にも存在したと明記している」と述べている。

国広氏はブロック (【注】20 の英文, 日本語訳書名参照) の表を挙げている。

| | 母音動詞 | 子音動詞 | 形容詞 | 普通体 繫辞 | 丁寧体 繫辞 |
|-----|--------|----------------|---|-----------|-----------|
| 直 | -ru | -u | -i | S | -u |
| 推 | -yoo | -oo | -karoo; -[ru]mai, ²¹ -umai ²² | -oo | -yoo |
| 命 | -ro/-o | -e | — | — | — |
| 与 | -reba | -eba | -kereba | S | — |
| 不 | -o | -i | -ku; -zu, ²¹ -azu ²² | — | — |
| 直・過 | -ta | -ta, -da | -kaqta | -ta | -ta |
| 推・過 | -daroo | -taroo, -daroo | -kaqtaroo | -taroo | -daroo |
| 条 | -tara | -tara, -dara | -kaqtara | -tara | -tara[ba] |
| 进 | -tari | -tari, -dari | -kaqtari | -tari | -tari |
| 動 | -te | -te, -de | -kute/-kuqte | S | -te |

21. 母音動詞の語幹と同音の語幹の後で。

22. 子音動詞の語幹と同音の語幹の後で。

R・A・ミラー編「ブロック日本語論考」p.24 より

【表記の一部は原文 (英文) により変更—筆者】

国広氏はさらに岡田英俊 (1987)³⁴ を挙げて「もし語幹末音と接辞の頭音が母音にしる子音にしる、同じならばあの方の音が落ちる」という次の規則を挙げている。

第一形態規則 [α syll] & [α syll] ⇒ [α syll] & Ø

第二形態規則 M = /q/, /N/, /R/, /J/

M = Q/t, r, w/; N/m. n. b/; R/Vowels/; J/k. g/

ここで /q/ 促音「っ」、/N/ 撥音「ん」、/R/ 引き音「ー」、/J/ 二重母音の「い」。ついでながら筆者は /R/ なる音素を認めない。なぜなら「長音」というようなそれ自体で実体のない音素など存在しないからである (この点では /#/ も同じ)。

国広氏は「この子音・母音語幹説を採用することによって、…いろいろなことが明解に説明され」として、次の点を挙げている。

(1)「文法的に「る」と明瞭な対をなす「た」が取り上げられていないという不均衡が解消した。(2)「居る・着る・見る」などで語幹がないという面妖な状態が解消された。(3)「五段活用・一段活用」などのいかにも体系的な区別名が消えた。「これらは語幹の音形の違いに過ぎ」ない。(4)「食べよう」などの意向形がはいる余地がなかった不自由さが解決された。(5)「食べる」と「滑る」にタを付けると「食べた」と「滑った」のように形が変わるのは語幹 *tabe*, *suberu* の違いとして説明できる。

また「可能形」は子音語幹動詞の「ラ抜き形」だったのだと国広氏は言っている。kak-rare-ru ⇒ kak-are-ru「書かれる」

kak-re-ru ⇒ kak-e-ru「書ける」(ラ抜き形)

この本の【付記】で国広氏はこの本の脱稿後に清瀬先生の著書【本稿 2.2.】を入手したとして、次のように述べている。以下に全部を引用する。「この本【清瀬先生の著書】でも動詞語幹を母音語幹と子音語幹に分ける考え方が採用され、語幹に助動詞が接尾する時の語形変化にも考察が及んでいます。ところが、われわれが示した動詞形態論と一致するのは、語幹を子音語幹と母音語幹に二分するところまでで、語幹に助動詞が接続するときの語形変化の記述の方向が我々と全く逆ですので、本文の記述に変更を加える必要はないことをここに明記しておきます。」

「清瀬説では「連結子音」「連結母音」という概念が建てられていますが、我々の説ではその必要はありません。語幹に助動詞が接続し子音連結あるいは母音連結が生じる場合には必ずあとのほうの音が削られるという第一形態規則を樹てているからです。かくして、モーラ音素がかかわる場合は別にして、日本語は「母音+子音+母音+子音…」という整然とした音列を持つに至るわけです。

連結子音 kak-saseru mi-saseru

連結母音 kak-anai mi-anai【原文では s, a の横線は斜線(右上から左下へ)である一筆者】

確かに現代語だけを見る時はこのような単純化は効力を持つかもしれないが、いわゆるカ変とサ変の場合はどうなるのか？ 彼らの規則でも扱いきれないものと思う。もっともこの2つの規則は語幹末と接辞の初めの音素との関係しか扱っておらず、語幹それ自体の内部には入り込んでいないから、それは別問題だと言うのだろうが、このことについて何の説明もない。もちろん古代語、中世語は別の体系だが、この評者たちにはそこにまで踏み込んでほしかったと思うが、彼らにその気があったかどうかは分からない。

国広氏はこの本で以下のように文法論の興味ある分野を扱っておられるが、ここでは本論からそれるので、扱わないことにする。

第三章 ル・タ・テイルについて—動詞語尾論—, 第五章 ハとガについて (1) —日本語に格助詞は存在しない—, 第五章 ハとガについて (2) —金田一説・久野説との比較検討—

7.3. 「態文法：派生文法と「態の双対環」文法」というブログがあり、著者による本書【本稿 2., 3. 参照】及び国広哲也氏の著書【本稿 7.2.】を比較的詳しく紹介し、書き手なりの注釈を加え、「態の双対環」文法というものを提唱しているようである。 <http://webnote.cocolog-nifty.com/note1/2017/03/post-579b.html>

書き手は言語学ではなく哲学の研究者らしい。ここでは取り上げない。

7.4. 名古屋大学 戸山研究室 (情報科学が専門らしい) のブログがあり、著者による本書【本稿 2., 3. 参照】のうち現代語の特に動作動詞と形状動詞を他よりも詳しく概説しているが、その結論として興味深い次の発言がある。

http://www.inagaki.nuie.nagoya-u.ac.jp/research/derivation_grammar.html

「結局、派生文法は正しいの？」

「さて、どうでしょう？ 最初にも書いたとおり、世の中には数多くの文法が提案されています。そのどれが正しいかの議論は言語学者でない我々の手にはおえないところです。

実は、我々情報科学の研究者にとって派生文法が正しいかどうかはあまり興味がありません。我々の興味は、「日本語をコンピュータで扱うときにどの文法が適しているか」にあります。学校文法を扱う場合、面倒な活用処理が必要になります。一方、派生文法を使えば、活用処理はほとんど必要なくなります。ただし、派生文法を扱うと解析結果がローマ字交じりになるという欠点もあります。そうした長所短所を見極めて使用すると良いでしょう。我々の研究室では、膠着語と呼ばれる日本語と同じ性質を持つ言語観の翻訳に派生文法が適していることを利用して、日本語-ウイグル語および日本語-ウズベク語機械翻訳の研究を進めています。」

8. 清瀬先生は生前「清瀬義三郎則府、『日本語文法新論—派生文法序説—』、東京：おうふう（桜楓社）、185 ページ、1989【本稿 2.1.参照】が主に自然科学や技術畑の人々によく売れたようだ」と筆者に語ったことがあるが、名古屋大学戸山研究室のこの言と相俟って、著者の文法論の本質、というより記述の簡略化に重点を置くアメリカ構造主義の体質について、たいへん興味深い。けだし思考や研究の過程はどうであれ結果さえ「正しければ」うまく機能するのが技術の世界であるから。

ここで思い出すことを筆者は浅学菲才を顧みず述べることにする。かつて筆者は大学奉職中に日本の大会社に在籍する韓国人の若い技術者たち（日本の大学の工学部出身）の訪問を受け、筆者が中心になって作成した朝鮮語の接辞、語尾、語尾の連結、分析的な形、補助的な名詞、用言その他を集めた教材を、どこ

で聞きつけたのか、求めに來た。彼らは朝鮮語と日本語の自動翻訳に携わる人々であったが、朝鮮語のすべてのこのような要素や単語がここに収められているかどうかを執拗に尋ねてきた。筆者が直接朝鮮語の印刷物、朝鮮語の各種の辞書から抜いてきたものであり、それが全部かどうかは分からないものだが、彼らの熱心さに打たれた。朝鮮語の生きた姿を極めようともせず、少数の断片の形をあれこれいじくりまわす言語学者とは異なった真面目さがそこにはあった。

たまたまある大学の工学部から大学院生（韓国人）の自動翻訳に関する博士論文の審査に立ち会うよう依頼が來た。まったくの門外漢なのだが、止むを得ずそこに出かけた。内容は正直言ってさっぱり分からなかったが、ここでしきりに教授側から「それは文学部的発想だ」と攻撃的な言葉が大学院生に投げかけられていたことを覚えている。まさに工学部的と文学部的の発想の対決だった。

世はチョムスキー全盛時代であり、そこで問題となる音素とは事実上いわゆる形態音素である。世の言語学辞典のあるものは何の疑いも持たずに無批判に流行の概念を並べるのみ、形態音素なる概念それ自体に疑問も持たずに音素を確定し、公式に従って議論を進める。人文科学の一文科たる言語学が単なる技術科学に墮し、言語学の「工学部化」が始まっている。工学部はそれでも膨大な量の情報から一般化を行うことによって抽出された種々の要素を利用するという謙虚さを持っているが、言語学は工学部のよって立つべき材料の綿密な検討もすることなしに簡単なことがらを言語学的な言葉によってあれこれあげつらう、しかも豊富な例もなしに言語現象を理解し得るという認識の傲慢さに裏打ちされているだけである。コンピューターの導入以前にすでに豊富な材料によって文法書と辞典を編むという作業を経て來たヨーロッパの言語学界はもはやアメリカ言語学の波に吞まれんとしているかに見えるが、われわれは本来の姿にもう一度立ち返る必要がある。頭の中ででっち上げる簡単化という作業ではなしに（例えば、われわれはチョムスキーアンにありがちなある語彙的あるいは文法的現象を頭の中で再現し得るかのような「自信」を持つ資格はない）、複雑な言語現象、特に意味に関していわゆる文法範疇はもっと多面的に、それこそ構造的にありのままに観察する姿勢に立ち返らなければならないのである。

清瀬先生の著書もそのコンテキストにおいて眺める必要がある。清瀬先生の掘って立つ原理は古典的なアメリカ構造主義であるが、清瀬先生は日本語史の事実をも念頭に置きつつあらゆる現象を、アルタイ語学をも視野に入れつつ（この点は他のアメリカ構造主義信奉者のまったく与り知らぬところである）、格闘したことが他の単純な言語論とは異なり、評価され得る。しかしながら、そこで述べられている文法範疇については、ブロックをも含む構造主義者の単純さを露呈するのである。

アメリカ構造主義言語学の望むところであったかどうかはいざ知らず、その信奉者たちの学問はおよそ面白くないものが多く、これは面白さが生命の人文科学たるべき言語学の墮落以外の何物でもない。

清瀬先生の著書の評者としてはまったく的確でない筆者の非言語学的印象をもってこの紹介を終える。けだし無味乾燥とは縁のない清瀬先生の、面白い学問を目指したであろうお気持ちは筆者の生意気をおゆるし下さるであろうことを信ずる。

それと同時に満洲語学、文字論、地名学、系統論その他の分野での清瀬先生の業績に対する正当な評価の現われることを切に願う。

【注】

¹ メールの原文は次の通りである。

August 10, 2017

Dear colleagues, students, friends,

I am sorry to have to convey the very sad news that Professor Gisaburo N. Kiyose has passed away in Tokyo, Japan, at the age of 86. He is survived by his wife Yoshie and his sons Joe and Ken and their families.

He was born on January 25, 1931, and died on July 30, 2017. He received his B.A. degree in linguistics from Kyoto University in 1954 and was always a loyal partisan of that school. He received his Ph.D. in Uralic and Altaic studies from Indiana University in 1973 with a groundbreaking dissertation on the Jurchen (medieval Manchu) language and script.

Professor Kiyose was a great scholar. He published his revised and expanded thesis as a book, *A study of the Jurchen language and script: reconstruction and decipherment* (Kyoto: Hōritsubunka-sha, 1977), which remains a fundamental work in the field of Tungusic linguistics. Among his other books are *Nihon gogaku to Arutai gogaku – Japanese linguistics and Altaic linguistics* (Tokyo: Meiji Shoin, 1991), *Japanese grammar: a new approach* (Kyoto: Kyoto University Press, 1995), and *Nihongo bunpōtaikei shinron: hasei bunpō no genri to dōshi taikei no rekishi* [*A new approach to the Japanese grammatical system: principles of derivational analysis and a history of the verbal system*] (Tokyo: Hituzi Syobo, 2013). His sharp mind called into question many long-accepted but doubtful theories, and proposed scientific solutions to the problems addressed. His books and articles on Japanese, Jurchen, and other languages of eastern Eurasia are of essential importance.

He served as a faculty member at Indiana University, California State University, the University of Hawaii, and Himeji Dokkyō University, and retired as an Emeritus

Professor from the University of Hawaii. He also taught at many other universities and gave research lectures at conferences and symposia around the world.

Professor Kiyose was my close friend for over 50 years. We met at the CIC summer language institute in 1966, when I was an undergraduate and he was a graduate student at Indiana University. Partly because of him I applied to Indiana University for graduate school, and we were then fellow students for a few years, after which he was my teacher for several years as well, before he moved to California.

We wrote three articles together, all of which we first discussed and sketched out on napkins while having beer and Japanese snacks in the Ginza Lion, which we accordingly dubbed the “Ginza Lion Research Institute”. He was a unique person, brilliant, humorous, and kind. I miss him very deeply.

Respectfully,

Chris

Christopher I. Beckwith

Distinguished Professor of Central Eurasian Studies

School of Global & International Studies

Indiana University

Bloomington, IN 47405, USA

² 3 編の論文とは本稿 1.2. 「業績」中の 38), 39), 41) を指す。

³ 著者は後で唯一の例外「行ク」～「行ッタ」に言及している（本稿 3.2.3.）

⁴ G.J. Ramstedt, *A Korean Grammar* を引用している。

⁵ 金田一春彦の論文「国語動詞の一分類」、『言語研究』15, 1950, 46-63 頁（金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』, 東京：むぎ書房, 1976, 360 頁に収録）を引用しているが、この見解には賛成できないと言っている。

⁶ 続いて「大野晋氏の唱えられる如き「本来の形容詞はク活用で、シク活用の形容詞は比較的後に発達したものであろう。…」と言った類いの形而上学的推論は許容せられない。」と述べている。

⁷ 河野六郎, 「日本語（特質）」そのうち特に「5」用言複合体, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著, 『言語学大辞典 第2巻』, 三省堂, 1581-1582 ページ参照。

⁸ 著者は古代日本語 8 母音説を支持していたようである。

⁹ しかしながらこの著書では著者のこのことについての言及は初出のように思われる。

¹⁰ 河野六郎氏は印欧語の活用と日本語の活用とを区別し、前者は動詞の屈折 (inflexion, inflection) であり、すなわち語形変化であり、範疇によって範例 (paradigm) の形で示されるが、後者は動詞のいわゆる活用形であり、「総括的

にいえば、連辞性 (syntagmatic) 原理による語形変化」であり、「いわゆる「アルタイ型 (Altaic type) の言語はすべてこの原理に従っている。」としている (亀井孝・河野六郎・千野栄一 [編著], 『言語学大辞典 第6巻【術語編】』, 東京:三省堂, 1996 の「活用」の項, 222-224 頁参照). 河野六郎氏にあっては日本語 (あるいは朝鮮語も) の動詞の文法範疇を論ずること自体が無意味のようであり, 膠着語における文法範疇の体系の欠如を主張するものであるが, それを筆者はとらない.

¹¹ 高橋太郎 [他著], 『日本語の文法』, 東京:ひつじ書房, 2005, 300 頁. この派は日本語についても河野六郎氏のヨーロッパ型の諸言語における活用形と同じものを想定し, 動詞の活用形, 名詞の曲用形, さらには名詞の活用形 (=名詞+繫辞の活用形) を挙げている. この派は事実上膠着と屈折の区別をしていないかのようである. この派には日本語動詞の具体的な形の成立にかかわる考察は関心外のようであり, 事実上形態論の基礎的な部分が欠落していると言い得る.

¹² 詳しくは菅野裕臣, 「日本語の文法単位について」, 『韓国語学年報』, 神田外語大学韓国語学会, 第 11 号, 2015, 143-195 頁参照.

¹³ 詳しくは特に菅野裕臣前掲論文 (本稿【注】12 参照), 186-188 頁参照. 分離動詞等の術語はドイツ語の分離動詞にヒントを得たものではあるが, ドイツ語のそれが分離し得るのが統辞論的な理由によるものであるのとは異なり, 日本語のそれは副助詞の挿入によるものである. なお朝鮮語にも類似のものがある.

¹⁴ 詳しくは特に菅野裕臣前掲論文 (本稿【注】12 参照) 中の「分析的な形」148 頁参照.

¹⁵ 著者は恐らく関知しなかったと思われるが, その間スラヴ学その他ではこれについてのさまざまな試論が提出され, 精密化が行われている. 動的動詞 (динамический глагол) と静的動詞 (статический глагол), 動作動詞 (глагол действия) と非動作動詞 (глагол не-действия), 限界動詞 (предельный глагол) と非限界動詞 (непредельный глагол) 等々. Ju・S・マスロフ, 「スラヴ諸語アスペクト論の基本的な概念と述語の体系」, 菅野裕臣 [訳], 『動詞アスペクトについて(II)』, 学習院大学東洋文化研究所, 『調査研究報告』, No.35, 1992, 279 頁参照. また日本語のこのような問題については以下のものを参照. いろいろと問題をはらみながらも, この種の研究が確実に深化しつつある. 奥田靖男, 「アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—」, 奥田靖男著, 『ことばの研究・序説』, 東京:むぎ書房, 1984, 85-104 頁; 奥田靖男「アスペクトの研究をめぐって」, 同上書, 105-143 頁; 奥田靖男, 『奥田靖男著作集 言語学篇(2)』, 東京:むぎ書房, 378 頁参照. 朝鮮語については浜之上幸, 「現代朝鮮語のアスペクト的クラス」, 『朝鮮学報』, 138 輯, 天理:朝鮮学会, 1991, (1)~(93)頁参照.

16 著者はさらに次のように述べている。「母音語幹動詞「為」の語幹母音はもと
もとが e であるから、連結母音と交替しても、結果として母音は変わらない事にな
るが、玉づきの使の家礼婆(来れば) 嬉しきと(万十七・3957) このあが
家流(着る) 妹が衣の(万銃後・3667) の例に見られるが如く、語幹の kō- (来)
や ki- (着) を ke- に変えてそれぞれ ke-r-ēba、ke-r-u の形を作った。子音語幹に
附着する時には、連結母音の e を顕在せしめて「聞けり」kik-er-i や「思へり」
omöp-er-i) の形態を取るのは当然であるが、この e が命令形を作る文法接尾辞の
-e と同音(甲類)であるところから、橋本進吉氏がこれを命令形「聞け」「思へ」
等に所謂「助動詞」の「り」が附いたものとの誤った解釈を示された為、この考
えが通説と成っている。形態論的認識の欠如がなせる業と言えよう。」

17 亀井孝・河野六郎・千野栄一 [編著], 『言語学大辞典 第6巻【術語編】』, 東
京:三省堂, 1996 の「音便」の項(171-172頁) 参照。

18 なお母音の変化について諸氏が語る時、いわゆる開合に関して ð を開, ô を
合に当てるのが常識化しているが、池上岑夫氏のみがポルトガル語史の立場から
ô が開, ð が合となる可能性を示唆していることへの言及が皆無である。池上
池上岑夫訳, 『ロドリゲス日本語小文典』上・下, 東京:岩波書店, 1995 参照。

19 まさにこの観点から、『古事記』が実は712年ではなく平安朝に成った偽書で
あるとする岡田英弘氏の主張(『岡田英弘著作集 III 日本とは何か』, 東京:藤原
書店, 2014, 293-310, 392-398頁参照) に関して著者が筆者に対して疑問を表明し
ていたことを記憶している。もっとも岡田英弘氏はそもそも 8 母音説を信じて
いなかった。

20 なお “Bernard Bloch on Japanese”, edited with an introduction and analytic index by
Roy Andrew Miller, New Haven and London: Yale University Press, 1970, p. 9 (日本語
訳: 林栄一監訳, 『ブロック日本語論考』, 東京:研究社, 昭和50[1975], 8-9頁)
の正書法表記によれば, *tōta*(切った), *nōda*(汲んだ) の語幹は *kiq-*, *kun^v-*となる。
すなわち ^v は次の子音の有声化を示す。

21 日本語は漢語の影響によって(日本語の内的発展の結果という説もあるが)
生じた促音と撥音は, [t] と [n] という形で, 江戸時代後期まで存在した可能性
があるが(朝鮮資料による), 現代語は明らかにそれぞれ独立の特殊な音素であ
ると思われる。

22 著者が旧稿で -(i)ta を -Ta と表記したのは /-ta/ ~ /-da/ という形態音素論的交
替を考慮したものだろう。

23 高麗時代の口訣が南豊鉉氏の言うが如く解説されたとは信ぜられないのは
(南豊鉉, 『國語史를 위한 口訣研究』, 서울:太學社, 1999, 576 페이지参照) 解

読の方法が恣意的で信憑性に乏しいだけでなく、恐らく朝鮮語の文法接辞の頭音が子音であることが多く、接辞自体が音素交替を起こさないために、マイケル・ヴェントリス、ジョン・チャドウィック、アリス・コーパーたちが線文字Bの解読で行ったような科学的方法が採用し得ないことにあると思われる。南豊鉉氏の方法とは未解読の口訣字に対してもっぱら恣意的に選ばれた漢字の部分を該当させるものに過ぎず、南豊鉉氏の言うが如く、「解読はできたが、意味が不明である」が通用しないのは（これが通用するのはエトルスキ文字のような特殊な場合に限る）、韓国の多くの文法学者が南豊鉉氏らの「解読」の結果たる形態素の形を採用していないことにもあらわれる（例えば、故安秉禧氏も南豊鉉氏の解読を認めていなかった）。ちなみに中期朝鮮語においては子音で始まる自立語語幹が子音の脱落によって文法接辞化することがあった（例： 슴 - seub -「申す（謙讓動詞）」>（謙讓接辞化） -슴 - -seub ->（有声音の後） -슴 - -zeb ->（子音の脱落） -슴 - -eb ->（母音調和化） -슴 - -eb -/ -음 - -üb ->（現代語、丁寧接辞の一部、母音調和なし）[子音語幹+] -음 - -üb -/ -우 -/ -um -/[母音語幹+] -ㅁ -/ -b -/ -m -/[なお現在南北朝鮮の標準語では[子音語幹+] -슴 - -süb -/ -σub -/ -σum -/[母音語幹+] -ㅁ - -b -/ -b -/ -m -]としている。自立語の体言助詞化も起きている。第III語基や第IV語基がなんらかの子音で始まる形態素の頭音の脱落と母音調和化によって生じた可能性を排除し得ない。

²⁴ 看過できない朝鮮語だけの形態論上の特徴として用言（動詞、形容詞）語幹（あるいは語根、すなわち第I語基）がそのままの形で連体的に、あるいは副詞として、あるいは造語要素として用いられることが挙げられる。現代語にも固定したものとしてかなり残っている。例：늦-가을 nuj-gaur [nut-k'au]/ nuud-γaur / <晩秋> （遅い[語根]-秋），오-가-다 o-ga-da [o-ga-da]/ o-ga-da / <行き来する> （来る[語根]-行く[語根]-[終止形語尾]），있듯이 iss-dus-i [itt'uŋi]/ id-δus-i / <あるように> （ある[語根]-よう[体言]-[副詞接辞]）cf. 있는 듯이 iss-num dus-i [in-nun duŋ-i]/ in-num dus-i / <あるように> （ある[連体形現在]よう[体言]-[副詞接辞]），가지 않는다 ga-ji anh-nunda [ka-dzi an-nunda]/ ga-ji an-nunda / <行かない> （行く[語根]-[体言形語尾]しない[語根]-[終止形現在語尾]）[가지 ga-ji [ka-dzi]/ ga-ji / <行くこと[体言形]> の語尾 -지 -ji <中期語 -디 -di < *디 dei (디 de <名詞, こと>+ | i <主格助詞, が>)]. また次の例参照：곧 god [kot]/ god / <すぐ> （副詞）cf. 곧다 god-da [kott'a]/ god-δa / <まっすぐだ> （形容詞）；및 mic [mit]/ mid / <及び> （接続詞）cf. 및-다 mic-da [mitt'a]/ mid-δa / <及ぶ> （動詞）。次の例も参照せよ：첫 cös （現代語）[$\text{tʰət} \sim \text{tʰən}$]/ $\text{cət} \sim \text{cən}$ / <初めの> （連体詞）cf. 처심 cöz-öm <始め>—（現代語）처음 cö-üm [tʰöum]/ cöum [これは*첫- cös -<始

めてする>という動詞の語幹であると推定し得る] (ついでながら中期語の IV-m [動名詞語尾] の他に II-m, III-m という名詞形接辞があり, 語基の差により意味の違いがあった可能性がある. 他に次の例参照:(中期語)사름 säròm (IV-m) 살-sär-<生きある, 住む>の動名詞; 사름 säròm (II-m) — 사람 saram [sa:ram]/sa:ram/<人>; (現代語)묻-mud-<埋める>—무덤 mud-öm [mudòm]/mudòm/(III-m)<墓>). こうなると用言も名詞もそれらの語根が独立に連体的にふるまったことになり, まるで孤立語の如くである.

²⁵ 大野晋, 「日本語の動詞の活用の起源について」, 『國語と國文學』, 30:5, 1953 その他で大野晋氏が論じている. 著者は筆者あての2012年2月5日付の私信で「昭和26年に大阪市大助教授の濱田敦氏が京都開催の国語学会で行った講演【これは後に濱田敦, 「原始日本語に於ける閉音節語存在の假説」, 『國語學』, 9, 1952として発表された】に大野晋氏がヒントを得て書いたもの」であると述べておられる.

²⁶ この流派はマルクス主義言語学研究への志向から始まったが, しばしばソ連=ロシア言語学に対する誤解に基づく論を展開しており(特にアスペクト論), 今後そこからの脱却が大きく要求されるだろうと思われる.

²⁷ 確かに Bloch も -umai, -azu という形を提示している(本稿 7.2. の R・A・ミラー編「ブロック日本語論考」から引用された表を参照).

²⁸ 屋名池誠(1987)「活用—現代東京方言述部の形態=構文論的記述(2)—」, 『学苑』565, pp. 194-208(左開き), 昭和女子大学.

²⁹ 黒木邦彦(2012)「二段動詞の一段化と一段動詞の語段化」, 丹羽一彌(編)『日本語はどのような膠着語か—用言複合体の研究—』, 笠間書院, pp. 104-121 参照.

³⁰ 評者の注1は筆者の努力にもかかわらずどこにも探し出せなかったが, 多分ここに付けられたものであろう. 注1に曰く:「現代日本語の ko-, se-の分析とは異なり, 「所謂「カ行変格活用」と「サ行変格活用」も, 連結母音 i を持つ接尾辞を伴う時に, それぞれの語幹母音 ö と e とが連結母音と交替して, 語幹を ki- と si- に変える」(p. 209)【本稿 5.1.7.】としている。」

³¹ 黒木邦彦(2014)「テ形動詞に関する音韻規則の一般性と特殊性」, 『語文』102, pp.1-8(左開き), 大阪大学国語国文学会 (<http://shoin.academia.edu/KurokiKunihiko>) 参照.

³² 九州地方の伝統方言では, -(i)te -(i)tor- ‘継続’の初頭子音 t に破擦音 [tɕ, dʒ] (あるいは [tʃ, dʒ]) を対応させている. しかし, 次のとり, これらもやはり子音幹の連声を誘発する。(I) [mʲitɕe] ‘見て’ (日田市). [ko:tɕi] ‘買って’ (大分県, 唐津市肥前町, 南島原市山之津町). [netɕe:ta] ‘寝てた’ (大分県, 唐津市, 薩摩)

³³ 服部四郎 (1950) 「附属語と附属形式」, 『言語研究』 15, pp. 1-26, 日本言語学会 [再録: 服部四郎 (1960) 『言語学の方法』, pp. 461-491, 岩波書店]

³⁴ 岡田英俊 (1987) 「日本語の自動詞・他動詞の音韻分析」, 『東京大学言語学論叢 '87』 (pp. 63-78), 1987年12月, 東京大学文学部言語学研究室.

補¹ Collocation なる概念自体に厳密な規定がなく, 例えば英語で in spite of のような筆者の呼ぶ「分析的な前置詞」までもが辞書に含まれる (『新編英和活用大辞典』, 東京: 研究社, 1995, 2782 pp.). もっとも厳密な規定を持つものは旧ソ連のものだが (例えば, Л. П. Лопатина, Словосочетание в «Большой энциклопедический словарь Языкознание», Москва: Научное издательство «Большой энциклопедический словарь», 1998, стр. 469-470), しばしば Словосочетание の訳語に当てられる「連語」は間違えて理解され, ふさわしくないと思われる. 筆者は「単語結合」と直訳する. 言語学研究会編, 『日本語文法・連語論』, 東京: むぎ書房, 1983, 493頁参照. 「連語」はついに여춘연(呂春燕), “한국어문법연어”, 서울: 집문당, 2010, 364 페이지における「文法連語」という術語を生むに至ったが, これは筆者の言う「分析的な形」に該当するものであって適当ではない.

補² これを -(으)면 -(ü)myōn [子音語幹+] と表示したところで, いわゆる子音語幹그렇- gürōh- <そうだ> ~ 그러면 gürōmyōn <そうなら> の場合は当てはまらない (これは正書法上の子音語幹であって, 実際は母音語幹であると言ってよいのだが [ただし口頭語では終止形として그렇네 gürōhne [kurōnne] も現れる], アメリカ構造主義信奉者はやはり子音語幹扱いするであろうし, この点が大きな矛盾点となろう). それよりも朝鮮語史において母音語幹+ -으면 -ümyōn において-으- -ü-が脱落したという事実はないのであるから (*그렇으면 gürōhümyōn <そうなら> という形も *가으면 gaümyōn <行けば> という形も実在しなかった. 実在したのは그러하면 gürōhamyōn > 그러면 gürōmyōn <そうなら> という縮約形と初めから가면 gamyōn <行けば> という形だった), この表記は適当ではない. 記述の簡潔さ, 教育上の効果は決して文法記述の正しさを保障するものではなく, 通時的な変化が共時的な体系に変動をもたらす際にもそのことは明言すべきであると筆者は考える.

補³ 最後の2例は岡田英俊 (1987) 【本稿の【注】34参照】に当てはまらないものである. 勿論岡田氏は現代語だけを扱ったのだろうから, この現象は当該論文とは関係ないことになろうが, 指摘だけはしておく.

補⁴ 「構対 (こうつい)」は漢語「勾対」(ロシア語 паробразующий <対を成す>) をそのまま用いたもの. 構対有声音と構対無声音は例えばロシア語のそれぞれ /b/, /p/, /d/, /t/, /g/, /k/ 等を指す.

【付記】種々の資料の貸与について浜之上幸氏の多大なお世話になりました. 同氏に心からの謝意を表します.